地域交流研究

2011年度 年報 第8号

目 次

第8回地域交流研究フォーラム『大田堯先生ととともに考える "生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ…』

開始及び主催者の挨拶地域交流研究センター長 杉本 光司	4
基調講演として	
大田堯先生のドキュメンタリー映画『かすかな光へ』の上映	7
懇話会: 魔 氏(初等教育学科 教授)	
『第8回地域交流研究フォーラム』アンケートに寄せられた47名の感想	30
——— 2011 (平成23年度) 活動報告 ————	
. 2011年度の活動について(概況)	36
. 各部門の活動	38
- 2 . 発達援助部門 - 2 - 1 . S A T事業 - 2 - 2 . 地域教育相談室 - 2 - 3 . 地域情報教育 - 2 - 4 . 地域美術教育(新設) - 3 . 暮らしと仕事部門 - インターフェイスとメディアの活動	66
. 地域貢献活動	78
V. 地域交流研究教育プロジェクト V - 1 . たんぽクラブ - 稲作体験実習の取り組み - V - 2 . 大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査	87
(付)2011(平成23年度)地域交流研究センター担当教職員・運営委員	93

第8回地域交流研究フォーラム

『大田堯先生とともに考える "生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ…』

2012年1月28日 (土)

都留文科大学

第8回地域交流研究フォーラム

『大田堯先生とともに考える "生きる"こと、"学ぶ"こと、 そして未来へ・・・』

2012年1月28日(土) 12:45~15:30



会 場:都留文科大学2号館101教室

参加費:無料

問 合 せ:地域交流研究センター 0554-43-4341 (内線441)

主 催:都留文科大学地域交流研究センター

後 援:山梨県富士・東部教育事務所

都留文科大学 第8回地域交流研究フォーラム 2012年 1月28日(土)

主催者挨拶

地域交流研究センター長 杉 本 光 司

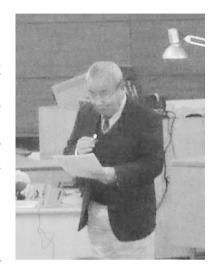
みなさま、こんにちは。

本日はようこそお出でいただき、ありがとうございます。

ただ今、ご紹介にありましたように、本学の地域交流研究センター長を、平成21年の4月からさせていただいております杉本と申します。私自身は、情報センター所属の教員として情報教育を担当しております。このセンターとの関わりは、発達援助部門の一つであります、情報教育の分野で、地域の小中学校との研究教育活動を通して参加させていただいております。

また、ここから非常に近い十日市場で生まれ、育った ということもあり、地域のために働けということで引き 受けさせていただいております。

さて、当センターの年間最大の行事として受け継がれております、この「地域交流研究フォーラム」も、本日、



ここに第8回目として開催することができました。今回は、私たち地域交流研究センターにおける活動の柱の一つであります「フィールド・ミュージアム」活動の源でもあり、また、本学の元学長であります、大田堯先生のドキュメンタリー映画であります「かすかな光へ」を取り上げ、テーマも『大田堯先生ととともに考える"生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ・・・』と掲げたプログラムを組み、皆様にはご案内して参りました。

しかし、本日、ここで、皆様にお詫びしなければならない緊急な状況となってしまいました。

実は、映画上映後の「大田堯先生をお迎えしての懇話会」ですが、大田先生が、階段で転倒、尾骶骨を打ってしまい、肩にまでその影響が及び、都留までの移動に大きな不安を持つこととなってしまいました。大田先生の健康状況、また、93歳というご年齢ということも考え、大田先生の欠席ということで、プログラムを進めさせていただくことも考えましたが、昨今のICT、通信技術の進歩の中、大田先生のご自宅と、この会場を結んだネット中継システムを利用することで、こちらのスクリーンを通して、さいたま市にお住いの大田先生と交流を持っていくことになりました。

大田先生と直接お目にかかれることを楽しみに、本日、この会場にお出でいただいた方々 もいらっしゃることと思いますが、どうぞ、このような状況をご理解いただき、ご了解いた だきたいと思います。

そして、本日のプログラムですが、これまでのフォーラムでは、各テーマにおける第一人者による基調講演をお願いしてきましたが、今回は、映画「かすかな光へ」を基調講演として、皆様にご鑑賞いただくことにいたしました。お手元の資料にもご案内のとおり、この映画は、先週1月16日に発表されました、映画界の伝統ある雑誌「キネマ旬報」の文化映画部門において、第8位に選定されました。そして7月からの東京でのロングラン上映を始め、北海道から沖縄までの各地の映画館や自主上映会で大きな感動を呼んでいる映画でございます。本学でも、昨年11月23日に上映会を開催し、雨の中にも関わらず、100名ちかくの方々に

お出でいただき、本日は2回目の上映会の開催ということになります。

映画上映後には、本センターにおいても、市内小中学校への学生を派遣する、学生アシスタントティーチャー、SAT活動の中心的な活動を行っております、初等教育学科の佐藤隆先生の司会により懇話会を開きます。ステージへの登壇者には、本学初等教育学科の西本勝美先生、山梨県富士・東部教育事務所の小川弘一先生、谷村第一小学校の渡辺正司先生、都留市社会福祉協議会の織田宗覚会長の4名の方々にお願いいたしました。そして、スクリーンを通して、ご自宅から大田先生にも参加いただきます。

本日ここに、このように盛大に開催できますこと、これまで地道に成果を積み重ねてこられた関係者の方々のご努力、そして本日この会場にお出でいただきました皆様を始め、力強く支えて下さいました多くの方々に対して深く感謝する次第でございます。また、今回、ご後援団体としてご承認いただきました、山梨県富士・東部教育事務所におきましては、中野所長様はじめ、多くの方々より心強いご支援をいただきましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。

これからの時間、大いに映画を楽しみ、感動していただき、そして、お帰りの際には、大田先生の生きる力を大いに感じていただければ幸いです。

それでは、第8回地域交流研究フォーラムの開催にあたっての始まりのご挨拶とさせていただきます。

「大田堯先生とともに考える、"生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ・・・』のテーマの下、現在93歳という年齢すら感じさせない、いや、これまで以上に精力的なご活動を続けておられる大田先生を、今、この都留文科大学にお迎えすることができることは大きな喜びでございます。

特に、地域交流研究センターにおける活動の柱の一つであります、「フィールド・ミュージアム」は、大田先生の学長時代の構想における実践の中から生まれたものであり、その心根は、今も、間違いなく、この「都留」の地に、生き続けております。

2011年7月には、大田先生のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」も完成・上映が始まり、多くの方々から賛辞を寄せられながら、現在も、日本のあちらこちらに感激を与え続けております。

このような中、このフォーラムでは、基調講演と位置づけ、「かすかな光へ」を上映することにいたしました。この映画の中に流れる、「ちがう」かかわる」がわる」何かを、感じていただき、大田先生とともに考える場として、このフォーラムを開催いたしますので、教育や福祉に興味・関心をお持ちの皆様だけでなく、この映画そのものにご関心のある方々のご参加をお待ちしております。

プログラム

場 所:都留文科大学2号館101教室

日 時:2012年1月28日 (土) 12:45~15:30

開会の挨拶 杉本光司(地域交流研究センター長)

基調講演 (13:00~14:25) 映画『かすかな光へ』の上映

懇 話 会 14:35~15:25 「大田堯先生をお迎えして」

司 会:佐藤隆(初等教育学科教授)

西本勝美(初等教育学科 教授)

小川弘一(富士・東部教育事務所 主幹)

渡 辺 正 司 (谷村第一小学校 教諭)

織 田 宗 覚 (都留市社会福祉協議会長)

閉会の挨拶 畑 潤(社会学科 教授)

大田 堯 略歴

おおた たかし

教育学者。東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授。日本子どもを守る会名誉会長。 東京帝国大学文学部教育学科卒業。東京大学教育学部教授、都留文科大学学長、日本教育学会会長などを歴任。専攻は教育史、教育哲学。93歳の現在も講演・執筆にエネルギッシュに取り組んでいる。広島県出身、1918年生まれ

<主な著作>

「かすかな光へと歩む」(一ツ橋書房)、「教育の探求」(東京大学出版会)、「教育とは何か」(岩波新書)、「地域の中で教育を問う」(新評論)、「子は天からの授かりもの」(太郎次郎社)、「生命のきずな」(偕成社) 他多数

都留文科大学 第8回地域交流研究フォーラム 2012年 1月28日(土)

映画『かすかな光へ』の上映前の 大田堯先生からのご挨拶

皆様、この映画のためにわざわざお運びをいただきましてありがとうございます。大田堯 でございます。

実はこの映画をご覧になった方々の感想の中に、この映画は大田堯の自伝だというふうに思って御覧になっている方がかなりいらっしゃると思うんですが、これは自伝ではございません。私のような年老いた1人の研究者が、今のこの現実、日本の社会の状況、地球全体の状況というものを直接に見まして、どういうふうにそれに対して関心を持ち、また、どういうふうにこの世の中というものが変わっていったら良いのかと、そういうようなことを私はこの映画を通じて私の夢を語らせていただく、一老研究者の夢物語というふうにお考えくださった方が良いのではというふうに私は思っています。

もう1つ、この映画をご覧になった方は、私が教育の研究者であるということから、教育映画というふうにお考えになっている方がおありになると思います。しかし、実の所、私、確かに教育を研究の対象としてあったんですけれども、研究を進めているうちにだんだん教育という言葉に違和感を感ずるようになりました。その違和感というのは例えば、明治の初めに「education (エジュケイション)」という欧米から入ってきた言葉を「教育」というふうに訳した。これは誤訳ではないのかというふうなそういう思いになってきました。そういう「教え育てる」というようなものであるよりも、スマップの歌にありますけれども、ただ1つのユニークな種だという、そういう一人ひとりの子供なり人間なりや、それぞれに持っている自分の種を花開いていく、そういう力っていうものをみんなが与えられているというふうに私は考えるので、自ら選んで変わっていくという学習力というものに、実は、介添えをしたり、あるいは、また新しい情報を提供したりするということが、本当は教育の姿じゃないかというように、私は考えるのです。そういうことから考えると、本当の教育というのは命と命の響き合いではないかというふうに考えるようになりました。

あたかも、3・11東日本大震災の不幸な事態が起こりましたけれども、ここで一番問題になるものは、所詮は物や金ではなくて、「いのち」、「いのち」、「いのち」という、そこからものを考えていくということ、それを大事にするためのお金であったり、それを大事にするための物であったりするような世の中、そういうものに変わっていかないと、本当の復興というものは成り立たないのではないかというふうに、夢として、かすかなる光として、考えていく次第でございます。

よろしくお願いいたします。

ドキュメンタリー映画

かすかな光へ







製作・著作:ひとなるグループ

監督:森 康行

音楽:林光

詩:「かすかな光へ」作・朗読 谷川俊太郎 ナレーション:山根基世 朗読:津嘉山正種ほか 2011年/84分/DV/4:3/カラー/日本/ドキュメンタリー

配給:ウッキー・プロダクション

配給・お問い合わせ:ウッキー・プロダクション(猿田)

〒102-0074 東京都千代田区九段南4-3-3 シルキーハイツ九段南 2 号館606

TEL: 03-5213-4933 FAX: 03-5213-4934 携帯: 090-2219-7894

Mail: yus@solid.ocn.ne.jp

< 映画概要 >

~ 大田堯 生命のきずなへの道程 ~

戦前戦後を通して日本の社会と人間を見つめ、教育のあり方を問いつづけてきた教育研究者 大田彝。

さまざまな生活現場に生きる人たちとふれあう中ですすめてきた大田尭の教育研究は、「教え育てる」という既成の教育観を根底から覆すものである。生きるとはどういうことか。なぜ学ぶのか。学校教育にとどまらず、人生を生きぬく条理を探求する。教育を通して人間を見つめつづけてきた大田堯の思索と実践の軌跡を映し出す。

< スタッフ >

題名の「かすかな光へ」は谷川俊太郎の同名の詩により、朗読は詩人自ら行っている。林光の音楽は、大田堯の思索と行動を伴走して、明るい。監督は、夜間中学の記録映画「こんばんは」(2003/第一回文化庁映画賞 文化記録映画大賞受賞/キネマ旬報ベストテン 文化映画第1位/毎日映画コンクール記録文化映画賞受賞)の森康行。編集は「ビキニの海は忘れない」(1990)、「渡り川」(1994)など、森の作品すべてにかかわってきた古賀陽一が担当した。

http://kasuka-hikari.com/

< 作品解説 >

戦前戦後を通して、日本の社会と人間の肌にふれ、今年93歳を超えた教育研究者、大田堯。 東京帝国大学の大学院生から、一兵卒として召集された戦争体験。そこで待っていたのは36 時間の生と死が交錯する漂流、生きる力を試されたジャングル

生活に根ざした知恵と力を身につけた農民兵、漁民兵などの労働者との出会い。

「教育によって愚劣」になった知的エリート。植樹の知識から実生 (みしょう) の知恵への再生を願望。ここから人間にとって「教育」とは何かの終生に及ぶ問いかけが始まる。



敗戦直後、さまざまな職業の地域住民の参加で行った広島県三原市本郷町での地域教育計画。"民衆の学校"を目指した試みも朝鮮戦争による日本の逆コースへの転換によって挫折。そして、村で失意の状況におかれた「不良青年」たちとの共同学習、国益本位の教育施策、国を被告とする家永教科書裁判、その他での挑戦。大田堯の人生は、日本の戦後と真正面から向かい合っていく。



生活。

その中でつかんだ教育とは、生物としての人間、誰でもがもつ細胞の中のユニークでダイナミックな人生設計図の開花を援助し、励ます環境を創り出すこと、演出活動であり、アートだという。従来の上から教えて、知識注入、あわせて変心、同化を求めるという既成の「教育」の観念を根底から覆すことをめざしてきた。

いま人生の最終段階で、法の「想定外」の重い障がい者が自ら好んで社会的に価値あるものを創り出す福祉施設「川口太陽の家」と出合う。そこで思春期を過ぎた障がい者が、感性、心と心のひびきあいの中で一人の労働者として生きる協同の姿にふれる。その施設の北東には人口200万の都市社会の只中に1260haの広大な緑地がある。そこをフィールド・ミュージアムとして保存、活用、そこでの新しい人間関係の創造へとつなげる。その憧れは、ヒトのおごり、マネーや科学・技術の成果など、無機的なものへの過信を抑えて、自然の摂理にそうた"生命あるもののきずな"の再生へと向かう。

とうろう

「蟷螂(かまきり)の斧」 大田 堯/登場

2011年6月20日

3.11東日本大震災は、私たちの映画の内容がようやく出来上がった後での衝撃的な出来事でした。多くの生命が失われ、資財も無に化することになりました。人々は「これからどう生きるか」の深刻な問いに直面しています。私は、今回の事態が想定外の自然の力の働きがきっかけとなったとはいえ、原発を含む明らかな人災によるものであると考えています。「これからどう生きるか」の問いは、直接罹災した人たちの問題にとどまることなく、日本人、いや世界の人々への問いかけであると考えます。

今回の罹災の現場では、まず自分の生命をどう守るかの問いとともに、「誰が、どこに」の問いが切実なものとして人々の間にあったはずです。我が子の消息を知ろうと、敢えて引き返して、津波にさらわれたお母さんの出来事には、胸に突き刺さるような衝撃を受けました。生命のきずなのむごい断絶です。

それにつけても思うことは、こうした悲劇的な事実にはるかに先立って、生命と生命のきずなの危うさは、現代社会の現実として、潜在的に日常化していたということです。つまり、モノとカネ優先の社会では、地球上の自然破壊が日々進行し、人間関係はごく身近なところから疎遠になり、互いに自分を見失うという事件が日常生活の中で、次々に発生していたのです。おそらく貧富、生活信条の格差に根ざすテロ、弱者(子どもを含む)への虐待、動機不明の重大犯罪、自殺などなど数えればきりがありません。

今回のような事態の背景には、自然の摂理へのヒトという動物のおごりがあってきたこと、それらに対する深刻な反省なしに、 モノとカネによる 「復興」 がおこなわれたとしても、生命と生命のきずなの危うさは、取り残されたまま、更なる悲劇を招くことになりかねません。

モノとカネの支配下にあるこの現実を、自然から与えられた生命と生命のきずなによるセーフティネットに根ざしたものに建てなおすことは、次世代に対する、私たち世代の責任だと考えます。この映画では、このきびしい現実に対して、できるだけ身近なところから、挑戦を試みる年老いた研究者の夢を描きだしていただくことになりました。

「ちがうこと」「自ら変わること」、そして「かかわること」、およそすべての生きもののそなえた生命の特質を手がかりとして、人間の尊厳、基本的人権を軸とするセーフティネットの創造につなげることで、モノとカネが支配する社会に、何とかくさびを入れる、そういう夢を持ちつづけてきました。その挑戦は、巨人に挑む「蟷螂の斧」にも似た途方もないこと

なのかもしれません。

これまでのところ、ささやかな一つ一つのこころみも成功の手ごたえを得たとまで云える ほどのものはありません。それでも、きびしい現実にとりくむ人々に思いをはせながら、そ のかすかな光をめざした一歩々々の中で、快く夢を分かち合う多くの仲間と一日々々を過ご しております。

この映画を通じて、一人でも、二人でも新しい仲間ができることで、残り少ない余生を送 ろうと思っております。

「見果てぬ夢を見続けて」 森 康行/監督

思わぬことからこの映画「かすかな光へ」にかかわることになり、あっという間の5年間でした。その試行錯誤の年月の中で産声をあげたこの映画は一体どんな社会に生み出されてきた子どもなのか、そしてこれから育ての親や名付け親など、さまざまな役割を果たすであるう人たちとの関わり合いの中で一人前に育ち、一人歩きできるようになるのであろうか、期待をこめて、この世に生まれてきたわが子「かすかな光へ」について考えてみることにします。

【何故教育を描くのか】

私は今まで作ってきた映画から教育にかんする記録映画を得意とする監督だと思われてきた節があります。しかし、まったく教育そのものに関心もなければ、勉強したこともありません。しかし、全ての作品は教育と関係のあるものばかり。なぜだろう?「ビキニの海は忘れない」は高知県の高校生が闇の中に葬り去られていた「ビキニ事件」を地域の学習を教師や大人と行う中で、埋もれていた核の恐怖を白日の下にさらした作品でした。続く「渡り川」はその高校生を支える教師や大人たち、さらにはそれを取り巻き励ます地域の人々の温かいまなざしが満ちている共同体を描きたかったものでした。「こんばんは」もまたさまざまな社会的状況の中で学校に行くことができなかった人たちが学ぶことと人とのつながりで人生を生き直していくという映画でした。私の育ったのは、ちょうど高度経済成長の真っただ中を経てバブル時代という時期でした。そこで目にしたのは地域の崩壊、それに伴う人間関係の希薄さが促進され、「学力神話」がはびこり、競争社会こそすべてというものでした。

しかし、私が映画の中で見てきた教育には巷間伝えられる学校教育の荒廃や問題行動ではなく、人と人との心の底からの信頼があり、そこから良質な人間ドラマが醸し出されていました。確かに、その都度の時代や社会状況で現れる困難さは多士済々だと思います。しかし、教育の本質・真理は人間同士が世代を超えていかに結び合って、それぞれの人生を精一杯生き抜くことができるのか、そこを培うものこそが教育であり、だからこそ最良のドラマが教育という営みの中から生まれるのだと思ったのです。そして私のモチーフは今回の「かすかな光へ」と続くのです。

【スクリーンを通して目指したいもの】

今回の映画で大田堯さんのサークルにお邪魔した時です。ある質問をしました。「村落共同体はもう再生しないのでしょうか?」先生の答えはこうでした「これからは新しい人間関係、共同体を考えていかなければいけない時代ですよ」そこから今回の映画作りが始まったように思えます。大田さんが常日頃からいう「人はすべて違うんだ。それを認め合ってこそ、一人ひとりを大切にすることができる」「それでこそ他人の身になって考えることができるんだ

よ」この映画のチラシにも書いてあるように「教育は心と心が響きあってこそ成り立つもの」 それは教育の世界だけではなく私たちが生きている社会全般に言えることではないでしょう か。そしてそれは人間がお互いに信頼しあう関係を網の目のように張り巡らせることができ た時、誰もが大切にされる社会の礎になるのではないかと思います。それこそが、この映画 の題名でもある「かすかな光へ」と向かう道筋ではないかと、映画を撮り終えた今、思って います。

私は映画というものはスクリーンを通してまだ見ぬ多くの人々とスタッフが出会い喜怒哀楽を共有するものと考えています。この映画も多くの人たちと出会うことで一人ひとりの中で「かすかな光」が垣間見えればと願っています。

最後に、過酷な映画作りを支えてくれたスタッフに感謝!

映画中登場・キーワード解説

戦後生活綴方

生活綴方運動とは、1930年前後からおこった民間教育運動。子どもの文の書き方や鑑賞の 仕方を超えて、ありのままを自由な感情で表現することを目指す教師たちの運動。しかし、 1940年頃から官憲により弾圧が行われ、運動は中断。戦後、「新教育」への批判に立った生活 綴方の教育実践『山びこ学校』(無著成恭編、1951年)が脚光を浴びると、運動は再び全国的 に展開された。

本郷地域教育計画

1947年、戦後の民主主義の理念にもとづき誕生した「社会科」。それは戦前の中央集権の教育から、地域や児童生徒の実態に応じて行われる新しい教育を目指すものであった。広島県旧本郷町(現三原市)では、大田堯氏と若い教師が中心になり地域住民と懇話会を結成し、住民参加の地域づくりと子どもたちの教育が試みられ実践された。

口八台

1954年から浦和市西堀で行われていた「西堀青年学級」の通称。当時、家を継ぐあてもなく、学校からも鼻つまみ扱いされていた農家の二、三男たちが、夜な夜な河原の無料のベンチ (ロハ台) をたまり場にして日頃のウサをはらしていたことから名付けられた。村に青年学級ができると、彼らは冬の寒さをしのぐためにロハ台から西堀青年学級に集うようになる。そして青年たちの話合いの記録が重ねられていく。

家永裁判

高等学校日本史教科書「新日本史」(三省堂)の執筆者、家永三郎が教科書検定の不合格を不服として「教科書検定は憲法違反である」と、国を相手に提訴した裁判。1965年の第一次訴訟に始まり、1997年の第三次訴訟の終結まで実に三十二年間にわたり争われた。1970年、第二次訴訟第一審で下された杉本判決は、国民の教育権論を展開し、家永を全面勝訴に導く。

都留文科大学フィールド・ミュージアム

山梨県都留文科大学は、都留市が経営する教員養成の公立大学法人。大学内に設けられた 地域交流センターでは、動植物の本来の姿や営みを観察、学習するフィールド・ミュージア ムの活動が行われている。フィールド・ミュージアムは、モノに直に触れ本来の姿を学びつかみ取る「野外博物館・自然博物館」であり、そこから人間性の回復、人間と自然の関係、自然と共存する暮らしのあり方を探求する。http://www.tsuru.ac.jp/

ほんごう子ども図書館

広島県三原市本郷町の公設民営の図書館。2001年、大田尭氏が土地を町に寄贈し建設された。絵本の「読み語り」をとおして、子どもと大人たちの人間関係の輪が広げられている。図書館の近くには、「なんじゃもんじゃ広場」が設けられ、本のなかのバーチャルな世界となまの自然を結びつけ、子どもたちの感性を豊かに育む。2011年7月に開設十周年を迎え、「かすかな光へ」を上映予定。http://www.mihara.co.jp/kodomotosyokan/

川口太陽の家

障がい者の発達と権利の保障を理念に「みぬま福祉会」が結成。1984年に無認可施設「太陽の家」を設立し、1986年に「川口太陽の家」を開所する。それぞれの個性に応じた労働をとおして社会の一員となることを目指す知的障害者更生施設。施設は障がいの種類や程度にかかわらず誰でも入所でき、自由な表現活動をとおして感性と感性が響き合う協働の仲間づくりが行われている。http://minuma-hukushi.com/shisetu/kawaguchi/index.shtml

サークル活動

大田尭氏の自宅で行われている学習会。青年学級(ロハ台)に始まる学習会は、現在教師の学習サークル「子どもの目」として、50年以上にわたり続けられている。さらに無縁社全といわれるなか、子育て中の母親、中小企業の経営者、中国の留学生らといった職業も立場も異なる人たちと顔と眼を向かい合わせた学習会が重ね続けられている。

見沼たんぼ

東京都心から20~30km圏内に位置する見沼たんぽは、約1260haの貴重な大規模緑地空間。 高度経済成長期に開発の波にさらされたが、一部の開発に慎重な行政職員と農民や市民が自 然保護運動を展開し、生きものを育む豊かな自然と景観を守ってきた。見沼たんぽの歴史は 古く、独特の文化・伝統が継承されている。

スタッフ・登場人物紹介

森 康行 (もり やすゆき)/監督

1950年静岡県生まれ。1978年、短編の文化映画『下町の民家』(東京都の制作)で初監督。以後、数多くの短編記録映画を生み出すと共に、テレビ・ドキュメンタリーの演出をてがけている。主な作品は、1990年、被ばくの問題を現代の視点で考えようとする高校生を描いた記録映画『ビキニの海は忘れない』(90年/キネマ旬報文化映画第10位・日本映画ペンクラブ優秀作品・日本映画復興会議奨励賞)、1994年、郷土史をひも解く中で朝鮮人強制連行の足跡に出会う高校生が大きな歴史の流れを問い直す記録映画『渡り川』(94年/毎日映画コンクール『記録文化映画賞(長編)』・キネマ旬報文化映画第1位)、2003年、夜間中学の学びをみつめた記録映画『こんばんは』(第9回 平和・協同ジャーナリスト基金 基金奨励賞/キネマ旬報ベストテン文化映画第1位、日本映画ペンクラブ賞日本映画ノン・シアトリカル部門第1位 第58回 毎日映画コンクール 記録文化映画賞、第一回文化庁映画賞 文化記録映画大賞ほか)。

大田 堯 (おおた たかし) / 登場

1918年広島県生まれ。教育研究者。東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授。日本子どもを守る会名誉会長。

東京帝国大学文学部卒業。東京大学教育学部教授、日本子どもを守る会会長、都留文科 大学学長、日本教育学会会長などを歴任。専攻は教育史、教育哲学。93歳の現在も、講 演や執筆にエネルギッシュに取り組んでいる。

主な著作「かすかな光へと歩む」(一ツ橋書房)、「教育の探求」(東京大学出版会)、「教育とは何か」(岩波新書)、「地域の中で教育を問う」(新評論)、「子は天からの授かりもの」(太郎次郎社)、「生命のきずな」(偕成社)「子どもの権利条約を読み解く」(岩波書店) ほか多数。

林 光 (はやし ひかる) /音楽

1931年東京生まれ。東京芸術大学作曲科中退。作曲家。1953年間宮芳生、外山雄三らと「山羊の会」を結成。同年、「交響曲ト調」で芸術祭賞を受賞。56年「オーケストラのための変奏曲」で第四回尾高賞を受賞。同年、映画「裸の島」(新藤兼人監督)で第二回モスクワ映画祭作曲賞を受賞。日本語と音楽との自然な結びつきを探究し、オペラシアターこんにゃく座の座付作曲家として「森は生きている」「変身」などのオペラを作曲、オペラ「吾輩は猫である」(1998)により第三十回サントリー音楽賞を受賞。90年代には器楽曲の分野でも、「第三交響曲<八月の正午に太陽は・・・>」(90)、「ヴィオラ協奏曲<悲歌>」(95) などの重要な作品が書かれ、後者は第四十四回の尾高賞を受賞した。他方俳優座、黒テントと共働した音楽劇、そして映画音楽、宮澤賢治、ブレヒトの歌曲など多数。またNHK大河ドラマ「国盗り物語」「花神」「山河燃ゆ」などの音楽はお茶の間でも親しまれた。

谷川 俊太郎 (たにかわ しゅんたろう) / 詩・朗読

1931年生まれ。東京都出身。東京都立豊多摩高等学校卒業。詩人、翻訳家、絵本作家、脚本家。1952年、処女詩集『二十億光年の孤独』刊行。詩作と並行して歌の作詞、脚本やエッセイの執筆、評論活動などを行う。1962年に「月火水木金土日のうた」で第4回日本レコード大賞作詞賞受賞。1964年からは映画製作に、1965年からは絵本の世界に進出。1967年には初の訳書となる『あしながおじさん』を出版。翻訳においては、およそ50種類の著作を手がけ、1975年には『マザー・グースのうた』で日本翻訳文化賞を受賞。1983年『日々の地図』読売文学賞、1985年『よしなしうた』現代詩花椿賞、1993年『世間知ラズ』萩原朔太郎賞、2008年『私』詩歌文学館賞、2010年『トロムソコラージュ』鮎川信夫賞受賞。出版した詩集・詩選集は80冊以上。子どもが読んで楽しめるようなものから、実験的なものまで幅広い作風を特徴としている。また、日本にとどまらず、様々な国で作品が翻訳され世界的な評価も高く得ている。

山根 基世(やまね もとよ)/ナレーション

1948年生まれ。山口県出身。早稲田大学第一文学部卒業。フリーアナウンサー。元NHK エグゼクティブアナウンサー (理事待遇)、前アナウンス室長。現在、有限責任事業組合「ことばの杜」の共同発起人。主婦や働く女性を対象とした番組、美術番組・旅番組・ニュース・「ラジオ深夜便」など幅広く担当。NHKスペシャルなどの大型番組でも、原稿を隅々まで耕し、手を入れつくした山根流の語りは、見るものに深い感慨を発酵させる。2000年第26回放送文化基金賞受賞。2005年女性として初代アナウンス室長。2007年NHK退職後、LLP「ことばの杜」を設立し代表を務める。2008年第54回前島賞、2009年第9回徳川夢声市民賞を受賞。現在、東京大学客員准教授も務める。

津嘉山 正種 (つかやま まさね) / 朗読

1944年生まれ。沖縄県出身。那覇商業高校卒業。俳優。高校卒業後、琉球放送勤務のかたわら放送劇団「創造」に所属。1964年に上京し、翌年 劇団青年座へ研究生として入団。1987年、「NINAGAWAマクベス」の主演平幹二郎の代役としての英国ロンドン公演に参加、注目を浴びる。洋画吹替、外国テレビドラマ、アニメーションなどで声優としても広く活躍。1988年4月、クモ膜下出血に倒れるが、その年の年末には舞台「テンペスト」で復帰。2005年、2009年にも体調を崩すも、同年中に復帰を果たし、現在もTV、ドラマ、CM、舞台などで活躍中。

第30回紀伊國屋演劇賞、第4回読売演劇大賞最優秀男優賞、第61回芸術選奨文部科学大臣賞 演劇部門などを受賞。

スタッフ一覧

製作・著作:ひとなるグループ

監督: 森康行

音楽:林光

詩:「かすかな光へ」作・朗読 谷川俊太郎

ナレーション:山根基世

朗読:津嘉山正種ほか

撮影:西島房宏、前川光生、川越道彦、野間健、梅林國男

編集: 古賀陽一

音響効果:八重樫健二

録音:東京テレビセンター

配給:ウッキー・プロダクション

2011年 / 84分 / DV / 4:3 / カラー / 日本 / ドキュメンタリー

配給・お問い合わせ:ウッキー・プロダクション (猿田)

〒102-0074 東京都千代田区九段南4-3-3 シルキーハイツ九段南2号館606

TEL:03-5213-4933 FAX:03-5213-4934 携帯:090-2219-7894

Mail: yus@solid.ocn.ne.jp

第8回地域交流研究フォーラム

テーマ: 『大田堯先生とともに考える"生きる" こと、"学ぶ"こと、 そして未来へ・・・・』

開催日時: 2012年1月28日 (土) 12時45分~

会 場: 2号館101教室

主 催:都留文科大学地域交流研究センター

後 援:山梨県富士・東部教育事務所

【懇話会】 「大田彝先生をお迎えして」

大田先生の自宅と会場を結んでのネット中継

司 会:佐藤 隆 (初等教育学科 教授) 登壇者:西本勝美 (初等教育学科 教授)

小川弘一 (山梨県富士・東部教育事務所 主幹)

渡辺正司 (谷村第一小学校 教諭) 織田宗覚 (都留市社会福祉協議会長)

ネット中継協力者: (「情報メディア演習」受講学生) 高村康大(国文学科4年)、大内一真(国文学科3年)、 小林睦哉(英文学科3年)、大久保来夢(英文学科3年)、 朴 賢娥(比較文化学科3年)、石澤謙輔(社会学科3年)、 大久保祐真(社会学科3年)、糟谷 岳(社会学科3年)、 富田麻友(社会学科3年)、持田睦乃(社会学科3年)

都留文科大学 第8回地域交流研究フォーラム 2012年 1月28日(土)

第8回地域交流研究フォーラム 懇話会

持 田: これより懇話会をはじめさせていただきます。これからは佐藤隆先生に進行をお願いいたしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

佐 藤: それでは懇話会の方を始めたいと思います。今日はこういう形で始めさせていただきますが、あの・・・今、映画を見た、皆さんの中にそれぞれ、様々な考え、感想をお持ちかというふうに思いますけれども、これを『少し焦点を絞って、考えてみよう』ということで、今日は4名の方にパネリストとして、ご参加いただきました。また、大田先生からは、ご自宅の方からご参加いただくというような形で進めてまいりたいと思います。非常に時間が限られておりますので、十分お話ができる時間がないかもしれませんけれども、短い時間です



がよろしくお付き合いください。私は今日の司会を務めさせていただきます、佐藤 隆と申します。よろしくお願いいたします。それではまず、大田先生の紹介を簡単 にさせていただいて、始めていきたいと思います。映画の中でもご紹介ありました けれども、そしてまた皆さんにとっては、ご紹介するまでもないかもしれませんけ れども、大田先生は1977年から1983年まで、本学都留文科大学の学長として、大学 運営にあたられました。本学を地域と自然に根差す大学、そしてまた、学生一人ひ とりの持ち味を大事にしながら、教師教育を探究する大学として全国にその存在を 知らしめてくださった方でもあります。また先生は、映画の中にもありましたが、 日本教育学会の会長として、あるいは教育科学研究会の委員長として、様々な、問 **題提起をされておられました。それらの提言はまさに多岐にわたっております。今** 日の映画の中でも、様々な、私たちが考えるべき問題提起をなされましたけれども、 その根底にはいつも「教育は何のためにあるのか?そして誰のためにあるのか?」、 という問いが込められて、また「支配する側ではなく、弱い者への共感、弱きもの への共感、そういったものを根底にすえられながら、問題を考えていこう」、そうい う問題提起を数多くなされてきたように思います。本日の映画『かすかな光へ』こ れもそのような先生の姿を追うことを通して、今という時代の中で、私たちが何を 考え、何を大切にしながら生きていくべきか、こういったものを追おうとされてい たように思います。本日はこれから限られた時間ではありますけれども、今日おい でいただいている4名の方に、それぞれ、映画を見ての感想を、ご自分の今なさっ ているお仕事と重ねながらご発言いただきたいと思います。それでは早速ですけれ ども、小川先生よろしいでしょうか?

小 川: 皆さんこんにちは。私、富士・東部教育事務所で、今、地域教育の方を担当して おります、小川と言います。大田先生こんにちは。大丈夫ですか?

大 田: こんにちは。(会場 笑)

小 川: 私、1979年から83年までこの都留文科大学に在籍していまして、先生がちょうど 学長さんをなされていた年の学生です。また、1988年だと思いますが、上野原高校 で、学年主任をしてました時に・・・1 年生の生徒たちに先生のお話を聞かせたくて、 大胆にも先生にお電話をして、「絶対無理だろう」と思った んですが、なんと先生が来てくださいまして、山梨県の上 野原高校で生徒たちにお話をしていただいたものです。本 当にその節はありがとうございました。

大 田: どういたしまして、忘れました、もう。(会場 笑)

小 川: 今日の映画の感想と言いますか、先生の出されています 本を読ませていただく中で高校の担当をしてます者の関係 におきまして、今の高校生、本当に、自分の登場する場面



が少ないと言いますか、あるいはその生き方、生きる力ということは、いろんなところで耳にするんですけども、生き方と言いますか、自分がどういうふうに生きるかということを考える、そういった時間と言いますか、場面が非常に少ないなと私も非常に感じています。そういった中で先生の今日の映画を含めましてですね、「関わりを持つとか、あるいは人は違うんだとか、そういったものが非常に、子どもたちにも伝えたい内容だ」というふうに感じています。教師も一人の人間でして、あのー・・・なんて言うんでしょうか?我々、生徒指導や進路指導とか、要するに「こっちを向いて俺の方へついてこいよ」みたいなところがあるんですけども、自分の今までの教員生活も含めて、もう一度見つめ直して、先生のおっしゃるように、新たなところへ、自分が歩んでいけるように、考えていきたいなというふうに今日は思いました。ありがとうございました。

大 田: ありがとうございました。どうも。

佐藤: よろしいですか?それでは引き続きまして、渡辺さんお願いいたします。

渡 辺: 大田先生今日はありがとうございました。私は都留文科 大学の出身で、現在は、この都留文科大学を学区に持つ谷 村第一小学校に勤務しているものです。本日はドキュメン タリー映画を拝見し、先生の生涯にわたっての教育研究に 関わっておられる、バイタリティーあふれる姿を見て、さ らに人と人との心の繋がりを大切にしているそんな活動を 見るにつけ、「私自身も決意は新たにまた、子どもたちに接 していかなければなぁ」ということを再認識させられまし た。先生の映画の中には、今生きる私たちにとって様々な



ご示唆があったように思います。中でも教育に関わる者にとっては心の中に重く止めて、指導に当たらなければならない、人と人との関わりというところについて、お話がありました。自分も日々感じているわけですが、現在は時代とともに、家庭や地域社会が非常に変化をして、様々な要因が考えられるとは思いますけれども、人間関係が希薄になっているなんていうことは言われています。そのような中で、「現代の子どもたちは、人との関わり方があまり得意ではないのかなぁ」なんていうことを日々感じております。ちょっと前の子どもたちと比べましても、「相手と関わる力、コミュニケーション能力がちょっと不足しているのかなぁ・・・」そんなことを日々感じております。小学校という沢山の子どもたちが共に学ぶところでは、「人と人の関わりが非常に大事であり、子どもたちはその中で成長していくんだなぁ」ということを先生のこの映画を見て、自分もまた再認識したようなところがあります。「「子どもたちが互いに関わり合って、信頼関係を築きながら、自分の考えを持ち、自立していく・・・』そんなふうなところで子どもたちを支えていけたらなぁ」なんていうふうに思っております。昨年、東日本大震災なんていうところを経験しましたので、そんなところからやはり「人と人が関わりながら生きていくっていうこ

とが今、大切にしていかなければならないことかな」っていうことを改めて感じま した。ありがとうございました。

大 田: どうもありがとうございます。

佐藤: それでは、織田さんにお願いいたします。よろしくお願いいたします。

織 田: 皆さん、こんにちは。また大田先生、御無沙汰をしておりました。私、先生が赴任をされて来たときに、大学の事務局の方におりました織田と申します。本日は福祉協議会の方の代表で出て来いというふうなことで、本日お邪魔をさせていただきました。それは、地域交流研究センターの杉本先生、またボランティアサークルのパーサスの皆さん方、非常に福祉事務所の方に多大なご協力をいただいておるというようなことの中で、この席にいるわけでございますから、私、先生が赴任されて来られて、そ



の在任中、ちょうど、事務局の方におりまして、学長先生に大変な迷惑をかけたこと もございました。そういう中で非常に先生、「情熱的な方だなぁ」というふうに、ご在 任中そのように感じを受けておりました。大田先生が去られた後、読売新聞のコラム の方にですね、先生がお書きになった文章がございまして、それをちょっと今日、先 生の映画を見て思い出したわけですけれども、当時のことでございますけども、「今 の親御さんたちは子どもの成長の芽を摘んでしまっている』と、こういうような書 き出しでございました。「どういうことかな?」というふうに思いましたら、子ども たちは家庭の中で自分の存在感を示すところが無くなってしまっている。これは何 かというと、「親が全て、子どもができるところをみんなやってしまっているからだ」 というような内容だったというふうなことを記憶をしております。私もちょうどそ の頃は、子育ての真っ最中でございましたので、「大変いいヒントをいただいたなぁ」 と思いました。子どもにできる玄関の掃除だとか、食事の後の自分の食べたものの 片付けだとか、できることはすべてさせるようにいたしました。そういうことに気 付かされたっていうのは、先生が書かれた新聞のコラム欄の文章でございました。非 常に参考になりまして、ありがたく思っているところでございます。今日の映画の 中でも、子どもを私物化しているんじゃないかというような、そのようなお話もご ざいましたが、確かにそんな今の時代で見れば、まだまだそんなような時が続いて いるなというようなことをつくづく感じさせていただきました。以上でございます。

大 田: どうもありがとうございました。

佐 藤: それでは、次々とご発言いただいておりますけれども、発言者の最後ですが、西本さんよろしくお願いします。

西 本: 本学初等教育学科で教員をやっております、西本と言います。はじめまして、どう も。先生とおそらく何度もお会いするような機会はあったんでしょうけれども、ちょ

うど面と向かってお話しするというようなことはこれまでありませんで、今日、このような形でお話しできて、大変うれしく思っています。私はこの大学で初等教育学科というところで、おもに小学校の教員を目指している、そういう学生の教員養成の一端を担っているわけですけれども、先生の今日の映画を見てもつくづく思いますのは、このところ非常に急速に、型にはまった教員を育てようというのか、行政にとって都合のいい教員を育てるといった、そういう流れが非常に強まっていて、私はそ



ういうことに対し危機感を感じているんですね。そんな中で、自分の取り組みとし ては、まぁ小さなことなんですけれども、このフォーラムの場なんかでも何度も報 告させていただいたように、大学生たちと一緒に、農業をやってるんですね。この 都留の市内に、畑や田んぽを借りまして、かなり本格的にやってまして、もう今年 で丸8年ぐらいになります。そういう活動に学生やうちのゼミの学生とですね、参加 してもらって、そこで「何かを感じてほしい、何かをつかみ取ってほしい」という ことで、ささやかな実践をやってるわけです。それで映画の中でも大田先生が「人 を育てるうえで自然というものが一番大きいんだ」ということをおっしゃっていて、 そういうことを私も8年ぐらいやってきますと、本当にそのとおりだというふうに 考えるようになってきています。しかもそれがどういう意味でかということなんで すけれども、自然というのは自然の摂理があるだけで、人間はその自然の摂理の前 では、どう考えても基本的に受動的であるしかないですね。人間が働きかけるとそ れに自然や作物が答えてくれるというような言い方ありますけれども、それはあく まで人間の側が意味付けをしたことに過ぎなくって、自然や作物はほんとは答えて はくれないんですね。それぞれの自然の摂理に従っているだけなんですよ。そうい うことにすごく実感を持って気付かされるんですね。しかしそこで私が気付いたの は、人間は自然や作物に対して受動的でしかあり得ないんだけれども、だからこそ、 そこで何かをやるっていうことは、常に主体的にならざるを得ないんだ。そういう 何か逆説的な関係があるということをすごく思わされたんですね。そこに人間が何 かをやるというか、人間の主体性というものの根源があるんじゃないかというよう な、そんななんか哲学的なことを最近考えてます。それから、それがまさに人間の 生活というものの始まりでもあるんだというふうに考えて、そういうことを考えて ますと、「人というのは抽象的に生きていくのではなくて、具体的に生活する」そう いう存在なんだということも少し考えています。そういう点で以前に漠然と考えて いた、自然の豊かさに癒されるとか、勇気付けられるとかそういうレベルの問題じゃ なくって、もっとギリギリの厳しいところでの自然との対峙っていうか、そこに何 か人間っていうものの存在の一番大事なところがあるっていうふうに考えてて、多 分そういうところにちゃんと目を向けないと、今回の震災や津波で地域を奪われた 人たちの本当の苦悩というのが、理解できないということにもなるんじゃないかと か、そんなことを考えたりしています。先生のお考えとどこか重なっていくのかな というふうにも思っています。で、そういうようなことを、農業体験を通じて、考 えたりしていまして、それでまた、県立の教員養成の現状とか今の日本の学校の現 状ということを見ると、中々にしんどいというか、今の学校というのは本当に身に 付けさせるべきことというのであふれていて、それを身に付けさせることに汲々と していて、そしてそれを要領よく教えることができると思われるような教員養成と いうものをやれというふうに、こういう流れが非常に強くなっていると思います。 これはもう簡単にはどうにもならないなというふうに思っていて。ですからある意 味といいますか、後でもしお答えいただけるんでしたら、「大田先生は学校教育って いうものに、何をどこまで期待されているのかな」ということをもってね、これは 本当に甘い期待はできない状況があると思うんです。そしてもう一方で、僕はその 学校教育に期待できるものっていうのはなかなか難しいと思わざるを得ないという ところから、では学校以外の地域での子どもたちの生活というものを、やっぱりど うしていくのかとそこのところに目をつけていくしかないのかなというふうにも考 えています。もし大田先生なりのお考えがおありでしたらお聞かせ下さい。

佐藤: では、大田先生の方にお願いしますが、今、それぞれ4名の方からお話があった

こと、そして映画の中で私たちが強く感銘を受けたことというのはいくつか整理できるかというふうに思います。まずは「自然の不思議」さ、そして中でも「命の不思議」さというところから始まって、そして「人が人として生きていくあるいは育っていく」、そういったときに違っていく、違いというものがそれぞれにある。「違いがあって当然であるということ」、そして「そのことが、当たり前であると同時に人びとが生きていくことを意味する」のだという、そういうことが出されていたように思いますし、また、人間っていうのは一人で生きてはいけない、自然と関わりながら生きていく。そしてまた、人と人と関わり合うことで生かされていく、そういう存在でもある。というようなことが映画の中でもありましたし、またそれぞれの皆さんのお話の中にもあったように思います。これらを含んで、先ほどの西本さんの質問も合わせて、もし先生の方で改めておっしゃりたいことがあれば、ぜひお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

大田: 長い時間、私の関係する映画をご覧いただきました皆さんに厚くお礼を申し上げたいと思います。私が93歳から正に満94歳に達しようとしているのが現在の状態であります。幸い耳がよく聞こえまして、特に悪口はよく聞こえるんですけれども、そういう耳がよく聞こえるにもかかわらず、こういうこの機械を通して聞き取るということは、私は大変不得手なものですから、先ほどから申されているお言葉のいくつかの問題点というのを理解するように努力をいたしま



したけど、ご質問、あるいはご感想にピタリと答え得るようなそういうことを限ら れた時間で申し上げることができるかどうか、大変難しいことだというふうに思っ ております。私は生きものっていうものは、一方において非常に自己中心にできて いると思うんですよ。ですから、今ここで火事が起こったり、地震が起こったりして 大ごとになりかけたら、ここにいらっしゃる方々は、それぞれ我先にと出口に向かっ て殺到されるに違いないというふうに私は思うんです。「自分の命を何とか守らなきゃ ならない」というので他人はさておいても自分の命がというふうな思いになって殺 到するという場面というのは、私の戦争体験からもいろんな場合の体験でも良く分 かっているつもりなんです。そういうふうに大変自己中心な命というものの性格が 一方にある半面、今度は生きていくためには、多くの人の世話にならなければなら ないし、太陽や空気に・・・そういうものの世話にもならなければならないし、他の植 物にもそれを食べて、生きていかなければならないというふうに、必ず他者依存、ほ かのものに依存するということなしに今生きることがないというのが生物の特徴だ と思うんです。一方で自分本位に生きるという内側に向かう力とそれから外に依存 しなければならないという外に向かう力。そういう内に向かう力と外に向かう力と いう矛盾した力を両方合わせ持っているというのが生きものの特徴だと思うので、 常に私共は自分中心と他者依存との間を選びながら生きているというのが人生だと 思うんです。そういう人生っていうものは実に危なっかしいものでありますから、 間違いをするのも当たり前であれば、幸運に恵まれるというのもまたあり得るとい うふうなのが、人生そのものはドラマというふうに考えてもいいようなものだとい うふうに動きます。時代によってひどく自己中心に傾く時代と、時代によってひど く他者に依存するという、あるいは強力な権力者に依存してしまうというふうな場 合と、間を時代というものは歪むというのも、これまた、我々人類が辿ってきた道で

はないか。歴史というものの流れもそういう間でドラマというものを作ってきたの ではないかというふうに思うんです。従いまして、私共は常にこの我々自身の内面 からのそういう難しい問いかけというものの横行の問いかけというものを克服する というふうな形で歴史というものはつくられていくんですけれども。現在の状況と いうものを申し上げますというと、ひどく個に傾いているというふうな思いがしま す。つまり、市場経済の中で私共は自分たち自身、自分自身の欲望の肥大、つまり、 自分が良ければいいというふうな方向に非常に強く傾いているという状況があるん ですよね。そういう状況がありますと、今度は逆にこんなバラバラな状態じゃいけ ないというので、強く強力な全体主義に持って行こうとする力があるんですね。逆 に出て来るという危険も存在していると思うんですよ。そういう意味では、現代っ ていうのは今バラバラになっているという状態と、それをまたもや逆に追うという 強力な上からのまとめを求めるという思いとが、交錯しているという、非常になん と言いますか、混迷した社会状況の中にあるというふうに思うんです。そういう混 迷状態というものを率直に受け止めた上で、いったい命というものがどういうもの なのか、そして命というものの尊厳、大事にし合うということはどういうことなの かということが、やっぱり未来を考える自負になるというふうに私は思うんです。 で、そういう大きな問題に直面しているわけですから、私共の社会全体の今の状況 というものを大きく展望しながら、自分の生き方をそれぞれに考えていくというこ とが非常に必要な時代に来ているのではないかと思います。子どもはお母さんの胎 盤から生まれるとどこへ生まれるかというと、1個の社会と文化を持ったこの自然の 上に生まれるんですが、自然を舞台にした社会と文化というものが待ち構えている 社会の中を生まれるわけですから、その中で、今いるあり方をしながら人間は人間 になっていくということにならざるを得ないわけですから、あまり学校中心に、学 校でいい人間をつくるとか、あるいはどこでどういう人間をつくるとかいうような ことをあまり考えるというよりも、むしろ、その社会全体の中で銘々がそれぞれ、 先ほど申し上げましたような、人間らしさの中で「銘々それぞれが自分の判断とい うものをやっていく」ということをやっぱり励ましあっていくという時代が、押し 切ろうとしている生き方ではないかというふうに私は思っています。それで、結論 的に申し上げますというと、私共が今、取り巻いている社会というのが、無機的社 会と言うべき社会ではないでしょうか。人間の作った機械の中で生きているという か、お金とか物とかいうふうなものの中に取り巻かれて生きているというのが現状 ではないかというふうに私は思うんで、そういう無機的な社会というものだからこ そ、命っていうものを何であるかということを考えていく。命というものを中心に 考え直していく。そして、物や金というのは、人間の発明した大変素晴らしいもの ですから、その物と金とを命というのをより豊かにするように変えていくという大 きな夢の中で私共の生き方というものを身近なところから考えていくということは 必要なのではないかと思います。物と金というものに使われないで、物と金を、自 分の命を豊かにするために、他人の命を豊かにするために、お互いの命を豊かにす るために、金や物を使うための工夫というものを、小さなグループの中でもいいし、 自分の家の中でもいいし、学校の中でもいいし、いろんなところで考えていくとい うことが必要なのかなあというふうに思います。ちょっと、もっと言わなくちゃい けないんだけど時間がありませんので、一区切りにいたしたいと思います。ご勘弁 願いたいと思います。失礼しました。

佐藤: ありがとうございます。それでは、今時間がないというお話ありましたけれども、 今見るとまだ少し時間があるようですから、今度は、会場の皆さんの中で今日の映 画、それから今のお話を含んで、感想やご質問のある方がいらっしゃいましたら、 ご発言いただきたいと思いますがいかがでしょうか。

どなたかいらっしゃいませんか。折角の機会ですのでご発言してみたいという方がいらっしゃいましたら、ぜひどうぞ。あるいは大田先生に対する質問というようなことでも結構ですし、前に座っている皆さん方、4名の方々に対する質問ということでも結構だと思います。よろしいでしょうか。意外と皆さん、奥ゆかしい方が多いようです。よろしいですか。それでは、もし途中で発言してみたくなったというふうに決断された方は是非遠慮なくお手をお挙げください。それでは少し時間がありますので、今4名の方にお話いただきましたけれども、先ほどのご発言にさらに重ねてご発言を求めたいと思います。小川先生、渡辺先生、織田さん、そして西本さん、もし何かあればよろしくお願いいたします。

小 川: 先生、小川です。よろしくお願いします。今お話にあったように、今は本当にこ の無機的社会の中で、お金や物が中心になって動いているという、まさにそういっ た状況を、自分は高校を担当しているものですから、特に大学、あるいは就職する 一番大事な時期にある高校生に、うまく言えないのですが、結果だけを求めるんで はなくて、先生のおっしゃるように、生き方というか、自分がどういうふうにして 生きていくのか、あるいは自分が社会の中でどういう役割を果たすことができるの かという点、それを強く教えていきたいなって、常に自分なりに考えて当たってき たわけですけども、なかなか今、自分が学校へ勤めてて学校教育のこと言うのはな んなんですが、結果を求めると、出口指導とか、あるいは大学はどこどこへ何名出 さなければいけないみたいなですね、そういったものをしょってるというか、学校 自体がなかなかそういった子ども達に考える時間とか、自分の生き方について、あ るいは失敗したことについてこう振り返るような時間が、非常に無くて、どんどん どんどん前を向いて進むしかない。前進しているという言い方はおかしいんですが。 そういった中で、今動いているような感じがしまして、本当先生のこういった映画 とかお話を伺って、先ほども言いましたけれども、自分、学校教育に携わっている 者なんですが、自分ももう一度見つめ直していろんな子どもたちと取り組みながら やっていきたいなってふうに新たに思った次第です。先ほど西本先生からあったん ですけど、先生の話の中で、学校教育の中でも教員をそういった方向に、こう何て 言うんでしょうか、魅力がないっていうような言い方かもしれなかったんですが、 我々現場の方としてはですね、何て言うんでしょう、教員としては、それぞれが信 頼を持ってやっていくというところはあるとは思うんですけれども。以上です。

大 田: いいですか。1点。

佐藤: はい。

大 田: いいでしょうか。佐藤さん、言ってもいい。

佐 藤: はい。どうぞよろしくお願いします。

大田: 今おっしゃったことに対してですが、なんか学校はどうでもいいというふうに申し上げたんですけれども、実は、学校とかその他のところでいろいろ、特に思春期を中心に心理的状態が不安定な時代に、非常に予想もできないような犯罪が起こったりですね、自殺が起こったりするという、非常に大きな問題がたくさん表れていると思うんですけど、その元を考えてみると、これ一つの例ですけれども、子どもたちの遊びの変化っていうのは非常に大きいということなんですよ。特に、その自然という舞台の上での遊びっていうことの場所もないんですよね。空き地があって

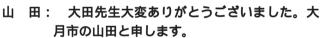
も車が停まるところ、駐車場になったりですね、川が流れても、立ち入り禁止です しね。それから里山なんかももう放ったらかしてありますので、子どもは遊びもし ない状態でですね、実際本物に触れていろいろな感性を豊かにするという、そうい う子どもの時期における社会的胎盤の中での本物に触れる感性の豊かさというもの はね、本当に鍛えにくい状況の中へ我々は子どもを置いてしまったもんですよ。そ して、部屋の中で機械をチカチカやるとかいうような非常にさみしい、遊び環境と いうものに置かれているというのが、本当に子どもに対し申し訳ないと思ってるん ですよ。そういう豊かな感性の蓄えというものが自然との関わりの中で、また、人 と人との関わりの中で、内発的な遊びと言いますかね、年の仲間との関係の中での 遊びと呼びますかね、そういう内発性と社会性をもろに含んだ感性というようなも の、感覚というようなものが、十分に耕してもらえる機会、環境ではないというこ と。その結果がいろいろな、大人も含めていろんな問題の起こっている、この根源 にあるのではないかというふうに私は思うんです。そこで、私が繰り返し申し上げ ていることは、自然の本物に触れる。西本先生がおっしゃいましたとおりに、自然 というものに働きかける、触れていく。そういうことの中に、若者たちの変わって いくという状態は十分に経験的にも、体験されることですので、そういうことが可 能なように、つまり、そういう自然を感じ尽くしてるというところへの投資、大胆 な投資が行われて、子どもの成育環境というものの中に、物が豊かに、物と金が使 われていくという、大きな政治的な方向というものを打ちだすような世論を組み立 てていかないことには、なかなか根源的な解決へ向かって、『かすかな光へ』向かっ て前進するというわけには行かないように思うわけです。そんなことでちょっと、 感想を述べさせていただきました。

- 佐藤: はい、ありがとうございます。そういう自然を取り戻していくという中にまた学 校をどうやって位置付いていくのかっていうことが問われているんだろうと思いま す。そして、今日お話があった、今の現実というものが非常に無機的な世界となっ ていて、そしてまた、あらゆるものが人工的なものに囲まれている。そういう中で もう一度人間の感性というものを取り戻していく必要があるんだ。その時に、今日 のお話の推移の中ではまだ十分出てきていませんけれども、この映画の題名でもあ りますけれども『かすかな光へ』というこういう言葉を通じながら、『かすかな光』 というものをどういうふうに探していくか。その時に、谷川俊太郎の『かすかな光』 というものをモチーフにしながらつくられたこの映画や、あるいは大田先生も『か すかな光へと歩む/生きることと学ぶこと』という、こういう本が書かれているわけ ですけれども、その中でもうひとつ、このご本の中で、『かすかな光』の詩にもあり ましたけれども、大事なものとして掲げられている言葉は「なぜ」、それから「どう して」という問いを人間が生きていくときに持つ必要がある。そして、それをもと に自分が主体的に判断していく必要がある。ということが大田先生のご本の中に書 かれていますけれども、これは、原発の危機を迎えている今日の状況の中ではこと のほか重要な意味を持つものだというふうに私は感じましたけれども、この点につ いて大田先生は改めて付け加えていただけるようなことがございましたら、よろし くお願いしたいと思いますが。
- 大田: そうですね。「なぜ」、「どうして」という、そういう自分の内面からの問い、本音からの問いかけっていうのは、非常に重要なものだということは申し上げたつもりなのですけれども、さらにその上に重ねて、「どうするかという問い」、これが非常に大事な問いなのではないかと私は思うんです。人びとは兎角、どうなるかってところへ問題を持っていく傾向が強いですよ。どうなるか、どうなるか、今度は株が

どうなるかとか。いろんなそういう今度の政府は何をしてくれるのかとか、そういうどうなるかっていうことではなくてですね、主権者である以上は、どうするかという問いを何らかの問いの上に重ねていくということがすごく大事なことではないかというふうに思うんです。だから、日日の変化していく社会状況の中で、どうなるかということも、もちろん、それに関心を持つのは人間の本能ですけれども、同時に身近なところでどうしているかっていう問題をやっぱり考え合っていくということがとても大事なんです。それは難しいことじゃ無くって、例えば電灯一つをどういうふうに自分の家でコントロールしていくかというような問題もあれば、1本の道端にある草とどう働きかけていくかというような問題もあるし、こういう子どもたちと出会った時に私共大人がどういうふうにお互いに響きがあって、命の回生を図るかというそういうふうな問題があると思うんで、だからどうするかっていう問題をなぜかの上に重ねて行くというようなことを丹念にやっていくというほかないのかなあと、とりあえずはそういうふうにお答えしたいと思いました。

佐藤: はい、ありがとうございます。今日、ここまでお話をいただきながら、私たちがこういうような状況の中で考えていくこと、それは、やはり人間らしい生活、それは自然を回復するとともにですね、人間らしい生活を自分たちがつくり出していく、そう

いう意志を持つこと、今、どうするかという、 まさに自分がどうするかということが、私た ち一人ひとりに問われているんだなというこ とを今日のお話の中で十分理解できたように 思います。そろそろ終わりの時間が近づいて おりますけれども、発言があるようですので、 お2人の方にちょっと大田先生にご質問があ るようです。よろしくお願いいたします。



大 田: ありがとうございました。



▲ 懇話会中の質問の様子

- 山 田: 一言では言えないくらい感銘を受けました。そして、先生の生き方そのものに非常に勇気を与えていただきました。ありがとうございます。質問なんですけども、今、35人学級とか言われてますが、子どもの、いわゆるクラスの数、これについて今、小中学校統廃合どんどん進められている中で、少人数になれば統廃合されるという中で、私は非常に疑問を持っています。そうした中で、大田先生としては、クラスの人数については理想的な数というものは、もし、ご示唆いただければ教えていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。
- 佐 藤: お答えいただく前にもうお一方ご質問がありますので、そちらからお願いいたします。すいません。もうお一方の質問は西本先生と小川先生にということでしたので、先にそちらを答えていただいてから、大田先生には、35人学級はどうかということも合わせて、本来ある教室の姿といいますか、学校の姿というか、そのあたりについて大田先生のお考えをお尋ねするということで、ご質問をあらかじめ振っておきたいというふうに思います。それではどうぞお願いいたします。
- 埴 岡: 都留文科大学の英文学科の4年生の埴岡 (ハニオカ) と申します。大田先生どう もありがとうございました。
- 大 田: ありがとうございました。
- 埴 岡: 先ほど大田先生が、どうなるかということよりも自ら主体的にどうするかという ところに主眼を置いて、希望を持って行けばいいのではないかとおっしゃっていた

ことに関しまして、先ほど小川先生がおっしゃっていた、私も次の4月から教壇に立たせていただく予定なんですけれども、先ほど大学に何名この高校から出さなければいけない、とかそういったことに対して少なからず疑問を僕も持っていますし、先ほどの先生のお話からも持たれているのかなと感じたんですが、そういうことに対して、学校側がどうするか、先生個人がどうするか、というのはどうしたら小さな個人から微力ながら改善することが可能なのかということを小川先生に質問させていただきたいのと、西本先生には、地域社会とのつながりが改善につながるということのお話をうかがって、地域社会とのつながりをどうすることによって、改善につながるのかという、もう少し具体的に教えていただければ幸いです。

佐藤: それでは、最後のところになってきましたので、少し整理をして、これからどういう段取りでやっていくか、二元中継なのでなかなかそこで打ち合わせができないものですから、私の方から提案させていただきます。これから最初に、今の方の質問について小川先生、西本先生にお答えいただく。その後で、もう1人質問者がございましたので、その質問者の方に質問をしていただきます。これは、大田先生に対する質問があります。その質問を先ほど35人学級のことをおっしゃった方と、それからその質問に対して大田先生が答えていただくという大変複雑なものですけれども、多分大丈夫だと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは、小川先生お願いします。

大 田: とにかく音との戦いで、本当に困っちゃうんだよね。(会場 笑)

小 川: 先ほどのご質問ありがとうございました。結果的に大学に何人入るかというとこ ろで、出さなきゃいけないっていうのは私の言い方もちょっと不適切だったのかも しれないんですけれども、実際に、やっぱり保護者の方も含めて、本人も含めて大 学に行きたいんだという気持ちを持って、その大学、高校へ入って、当然実績があっ てそこに入って、高校から大学ってのは、長くしてみれば僕はいいと思うんですけ ど、先ほどから大田先生のお話にも絡むんですけど、じゃあ、自分が社会でどうい う役に立ちたいのか、あるいは、自分はどうやって生きていくのか、その流れの中 で、例えばこういう大学へ行きたいんだ、じゃあこういうことを勉強したいんだと いうような、そういったスタンスを経て大学が決まっていくんであれば理想的だな というふうに僕は思っているんですね。だから、こういっちゃ言い方がよくないん ですけれども、例えばどこどこに行けばこの大学へ入れるんだとかっていう形では なくて、高校でいかに自分が生きるかってことをもっともっと考えた中で、結果と してそういうものがついていければいいかなって、そのために、自分が何ができる かなっていつも考えています。ただ、保護者からのニーズとか、あるいは本人の気 持ちも含めてそこへ入れてあげるのも我々の仕事ですので、その狭間で、自分たち も悩みながら、常に子どもたちのためのことを考えながらやっている、ということ になります。すいません。たびたび。

佐 藤: それでは、続きまして、西本さんお願いします。

西本: 今、小川さんがお答えになってたことは、そのとおりだと思うんですね。自分が何ができるのかっていうことを考えるしかない。それは私自身もそう考えて、何の役に立つかわからないけれども、直感的に大事だと考えて農業実践を学生とやっていて、それが、学生がそのあと学校教師になった時に、何か新しい働きを得た時に、という実践を私、個人的には細々とやっているということですよね。地域との繋がりですけれども、これは先ほど大田先生も学校だけじゃないんだという主旨のことや、それから決定的に問題なのは、子どもが自然の中で思いっきり遊べるという、そういう場や機会が無くなっているということをおっしゃったんですけれども、そ

もそも考えてみると、子どもというのは、学校にさえ通ってれば一人前の大人にな れるわけじゃないわけですよ。だけど、何か学校にさえ通ってると、それでオーケー みたいなね。そんな受け止め方っていうか、考え方が比較的過去本当の30年くらい の間に急速にもう日本の多くの人々の頭を占めるようになってしまっているってい う、まず、このことが問題だと思うんですね。学校にだけ頼ってたら十分なんだっ ていうわけでは決してないですよね。そういうふうに考えて、じゃあ、学校でもで きる限りのことを教師としても、個人としてもやるしかないけれども、その地域っ ていうもので、子どもはいろんなことを身に付けて育っていくんだっていう当たり 前のことに立ち戻って、そして、できるところから地域の自然環境にしても、施設 にしても、人間関係にしても、できるところから開始していくというか、そういう 努力を積み重ねていくしかないんだろうなっていうふうに思うんですね。その時、 決定的に大事なのはやっぱり地域の大人たちが元気であることなんだっていうふう に思うんですね。地域の大人が元気を失っているっていうところで子どもだけが元 気になるってことはできませんから、大人が元気で、いろんな環境を作って、いろん なものを目指していくというね、そういう大人社会というものをまずどうやってつ くっていくのかということが実は間われているのではないかなと思います。

大田: その人の名前は西本さんともう1人、最初、質問者の名前もわからなかったんです。

佐 藤: はい、それでは、最後の質問ということで、学生の方ですけれどもお願いします。 佐々木: こんにちは、初めまして。社会学科の佐々木大介と申します。畑潤先生のゼミに 所属させていただいております。

大田: どうかい?

石 沢: ちょっと音聞こえにくいんで、マイクと、カメラのマイクに聞こえるように喋ってください。

佐々木: はい、聞こえますか?

石 沢: 大丈夫です。

佐々木: 今、先生の生き方とかに非常に感銘を受けたんですけど、今、学校教育現場で一方的な教え込みや価値観の強制とかそういうものがやっぱりまだ大きく残っていたり、それに回帰するような風潮が大分あるんですけれども、そうではなくて、やっぱり、生きる力やそれぞれの生徒一人ひとりの良いところとか伸ばしていって自立的な学びとかそういうものを実現していかなくてはならないなとは思っているんですけども、僕自身教員を目指しているんですけども、今後新しく教員になるものとして、目指すものとして、今後何が求められていくかっていうことを先生にお教えいただきたいというのが1点で。もう1点としては、非常にあの、今は大学も経営難の時代、少子化も進んでおりまして、改めて、原点であります、人間を探究する大学という理念のもと、これから都留文科大学はどうあっていかなくてはいけないのか、そのことに関しては大学の皆さんもやはり知りたいんじゃないかなと思いますし、僕自身そういうことも興味があるんで、ぜひ先生から都留文科大学に関してお聞きしたいんですけれども、よろしくおねがいします。

大 田: 機械の音との戦いというのは、今一番、僕の直面している状態なので、聞き分けるっていうのが非常に難しいんですね、この装置を通して。だから、とんでもない答え方をしてるんじゃないかという心配を持っております。西本先生と、それから小川先生ですか、お答えいただいたことはかなりよくわかりました。僕同感です、その点については。非常に、ちゃんとした1つの対応というものをお示しいただいたというふうに思っています。そういうものを踏まえたうえで、私が都留文科大学

に期待をするものというような形でもって、「かすかなる光」を述べてみたいと思っ ておるんです。これはあくまでも「かすかなる光」ですから、遠い理想だというふ うに、理念だというふうに思ってくださって結構なんですが、私は都留文科大学と いう大学は、こういう厳しい状況の中でもいい線をいってるなあというふうに考え ている、本当に親愛をこめて都留文科大学というものに対して私は常に関心を払っ ている1人だということを申し上げたいと思うんです。それはどういう点かと言い ますと、これは考え方によってはそんなこと考えなくてもいいということもあるか と思うけれども、例えば、その都留の合唱団の活躍っていうのは僕は、単に 1 番に なったとかならないとかいう問題じゃなくて、音楽という響き合い、そしてしかも 個性的な表現を他者との間に関係付けながら表現していくというね、人間関係の密 度の在り方としては、素晴らしいアートだと思うんです。いわば、人間関係のある べき姿というようなものが合唱というようなものにあると思うんですよ。僕はあら ゆる学校とかあらゆる施設、あるいは、できれば社会全体が、そういう感性の響き 合いというところを軸にして、何て言うか、もっと豊かな社会にしていくというこ とを考えたらいいと思うんですけど。都留にはその合唱団なんかあって、合唱団と いうのは1つの部かもしれませんけど、そうじゃなくて、都留文科大学の、いわば 核心であるものだと思うし、あらゆる学校の核心の一番中心になるべきものはアー トだというふうに私は思うんですよ。ところが、今の学校の核心の中にあるのは、 上の学校へ進むための準備勉強みたいな数学であるとか、理科であるとか、社会科 というようなものが中心教科になってますけど、そうじゃなくて、むしろ、音楽で あるとか、図画であるとか、作文であるとか、口頭発表であるとか、芸術的に表現 するとか、そういうふうな、アートというものを中心にした劇場としての学校とい いますか、社会全体が劇場的な性格を持つということがすごく大事だと思うんです。 劇場的な学校なり、社会なりというものは、それぞれ一人ひとりが違いながらも、 ちゃんと自分の音色と出番を持っている。そして、快く自分の働く部署、自分の学 ぶ部署というものを持って、そして、そのことに喜びを感じながら生きていくとい うような状態を目指すのが、「かすかな光」というものではないかというふうに思う んです。だから、今の学校を例にとって言えば、中心教科などというふうに言われ ているようなものをひっくり返してですね、むしろ、芸術を軸にして、みんなが出 番を発揮し合うというような雰囲気を持った、そういうところに変わっていくとい うことを目指す。社会もまた、そういうふうな方向に向くということを「かすかな 光」として期待する次第でございます。本当に都留文科大学っていうのは、僕は、 そういう目を持った素晴らしい大学だというふうに思っていますので、そこにいらっ しゃる皆さんが、一人ひとりと握手をして、響き合いをしたいと思うんですけれど も、今度は本当に機械にやられましたね。(会場 笑) 機械を知らんということが難 しいということがよく分かりました。機械に依存すべきではないというのはこれで よくよく分かったつもりなので、有機的に生身で触れ合うということをまず第一に 大事にし合うということが、とても大事なことだというふうに思います。これをもっ てご挨拶に変えたいと思ますが、いかがでしょうか。

佐 藤: ありがとうございます。(会場 拍手)

佐藤: 司会がまとめるべきことをすべてまとめてくださったという感じで、今日、1つのまとまりが、今の大田先生の言葉の中に全て込められていたというふうに思います。映画を含めると長時間になりました。皆さん、様々なことを感じ、また考え、そしてまた、このことを通じて生きていく方向性というものを考える。こういういい機会になったっていうふうに思います。大田先生も長い時間どうもありがとうござい

ました。

大 田: あの一、佐藤さん、佐藤さん、佐藤さん、ありがとうございました。あなたの司 会ははっきりわかりました。良かったです。

佐 藤: どうもありがとうございます。 大 田: ありがとうございました。

佐 藤: はい、どうもありがとうございます。ちょっと質問、十分お訊ねする時間もなかったかと思いますけれども、それでも私たちそのことを含めて、今日のこの会、ここで終わりというふうにしたいといふうに思います。皆さん、どうもありがとうございました。

大 田: ありがとうございました。

閉 幕

持 田: ありがとうございました。本日は皆様のご協力によりまして、滞りなくフォーラムを進めることができました。ここで、皆様に2点ほどお願いがございます。まず、1点目でございますが、アンケートにつきましてお願いいたします。お帰りの際に、受付に回収箱を備えてありますので、そちらに入れてお帰りになる様にお願いいたします。2点目なんですが、今日、受付におきまして、受付名簿にお名前を書かれていない方、もしいらっしゃいましたら、恐れ入りますが、受付に名簿を設けてありますので、お帰りの際にご記入いただくようにお願いいたします。それでは、以上を持ちまして、第8回地域交流研究フォーラムを閉会とさせていただきます。本日は皆様、大変ありがとうございました。

『第8回地域交流研究フォーラム』 アンケートに寄せられた47名の感想

- ・短い時間でしたがとても勉強になった。生身で関わり合うことができなかったの は残念だったが、貴重な話を聞けてよかった。じぶんができることをこれから一 生懸命考えていきたいと思いました。 (都留市20代)
- ・以前大田先生のことを聞いて、どのような人だろうと思っていたところ、今回のようなものがあると聞き参加しました。先生が中継での出演というのは残念でしたが、興味深い内容でした。次回はぜひ講演していただきたいです。映画の中で断片的に流れていたのを聞いてすべて聞いてみたくなりました。また、もっと自然と関わりたいと思いました。都留は自然が豊かなので、子供ももっとその自然で遊べばいいと思った。 (都留市10代)
- ・映画にも出演されていた北垣先生や畑先生が授業内で大田先生の名前を出して説明したのを聞いていたので、すごい先生だと思っていましたが、今回の映画や大田先生のご発言を聞いて生き方や考え方が共感でき、とてもためになった。

(都留市20代)

とてもためになるお話ありがとうございました。

- (都留市10代)
- ・11月に引き続き2回目です。大田先生に会えなかったのが残念。 (神奈川県20代)
- ・人は自ら変わる力を持っている。教育はそれを手助けするもの。わが子は他人以上にちがう。子供をどうにかしようとか思わず、あきらめることという言葉は納得できるとともに安心しました。新聞の折り込み広告は自己中心的にするものであり、子供化する、などなど参考になりました。教育とは、生命とは、生きるとはについて考えさせられました。大田先生の生きざまそのものが勇気を与えてくれました。また夢を抱くことの大切さを改めて感じました。 (大月市60代)
- ・かすかな光への映画は、人間の生き方を考えさせる、とても良い映画で感動した。 教育は人づくり~教材を教えるのではなく教材で人を作る、命を大切にすること の大切さ~夢を持って未来へ~ (都留市70代)
- ・モノとカネの支配から抜け出すこと、日々の生活の中で意識していかなければと 思った。 (大月市60代)
- ・シンポはちょっと物足りない。準備ご苦労様でした。 (大月市60代)
- ・大田先生には1999年に奥様がお亡くなりになってもくじけずにしっかり生きていらっしゃる姿に感銘を受けました。素晴らしい奥様の愛が亡くなられても支えになっているのだと感じました。どうかこれからもお元気でお過ごしください。

(都留市80代)

・会場に来ている方々が、年齢層の高い印象で、少し驚きました。映画について、 私は大田先生の自伝とは思わなく、教育の本質を追い続けていく記録ととらえま した。大田先生は長い年月追求されてきたにも関わらず、今でも色々な人々に会 い、学び続けているというところに、教育の深さを感じます。今後もお元気で、 我々後を歩く者に道を見せていただきたいと思います。考えが「学校中心」になっ ていることについて指摘がありました。私も教員として働いているときは、そう 思いつい気負いすぎています。ほとんどの先生がそうなのだろうと思います。が んばりすぎると、大事なことが見えなくなってしまいます。地域交流センターに ついて知らなかったので、期待しています。お話の最後に本当にいいことばを聞けました。「それぞれ一人一人が違いながら自分の音色と出番をもっている」「有機的に生身で、機械に依存すべきじゃない」 (上野原市30代)

- ・映画を通して改めて、教育に対する考えを確認することができました。「主体が子供自身であること」「教育は子供の学習を援助する」ということが難しい言葉ではなくしっかりと伝わってきました。ありがとうございました。 (都留市40代)
- ・元気の秘訣は夢をもつこと、やらなければならないことに追いかけられている。 どうなるかではなくどうするかである。やはり大人が主体的でないといけないで すね。 (中央市50代)
- ・現職の時代にこのようなことばや方法や生き方をしたかったとつくづく思いました。子供と大人のちがい、考え方のちがい、子供をもっとしっかり見つめたかったと思います。ありがとうございました。都留文科大学の発展をいのります。

(都留市80代)

- ・かすかな光へを観て私のこれからの人生への課題をつきつけられたような気がしました。 (都留市70代)
- ・生命、人権と言うことを学びました。今後の自分の人生において大変勉強になります。ありがとうございました。 (都留市60代)
- ・感動しました。これから生きていく力になりました。先生ありがとうございました。 た。 (都留市70代)
- ・為になる話が聞けて本当に良かった。

(都留市20代)

・もっと大田先生のお話を伺いたかったです。

- (富士川町40代)
- ・命というものは何であるか、金や物は他人を豊かにするためにある等、他にも多くのお話を聞いて新しい知識を得ました。また教育について独特の考え方を持っており、こういう考え方が広まっていけばよいと思います。 (都留市60代)
- ・良い時間でした。ありがとうございました。 (大月市50代)
- ・「人間の原点について」を学びました。今後の人生において良き勉強になりました。ありがとうございました。 (都留市70代)
- ・自分が人間として生きるということについて、あらためて気づかせていただきました。また親としての子供への接し方、人格を認めてあげるということも気づくことができてよかったと思います。人は一人ひとり違う、兄弟でも親子でも違うということに気づけたことは大きな私の財産になったと思います。とても良い経験になりました。ありがとうございました。 (上野原市40代)
- ・文大名画座でも「かすかな光へ」を上映いただいていたので、内容について深めることができました。本当にいろいろな示唆に富んだお話でよかったです。大田 先生は機械を苦手とされるといわれましたが私は離れていてもちゃんと問答が成立しすごいと思いました。 (都留市20代)
- ・為になりました (都留市20代)
- ・ひとり、一人ちがっているのがあたり前。自ら成長する力を持っている、子ども達。教育の果たす役割…。自然の中で育つ…。大人たちが子に伝えたいと思うこと、物があまりにも少ない様に思います。今、生きていて生きがい、はりあいがなさすぎるのではないか社会が人を尊重し、助け、助け合う環境が確立されていて、安定、安心していればとつくづく思います。一人ひとりの力は小さくても力を合わせ、努力していくことが大事ですネ!! (都留市50代)
- ・私は家庭菜園をしています。今までの考え方は今この作業をしなければという思いで作業をして来ました。この映画を見て植物は今これを必要としている。自分

で生きていこうとしている。人間はその生命力に少しだけ手伝えば良いことを知った。人間を中心に考えるのではなく植物を中心に考えれば良いことを知った。生命と生命の響きを感性で受けとめるのが大切!私の畑もフィールド・ミュージアムの一片と思うと元気が出ました。作物を子供達に食べてもらい人と人とのつながりを大切にしたいと思います。 (都留市60代)

- ・施設での教育の話しだけで地域教育の話しが無くがっかりした。 (都留市60代)
- すばらしい会でありました。

(都留市60代)

- ・生命の特徴として「ちがうこと」「自ら変わること」「かかわること」を映画の中で挙げられていましたが、その説明に大いに納得しました。「かすかな光」に向かって努力していくこと、道程は果てしないので、つい効率を求めてしまいます。それに反省しつつ、ニーズにこたえるためには、ある程度は仕方ないところもあるのではと思うこのごろです。 (東京都50代)
- ・インターネットによる中継で、大田先生の話を聞けたことがとてもよかった。特に個人にかたむき、ばらばらになっている現状にまとめようという力が働いているという指摘に納得しました。ありがとうございました。とてもいい企画でした。 (東京都50代)
- ・教育関係者の方にこの映画を見てもらいたい

(都留市60代)

- ・映画は良かったです。懇話会に関しては、もっと大田先生への質問に重点を置いて時間を取ってほしかった。パネリストには、もう少しゆっくり話して欲しかった。 (都留市30代)
- ・命ということを中心に、物品、お金を通じて自分のまわりを含め豊かにして考えるとか子供にも私たちにも感性が大事ということなどつくづくあらためて感じました (都留市50代)
- ・教師になってから先生の著書を読んでストンと胸におち、力をいただいてきました。「かすかな光へ」もまさに実践、人とのかかわりを重ねられている中での言葉、実践に説得力、本物見ました。フィールド・ミュージアムの構想には多くのことを教えられ、かつて子どもと一緒にムササビ、リス、ネズミや、蛍の観察会に参加し、自然とのかかわりなど多くのことを学びました。命というものについて改めて考える機会をいただきありがとうございました。私も地域や家族やかかわっている人々の中で学んだことを自分なりに実践していきたいと思います。

(大月市50代)

- ・とても感動しました。本当に、今回の講演に参加して良かったと思います。まだ、 私は大学生で教師へ向けて頑張っていますが、もし今自分が教師になっても果た して、子供達の前に立っていい存在なのかとても不安です。今回の講演を通して、 私は「どうですか?」を常に考えて自分で行動を起こしていきたいと思いました。 ありがとうございました。 (都留市20代)
- ・命の尊厳から"違い"を大事にするということの大切さに結びつけ、改めて一人一人の個性を尊重していくことが今後の教育に求められていくことなんだなと思いました。また「はらペこアオムシ」という絵本にこめられた自分を変えるのは自分自身であるということも知り、その言葉をこれからのゼミの学習活動に生かしていきたいと思いました。 (都留市20代)
- ・大田先生の教育観や生き方にとても感銘をうけました。 (都留市20代)
- ・生きること。教育とはという原点を再確認できたように思いました。教育は毎日 忙しい日その中で点数や成果、結果を求められ効率的でないとだめだという風潮 である。教育、人間をそだてるのに同然、直接体験のなさが失われていることが

課題であることは実感しているところです。自分にできることを今日のお話を専門にして行っていければと思います。大田先生、ありがとうございます

(大月市50代)

- ・素晴らしかったです。卒業しても都留文科大学を訪れさせていただきたいと思い ます。 (都留市20代)
- ・初めて聞くような、実践を知ることができました。ありがとうございました。 (都留市20代)
- ・今日来てよかったなー、って思いました!!家に帰ってからもう一度考えようと思います! (都留市20代)
- ・改めて人間とは何か、教育とは何かを大田先生を通じて学ぶことができました。 時すでに遅しの感はありますが、フォーラムの益々の活躍を祈念します。 質問 したいと思ったこと…現在の子供の実態の中でコンピュータ・携帯に独占された ような実態で自然とのかかわり、…感性を大切にする人とのかかわりをどうする か、…の課題への対応を学校現場の中でどうするか知りたい。 (大月市80代)
- ・急な変更がありましたが、内容でも十分と思われます。テレビ会議はとてもよかった。大変だったと思います。 (上野原市50代)
- ・「かすかな光へ」から教育のあり方、上からでもなく、下からでもなく、内面 (人の)の大切さを再確認しました。また、教科書裁判の支持者でもあったのだと 初めて知りました。 (上野原市50代)
- ・フィールド・ミュージアム構想は、私もとても大切にしている考えで、今後の私の住む地域でも何らかの取り組みをしていきたいと考えると同時にたくさんのヒントを与えてくれます。今後も楽しみです。私自身は、映画の中の兵隊 農村出身のタイプと思っていますし、田舎の生活を有意義なものと考えています。

(上野原市50代)

・教育は、「命と命のひびき合い」であるという大田先生の言葉が印象的でした。思わぬアクシデントにより、ネットビデオでのフォーラムになりましたが、事務局の方々のご苦労をお察しします。直接大田先生のお声を聴けて、参加してよかったです。 (都留市50代)

活 動 報 告 2011**年度**

都留文科大学 地域交流研究センター

活 動 報 告

2011 (H23)年度

1. 2011年度の活動について〔概況〕

2011年度は、地域交流研究センターの開設から8年という時間が流れ、いてもいう時間が流れいてきたが開活動において更ったというであるというであるというであるというであるというであるとであるとである。第2011.3.11まの表表をはいるできないでは、2011.3.11まのでは、1まのでは、2011.3できるできないでは、2011.3できるできないでは、2011.3できるできないできることのでは、2011.3できるできないでは、2011.3できるできるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3できるでは、2011.3ででは、2011.3ででは、2011.3でも、3011.3ででは、3011.3ででは、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3では、3011.3でも、3011.3では、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3でも、3011.3では、3011.3でも、3011.3では、301

「大哺乳類展」以来の新しい交流・連携事 業も着実に増えており、改めて、本学で の活動のきっかけとなった、大田堯元学 長による『都留自然博物館』構想につい て向き合うことを教えてくれた。2011年7 月には大田堯先生自身のドキュメンタリー 映画『かすかな光へ』の完成、上映によ り、本編の中で魅力的に紹介された、本 学のフィールド・ミュージアム活動につ いて多くの賞賛の言葉が寄せられ、大田 先生の意志を繋ぐ者の一人として、そこ に関わることの出来る大きな喜びを感ず ることができた。また、オープン・アー カイブ事業においても市内小中学校での 活用も定着し、デジタル化にむけての作 業も引き続き行っている。

発達援助部門でも、SAT事業での市内小中学校と大学教員の共同によるケースカンファレンスが具体化に近付いたことや、平成22年度入学生から適用となる、新たな

必修教職科目「教職実践演習」のカリキュ ラムの主軸として運用されることに伴い、 引き続き、大学や教育委員会からの支援 を受け、新たな展開に向けて活動してい る。地域教育相談室においても、継続的 に教育委員会主催の研修会や校内研の講 師としてスタッフを派遣してきた結果、 その研修会の参加者の情報によって相談 室の活動が伝わり、その存在や役割がさ らに認知されてきていること。地域情報 教育においても、引き続き小学校8校、 中学校2校のホームページの運用支援を 行っている。また、新たに、都留第二中 学校が、区内にある禾生第一小学校と禾 生第二小学校との連携で実施する、『やま なし心づくり研究指定校事業。にもWeb ページを作成・運用し支援を開始した。 そして、2011年度から、新たに地域美術 教育分野の活動が加わり、小中学校の図 工・美術担当教員との研究会や研修会の 開催、都留市市民生活課への人権紙芝居 「たねをまこう」の制作提供が行われた。

暮らしと仕事部門では、「農のあるくらし」のテーマに共同学習会の開催や、農業系学生団体との交流活動や世界と地域を結ぶ講演会を引き続き開催してきた。

地域交流センター通信も、畑編集長を中心に精力的な取材活動を行い、20・21号を発行した。両号とも、特集として「地域・故郷を思う」・東日本大震災と私たち・と題し、本学関係者による被災地に対する思いや活動を中心に幅広い思いを丁寧に記録し、読む者それぞれの心に語りかけてくれた。

「文大ポランティアひろば」も毎月の定

例会を中心に積極的な活動が展開され、 その中から、2010年度には、18歳以上の 知的障がいのある方たちとの交流を目標 に『いこいのひろば』プロジェクトの活動も大学からの活動助成支援を受け、学 生・市民と連携した意欲的な活動を展開 中であり、都留市社会福祉協議会におけ る正規事業としての位置づけを受けたことは今後の活動についても大いに注目を 集めることであろう。

これまでの着実な取り組みや粘り強い 働きかけが、ようやく形を成してきたという性格が強く、本センターが、各部門 の活動を組織的にサポートし、継続的に 動機付けていく機能を持つことの意義を 改めて確認したい。

また、これまでにも、センターにおけ る活動が拡充するにつれ、スタッフ・体 制の拡充を求めてきたが、昨年度 (2010 年度) には品田笑子特任教授、北垣憲仁 特任准教授が採用され、それぞれの新た な活動への期待が高まっている。しかし、 センター事務局全体の業務運営担当者と しては、前任者が一年で、アルバイト職 員今泉圭一朗氏に変更されたこと。担当 正規職員が学生課との兼務のため、多く の通常業務が執行されないまま持ち越さ れたこととなり、大きな課題として提示 されてしまった。このような状況に表れ ているように、センターとしての体制づ くりはまだまだ遠い道のりである。また、 センターそのものの活動スペースの確保 についても、コミュニケーションホール における騒音に対する防護策もないまま、 将来的なセンター再編構想に向けてより 良い提案をすることが喫緊の課題である。

センターにおける教養科目として開設されている『地域交流研究』『地域交流研究』『地域交流研究』『地域交流研究』に対しても、これまではとのみが開講されていたが、昨年度には未開講の不適切さが大学基準協会から指摘され、2011年度は『地域交流研究』(いきものマップの作成)を開講することができた。

最後に、大学全体の中での、「地域交流

研究センター」の位置づけである。特に、センター活動に関わる教員は、まだまだ一部であると強く感じる。また、学生に対する認知度も非常に低く、「フィールド・ミュージアム」や「SAT」といった個々の活動は知っていてもセンターそのものの存在を知らない学生が多い。今後は、学内の他分野の教員に対しても参加を促りていくだけでなく、学内展示を中心に学生に対する広報活動の必要もあるだろう。地域との交流は、幅広く、奥深く、そして、多くの可能性があると感じている。

ここで、改めて、平成22年度に実施された大学基準協会における本学に対する大学評価の「社会貢献」の部門における文章の一部を昨年の報告に引き続き紹介する。

「地域への社会貢献としては、地域交流 研究センターが重要な役割を果たしてい る。同センターの活動としては、「フィー ルド・ミュージアム部門」「発達援助部門」 「暮らしと仕事部門」「各種メディア活動」 「地域貢献活動事業」があり、大学と地域 を結び、多くの学生、教員が参加してい る。「フィールド・ノート」の編集や小・ 中学校において教員の補助として参加す る「学生アシスタント・ティーチャー事 業」など、学生の教育と地域貢献、社会 貢献とを有機的に結合させたさまざまな 取り組みを中心的に推進しており、その 活動は高く評価できる。ただし、活動内 容に見合ったスタッフ、体制の拡充が課 題となっている。』

(文責・杉本光司〔地域交流研究センター長〕)

II. 各部門の活動2011年度フィールド・ミュージアム部門の活動報告

目次

はじめに

- (1) 生きものとの親しみを深める 森のキャンパスづくりの プログラム
- (2) 地域の知恵に学ぶ環境復活の プログラム
- (3) 学内のほかの団体との交流 プログラム
- (4) 行政、企業、市民団体などと の連携プログラム
- (5) 資料の整理と保存、公開の プログラム
- (6) 学生・教員・市民の参加の プログラム
- (7) カリキュラムとの連携
- (8) その他

2012**年度のおもな事業** まとめ

はじめに

地域交流研究センター (以下センターと記す) 発足と同時にフィールド・ミュージアム部門が位置づけられ9年目を迎えた。フィールド・ミュージアム部門では、センター発足時に9年間の中・長期計画を策定しており、その最終年度という節目の年となった。この間、私たちは、「地域の人と自然の交流」をテーマに、身近な自然や人びとの暮らしに関心を寄せることの意味を問う実践を重ねてきた。

しかし、策定した中長期計画の事業案も、 センターの性格に即して事業をどのよう に展開していくか当初から明確になって いたわけではない。学生や市民の参加の機 会をどのように用意するかなど試行錯誤 を重ねながら模索してきたといってよい。

部門の活動を振り返り、近年の部門の 事業の取り組みを整理してみると、フィー ルド・ミュージアム部門発足以前の20年 近い活動の蓄積をもとに、いかに大学と いう持ち味を活かした本学らしい活動を 展開していけばよいかなどが実践を通し て次第に明らかになってきたことが特徴 の一つとして挙げられるだろう。そして 市内の小学校の総合学習への参加やカワ ラナデシコ・カジカの保全活動など当初 は予想しなかった新たな取り組みも生ま れてきた。市民参加による観察会や機関 **誌づくり(『フィールド・ノート』)、ピオ** トープ作業にも学科の枠を越えて多くの 学生が参加するようになり、大学教育に 部門が果たす役割の大きさとさらなる可 能性を予感させるものとなりつつある。

この報告ではまず、2011年度の事業の 内容をそれぞれの課題とともに整理する。 そのうえでこれまでの活動もふまえなが ら部門の事業全体に関わる課題をまとめ てみたい。さらに今後の展望とともに来 年度のおもな活動を挙げてみる。なお、 以下の各プログラム名は、センター発足 時に提出したフィールド・ミュージアム 部門の中・長期計画にもとづき記した。

(1) 生きものとの親しみを深める森の キャンパスづくりのプログラム

このプログラムは、キャンパス内を自然に親しむ入り口と位置づけ、学生教育、研究、市民との交流の場として整備していこうとするものである。

1) キャンパス内ビオトープ整備

附属図書館に設置されたビオトープで は、尾崎山の尾根の両端を結び、チョウ やトンボに親しむということをテーマに 学生および教員参加のもと、剪定や移植、 観察記録などの作業を行なっている。 2011年度は、ほぼ毎週1回、1時間程度を 作業時間に充て継続的な世話をしてきた。 掲示板にもビオトープで見られる植物や 昆虫の情報を展示し、授業においても 「環境科学概論」や「博物館学各論」な どで活用するなど自然教育園の機能もも ちつつある。また、ビオトープの池には ヒメガマがあるが、市民のかたがたから 生け花に使用したいという申し入れも寄 せられるようになってきた。山梨県産の メダカも池で保護しており、2011年度も 無事に冬を越すことができた。ビオトー プの作業に関心をもつ学生も増えてきて おり、今後は植物のパネルなどを丁寧に 作成していきたい。動植物の動向も観察 をもとに記録を継続していきたいと考え ている。



ビオトープ作業は週1回の割合で行ない、 多くの学生が参加するようになった

2) 1号館ビオトープの管理と授業への 浜田

1号館ビオトープは約40年前に本学の教 員と職員により作られた都留周辺の山地 植生を模したビオトープである。ビオトー プという言葉の存在すら知られていなかっ た当時、本学の教職員が山から苗木を採っ てきて汗水流して植樹をしたそうだ。本学 の歴史とともに歩んできたこの 1 号館ビ オトープは、途中で何度か伐採の危機に遇 いながらも、40年経った現在、樹高が20m を超えるブナやミズナラ、モミ、エノキ、 ケヤキなどが林立する立派な林となり、夏 には天然の緑のカーテンとなっている。先 代たちが残してくれたこの林を、教育へ活 用するために、初等教育学科の教員と学生 が中心となり、授業や課外活動の中で、生 物相の調査や自然観察、解説板や展示の作 成を行なっている。2011年度も、生物学実 験や自然科学実験・観察、専門演習(生態・ 環境教育) の授業で植物相や動物相の調査、 自然観察等をおこない、春・夏・秋の3回 にわたり、展示内容を入れ替えた。また、 年間を通して定期的に草刈や剪定、植樹な どを学生とともに行なった。

3)「リスをキャンパスに呼ぶ会」の取り組み キャンパス周辺に生息するリスとの出 会いを楽しみ、身近な自然に親しむ契機に しようとクルミの実生を移植するなどの

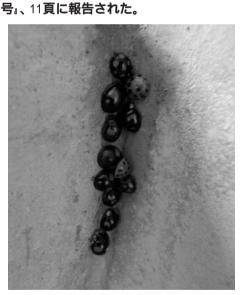


クルミの実生を植樹

活動をしてきた。2011年度は、移植したクルミの実生の生長を点検した。一号館ピオトープのクルミを親木とした実生をプランターで育て、枯れたり下草刈りの際に刈られたりしたと思われるクルミの場所に新たに移植をした。苗木の生長を見守るとともに、学内外に共感の輪を広げる活動を展開していきたい。

4)「テントウムシを見守る会」の取り組み本学の校舎は、とくに自然科学棟と2号館においてテントウムシの越冬個体が多い。一時は数万の個体が越冬したという記録もある。しかし、近年は越冬個体が減少し、消毒などによる死亡個体数の増加も懸念されている。こうしたテントウムシの越名で学生・教員・市民とともに注意深く観察し、身近な自然の動向をともに見守っていきたい。なお、2号館のテントウムシについては本学教員の泉桂子氏に

よる記録が『地域交流研究センター通信21



2号館で越冬するテントウムシ

5)「ムササビの森」におけるライブカメラ構想

現代GPにより整備が進んだライブカメラ構想も、2009年にムササビの繁殖が確認され、学内のホームページでライブ映像を見ることが可能となった。しかし、巣箱の

内部は湿度が高く、とくに梅雨時期などは カメラの定期的なメンテナンスが欠かせ ない。さらに巣箱を森のなかに設置してあ るため電波の受信状態が不安定で、これに ついても年間を通したメンテナンスが必 要である。2011年度は、一ヶ月に一度程度、 ムササビが巣箱を出る夜間にメンテナン スを実施した。現在、カメラの映像が不鮮 明なため、2012年度に新たなカメラに取り 替える予定である。この構想には、身近な 生きものに親しむ契機にしたいという目 的のほかに、学生・教員・市民の多くの目 を通してムササビの暮らしぶりを明らか にしていこうという目的もある。キャンパ ス内で本物のムササビに会えるという環 境は、本学にとっても大きな財産であろう。 将来、教員を目指す学生にも実際にムササ ビとの出会いを楽しむ観察会を開催する など、学生教育を視野に入れた活用の方法 も模索していきたい。



「ムササビの森」に設置した巣箱で子ども を育てるムササビ。ライブカメラの映像は、 現在、自然科学棟および食堂のモニターで 見ることができる。ホームページでも映像 を公開している。

6)『フィールド・キャンパスだより』の 発行

キャンパス内に生息する動植物を本学の重要な自然財産と位置づけ、その目録をつくり、それらを本学の授業の教材として、また市民が地域の自然を評価する資料として活用することを目的に2003年より発行を継続している。月に1度、250部をカラー印刷し、希望者に配布してい

る。2011年度は、通算128号を発行し、これまで9年間で記録した動植物は延べ153 7種になった。現代GPで購入した赤外線センサーカメラも利用し、キャンパス周辺の身近な動物も毎月、紹介している。



キャンパスの動植物を取りあげ、授業でも 活用されている

7)「ムリネモ」(ムササビ、リス、ネズミ、モグラ)との出会いの場づくり

身近な哺乳類の生態や行動の観察の成果を用い、哺乳類の暮らしを尊重した観察の手法を工夫した「出会いの場所 (エンカウンター・スペース)」をキャンパスに設け、授業や観察会で活用した。このような出会いの場づくりは、後に報告する井の頭動物園友の会の観察会や都留文科大学附属小学校の授業においても大きな関心が寄せられた。



観察会、授業で活用できるよう「ムリネモ」 との出会いの場を学生とともに作った。自 然科学棟裏の斜面と美術棟の斜面に設置さ れている

(2) 地域の知恵に学ぶ環境復活のプロ グラム

1) 中屋敷地区における農作業の実践

十日市場の中屋敷地区では、学生が中 心となり、荒廃した果樹園の手入れや麦 づくり、稲作などに主体的に取り組んで いる。実際に農作業をとおして地域のか たがたの暮らしの知恵を実地に学ぶこと を目的としているが、イノシシやシカな ど大型獣との共生のあり方を検討するこ とも大きなテーマとなっている。2011年 度は、無事に小麦を収穫し精麦すること ができた。だが、田植えを小麦の脱穀後、 7月に入ってから行なったため米を収穫す ることはほとんどできなかった。参加し た学生からは「微妙なタイミングでこれ ほど稲や麦の生長が左右されるとは思わ なかった」といった感想が寄せられた。 そもそも稲作や麦作などでは、気温や湿 度、水温、天候などさまざまな要素が作 用してくる。こうすればよい、という解 答が見つからないことのほうが多い。「水 温が低すぎるといったことを人間の視点 からではなく、植物の様子から見て取れ るようになりたい」という感想もあり、 参加した学生は戸惑いながらも、稲や麦 の生長をまわりの自然との関係のなかで 丁寧に観察することの大切さを実地に学 んでいるようである。



大型獣との共生のあり方も視野に入れた水 田作業

(3) 学内のほかの団体との交流プログラム

附属図書館展示コーナーでは、2011年ま でフィールド・ミュージアム部門の活動 の様子、キャンパスの自然などを展示や 実物で紹介してきた。また博物館関連の授 業においてその成果を展示するなどし、附 属図書館を訪れる学生、市民からも好評を 得てきた。しかしセンターや部門への相談 もなく一方的に使用の中止を告げられた。 附属図書館は、多くの学生、市民が訪れる 場所であり、その展示スペースは、フィー ルド・ミュージアムの活動を広く知って いただき共感の輪を拡げられる重要な場 所でもある。実際、部門にとって附属図書 館は学内で唯一の展示スペースであった。 センターと附属図書館とがその機能を補 完しあうことで、「野外から附属図書館へ、 附属図書館から野外へ誘う」という本学ら しい実践が展開できたと思われるだけに、 展示スペースが活用できないのは残念で ならない。

富士急行線の都留文科大学前駅の駅舎 では、本学の華道サークルが生け花の展 示を始めた。駅を利用する市民や学生に も好評で、「花があることで駅舎が非常に



かつてフィールド・ミュージアム部門の取り組みを展示する唯一のスペースだった附属図書館での展示の様子。多くの市民からも好評であった

落ち着いた場所となった」という感想も 市民から寄せられた。

(4) 行政、企業、市民団体などとの連携プログラム

1) 市立図書館との連携事業

秋の読書週間にちなみ、2011年度は、「谷 の町・史の里 図書館の活動をささえる 人びと 大正から今日まで、地域の活動紹 介 と題して、2011年10月28日~11月9日 までのあいだ、都留市立図書館閲覧室にて 展示を行なった。戦前、戦後の地域の読書 推進を支え、読書のすそ野を広げてきたま ちの人びと、そして現在、子どもたちに読 書や図書館の楽しみを伝えている読み聞 かせボランティアなど、12団体・機関の活 動を、図書館に残る記録や資料、写真を使っ て紹介した。フィールド・ミュージアム部 門は、企画立案に参加し、写真パネルやキャ プションボードの制作を行なった。市立図 書館は、フィールド・ミュージアム部門と は異なる人のつながりをもっており、この ようなネットワークを活かして展示作成 に関しても写真や情報の提供などさまざ まな支援をいただいている。



貴重な資料を用いて市立図書館と共同でパネル展示を行なった

2)「シオジ森の学校」との連携事業

2011年度は、「シオジ森の学校」が山と渓谷社により日本山岳遺産に認定されたため、通常の講座の他に、シオジの森の生物相の総合調査や、記念シンポジウムが行な

われた。本学からは教員 2 人が植物相と動物相の調査に参加し、学生 9 名と教員 2 名がシオジの毎末調査に参加した。また、記念シンポジウムでは本学の教員がパラウムでは本学の教員がの貴重を後世に残すために"というテーマを後世に残すために"というテースを後世に残すたのに、少はないである。シヴァインである。というな地域に根ざした地域住民との交流のような地域に根ざした地域は、地域交流研究センターが核となり学生と地域住民との交流を促進させていく意義は大きいであろう。



シオジ毎木調査に参加した学生

3) 富士急行株式会社との連携事業

都留文科大学前駅の駅舎を「フィール ド・ミュージアム」の分館と位置づけ、 富士急行(株)と連携し都留文科大学周 辺の自然の紹介を中心とした展示を行なっ ている。月に1度、『フィールド・ノート』 の編集に参加する学生が展示替えをし、 駅舎内の掃除をしている。また本学の授 業、たとえば「博物館学各論」を受講し 学芸員資格の取得を目指す学生の展示に よる成果の発表の場ともなっている。駅 員のかたも駅舎内の定期的な清掃に参加 していただいている。本学の華道サーク ルによる生け花の展示も好評である。な お、駅舎内にはほかに自然に誘う絵本や 部門の機関誌 『フィールド・ノート』の バックナンバー、身近な動物の食べ痕な ど生きものの暮らしの痕跡の実物標本な どを展示している。



富士急行駅舎の展示活動。本学の華道サークルも参加し、駅を利用する人からも落ち着くと好評である

部門の活動をさらに多くのかたに知っ ていただくため、駅舎を起点とした自然 観察会も開催している。なお、部門主催 の自然観察会は6月18日と7月16日に開 催した。この観察会では、学生がスタッ フとして参加し、プログラムの準備や解 説などに携わる。市民参加のもと、あら ためてものを丁寧に観察し感動を参加者 と共有し、データを市民とともに蓄積し 地域の自然を見つめなおすことをこの観 察会は目指している。参加者からは「新 しい発見がまたまたあり、いくつになっ ても新しいものを見るとココロが豊かに なります」といった感想が寄せられた。 スタッフで参加した学生からも「どちら かというと自然のなかで育ってきたほう であるが、よく見るような植物にも多く の発見があったことに驚いた」という感 想があった。この観察会は学生にとって も本物に学ぶ場ともなり、市民と直に交 流できる貴重な場となりつつある。市民 参加型の観察会として今後、内容なども検 討しながら都留文科大学らしい取り組み として定着させていきたい (観察会の様 子については「地域交流センター通信20 号」、28頁を参照)。

富士急行との連携事業であった「ムササビ観察会」は準備が整わず今年度は中止とした。この駅舎にはモニターを設置しているが、将来は本学のムササビライブカメラの映像も放映できるよう検討していきたい。



駅を起点とした観察会も年に4回開催している

4) 三の側ビオトープの作業



都留市環境創造室と環境保全市民会議のみなさんとピオトープの手入れをする。自然に親しむ入り口と位置づけた取り組みを展開している

5) 見沼フィールド・ミュージアムとの 交流

本学元学長の大田堯先生が構想されている埼玉県浦和市を中心とした見沼フィー

ルド・ミュージアムとの交流を2009年度 より続けている。市民、研究者、埼玉大 学で開講されている見沼フィールド・ミュー ジアムに関する授業を受講している学生 などが参加し、定期的に勉強会を開催し ている。2011年度は、6月27日に大田先生 宅で開催されたこの勉強会に参加した。 また大田堯先生のドキュメンタリー映画 「かすかな光へ」(監督:森康行氏)のゲ ストトークとして、7月31日に東京都東中 野のポレポレ座における上映会に出席し、 本学のフィールド・ミュージアム部門の 取り組みについてお話をした。見沼フィー ルド・ミュージアムには、部門の機関誌 『フィールド・ノート』と『地域交流研究 センター通信」、『フィールド・キャンパ スだより、をお送りしている。



大田尭先生宅での見沼フィールド・ミュージアムの勉強会の様子。ここで都留文科大学フィールド・ミュージアムのとり組みについても報告した

6) 郷土研究会会員との「野外遊びの記憶を語る会」の取り組み

フィールド・ミュージアム部門がデジタル化した『奥隆行写真コレクション』をもとに、写真にまつわる記憶を記録する目的で、ミュージアム都留を会場とし郷土研究会会員5名と開催してきた。2011年度は、3月11日の東日本大震災の影響もあり一時中断し、2012年2月25日に再開した。2012年度は実際に富士道を歩きながら地域の自然や人の暮らしを直に見て記録をしようということになった。郷土研究会は1976年に発足し現在、会員約100

名で活動している。都留市の地名の由来や方言についての冊子を発行したり、『郡内研究』という本を毎年、会員が中心となりまとめたりしている。今後、地域の文化や歴史、自然のありようをともに探求していくには欠かせない存在である。



「記憶を語る会」の様子。2012年度は 「富士道」をテーマとする予定である

7) ミュージアム都留との連携事業

ミュージアム都留から、本学のフィー ルド・ミュージアム部門と連携して事業 を展開したいという申し入れがあった。 話し合いを重ねた結果、現代GPで整備し たオープン・アーカイブを充実させる事 業に共同で取り組む提案をした。ミュー ジアム都留のもつ人的なネットワークも 活かしながら、地域の写真を共同で収集 し、記憶を記録し、成果を展示や目録で 公開し地域の市民との交流の機会を増や していこうという内容である。地域の写 真や記憶を広く共有することで、地域を 見直す契機としたい。2012年度はまず ミュージアム都留が窓口となり写真を収 集し、部門が写真のデジタル化を担当し、 どのような効果や課題があるかを探って みたい。



ミュージアム都留と連携して取り組む写真 のデータベース化。その取り組みについて の新聞記事

(山梨日日新聞、2012年5月17日)

8) 都留文科大学附属小学校の授業への参加

フィールド・ミュージアム部門が取り 組んできた身近な野生動物との出会いの 場づくり(「ムリネモ」と出会う場づくり) を授業で子どもたちとともに実践したい という依頼が都留文科大学附属小学校か らあった。都留文科大学附属小学校には現 在、校舎にムササビが暮らしており、子ど もたちのムササビへの関心も高いため、校 舎に隣接する森にこうした身近な動物た ちとの出会いを楽しむ場を子どもたちと ともにつくり、地域の自然を見直すきっか けにしたいというのが依頼の主旨であっ た。そこで、身近な自然の魅力を子どもた ちとともに探り、出会いを楽しもうと、 2011年度は4年生を対象に、6月7日、7 月1日、9月27日、10月27日の4回、各2 時間を使い総合学習を展開した。子どもた ちと取り組む動物たちとの出会いを楽し む森作りの理解を広く共有するために、南 都留森林組合のかたにも参加していただ き、全教職員を対象とした学習会も開催し た。ムササビ、リス、野ネズミ、モグラと出

会うにはどうしたらよいかを子どもたちと考え、子どもたちの発案による観察の場所をつくった。家庭でも「ムリネモ」について親子で話す機会が増え、授業が終わったあとも長期にわたって子どもたちが様子を日記に記すなどしているという。冬には子どもたち全員がリスに出会い、次の4年生になる3年生に伝えようと合同の発表会を行なった。2012年度も継続して取り組みたいとの依頼があった(都留文科大学附属小学校の実践については「地域交流センター通信20号4、8~9頁を参照)。



附属小学校での総合学習への参加。「ムリネモ」の森をつくろう、をテーマに小学校4年生を対象に年4回、授業を行なった

(5) 資料の整理と保存、公開のプログラム

1) オープン・アーカイブ

この事業は、現代GPのプロジェクトの一環として取り組み、成果は『奥隆行写真コレクション』として三分冊にまとめた。市内の小中学校から授業で活用したいという要望も多く、谷村第一小学校には地域を学ぶ教材として写真使用の申はひいまかった。すでに三分冊の目録はようにしかなったため、利用にまとめな市内の一段をと資料編の二分冊にまとめな市内の計算をできませる。この11年度は益子売氏のご家族から提供いただいた写真のデジタル化を進めた。2012年度には

デジタル化および資料の整理が終わる。

フィールド・ミュージアム部門が収集 してきた哺乳類のはく製標本や食痕など きまざまな資料を、市内の小中学校の理科 教材としても活用できるよう、現在、資料 のデータベース化を進めているが、この事 業は丁寧な記録が必要となるため試行錯 誤が続いている状況である。だが、教員を 目指す本学の学生にとっても、身近な資料 を教材化する作業は大きな効果があると 思われる。地域の理科教員や将来教員を目 指す学生との交流の場へと発展する可能 性もあり、この事業も大切にしていきたい。

今後の課題として、地域交流センター の施設を市内の小中学校の教員や市民と 共同で使用し事業を展開できるよう、「研 究員」などの制度も検討する必要がある だろう。



2巻にまとめた『奥隆行写真コレクション』

(6) 学生・教員・市民の参加のプログラム

1)機関誌『フィールド・ノート』の発行

創刊9年目を迎え、年4回(69号~72号)、 各号400部を発行した。本誌の発行には学科、学年の枠をこえて20名の学生が参加した。69号は「春を楽しむ」、70号は「すずむ」、71号は「とる」、72号は「冬仕事」を特集テーマとした。地域を歩き、実際に話を伺い、記事をまとめる過程で、学生はこれまでの経験と学びに照らし合わせ自らの経験の意味を深く問う。編集に参加する学生やイ

ンタビューをした市民との対話を重ねる

ことで、それまで言葉としてうまく表現で きなかった新たな発見をするようである。 市民のかたがたのご理解と支援のなかで 記された学生の記録は、まさに地域の生き た資料といってよい。定期講読の希望者は 年々増え、2011年度は県内外から150名ほ どの希望者があった。また発行日になると 市民からの問い合わせや、直接、センター を訪れ冊子を持ち帰るかたも増えてきた。 市内では、市立図書館や喫茶店、富士急行 都留文科大学前駅の駅舎にも置かれ、本学 のホームページでも閲覧できる。だが、発 行部数が400部であるため本学学生に読ん でもらう機会が少ない。学内にフィールド・ ミュージアムの活動の共感の輪を拡げる ためにも、機関誌をいかに多くの人に読ん でもらうかという工夫を考えることが今 後の課題の一つとなる。

「フィールド・ノート」の発行に参加する学生は、冊子編集だけでなくビオトープ作業や駅舎の展示替え作業、学内で開催される各種のイベントにも主体的に参加しており、フィールド・ミュージアム部門の取り組みに欠かせない大切な存在となっている。2012年度は、学生による発案で読者との交流会を開催する予定である。



『フィールド・ノート』の編集に参加する 学生。学科、学年の枠を越えた幅広い参加 がある。

2) 戸沢川・鹿留川の保全活動

2008年度より、国的にも絶滅が危惧されているカジカとカワラナデシコの保全のための活動を学生とともに行なっている。これまでの学生たちによる研究の結果、都留市内における両種の生育地は昔の分布

域に比べ大幅に減少していること、個体数 減少の要因としては湧水の減少による水 温の上昇や、河原の撹乱頻度の減少などに よる生息条件の悪化が挙げられることが わかってきた。2011年度も引き続き、学生 たちによる調査を行なったが、9月に2度 あった大規模な洪水によって鹿留川河川 敷のカワラナデシコ自生地が崩壊・全滅 した。また戸沢川においてもカジカの牛息 が心配されたが、学生らによる熱心な調査 の結果、カジカは洪水によって流されてい ないことが明らかになった。さらにカジカ に関しては、上流方向へ分布域を拡大して いる可能性があることがわかった。今後の 課題としては、地域住民や小中学校と連携 した保全活動をどのように展開していく かである。教員志望の学生が、地域の小中 学校の教員や子どもたちと一緒に保全活 動を行なう意義は大きいが、小学校現場や 地域住民との連携を組織的・継続的に行 なう難しさをどのように解決してゆくの かが当面の課題である。



学生たちによるカジカの調査

(7) カリキュラムとの連携

2011年度は、あらたに「地域交流研究」を開講し(担当:西教生非常勤講師)、「地域交流研究」は継続して担当した。「地域交流研究」では、「生きもの地図を作る」をテーマに、身近な生きものを対象とした観察、調査、データのまとめ、展示による成果の発表を行なった。この「生きもの地図」は、平塚市博物館の学芸

員、館長を務められた故浜口哲一氏が市 民参加の調査のひとつとして考案、実施 してきたもので、それを本学の自然環境 に即してみようとするものであ る。受講生からは「授業で調査したこ」 といった感想が寄せられた。また成果は といった感想が寄せられた。また成果 展示としてまとめられ、富士急行都留 科大学前駅の駅舎で展示された(本授業 の報告は『地域交流センター通信21号』、 16頁を参照)。



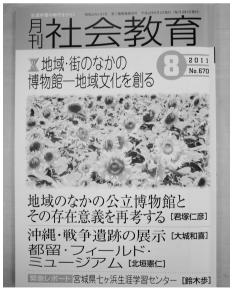
「地域交流研究」の授業の様子。成果は『Color』という冊子にまとめ、地域のかたがたに配布される。

「地域交流研究」は、「フィールド・ ノート』の実践を参考に、地域を歩き、丁 寧に観察し、記事にまとめるという一連の 編集作業に取り組んだ。2011年度は全学科 の1年~4年生、25名が受講した。受講生 は、冊子を仕上げるにあたり、まずインタ ビューしたい市民を決める。1年生もすで にインタビューしてみたいそれぞれにとっ て魅力的な市民がおり、こちらがインタビュー の対象を紹介する必要はまったくなかっ た。記事は「Color」と題した冊子にまとめ、 インタビューした地域のかたがたに配布 した。受講生からは「インタビューを通じ て、他人のライフワークやその人が大事に している哲学を共有できることの素晴ら しさを感じた。それが自分の視野を広げて 生き方を豊かにしてくれる」、「今回のイン タビューで、私は能動的に相手の話を聞く ことがその話しを自然と深く理解するこ とになり、それだけでなくその行動が自分 自身についても深く考えることにつなが ると感じました。書く、伝える、聞くことは疲れます。けれど、そのぶんその記憶は 鮮明に残り、自身の考え方に問いかけるも のになるのだと思いました」といった感想 が寄せられた。

(8) その他

上記のほかに、次のような交流・事業に取り組んだ。

1) 社会教育研究全国集会に参加。8月28日、第七分科会の「地域文化の創造と社会教育」、において、「都留フィールド・ミュージアムの実践と思想地域の自然・暮らし・文化と人間の再生にかかわって」と題して報告した。なお、これに関連して、「月刊社会教育」(国土社)から執筆の依頼があり、2011年8月号に「都留・フィールド・ミュージアム 地域づくりと文化の営み」と題して報告をした。



フィールド・ミュージアムについて報告し た『月刊社会教育』

2) 井の頭自然文化園の友の会の観察会を都留文科大学で開催。2012年12月10日に観察会を実施した。友の会の

メンバー19名が参加し、森の散策と、自然科学棟裏に設置した「出会いの場(エンカウンタースペース)」において野ネズミの観察をした。井の頭自然文化園にもフィールド・ミュージアムが観察会で実践している「出会いの場」の空間づくりをしたいという協力の要請もあった(観察会の様子は『地域交流センター通信21号』、10頁を参照)



井の頭自然文化園友の会の観察会は、都留 文科大学のキャンパス周辺で行なわれた 多くの学生が参加するようになった

- 3) NHKの自然番組「ダーウィンが来た」 の放映に制作協力した(『地域交流センター通信21号』、11頁を参照)。2012 年3月18日に放映され、全国から多 くの反響が寄せられた。
- 4) 東京都御岳ビジターセンター改修に伴うアドバイザー会議に出席。東京都御岳ビジターセンター改修に伴い、今後、東京都にあるビジターセンターを有機的に結び、特色あるフィールド・ミュージアム活動を東京都として展開したいという依頼が東京都環境部から寄せられた。都留文科大学のフィールド・ミュージアム部門の取り組みを参考にしたいということで、2012年3月4日、アドバイザー会議で本学のフィールド・ミュージアム部門の取り組みを紹介した。



東京都からの要請で参加した御岳ビジターセンターでのアドバイザー会議

2012年度のおもな事業

2011年度に取り組んだ事業は基本的に 継続する。また教育的な効果を重視した取 り組みをこれまで以上に大切にしたい。 そのため次の1)~4)の事業を特に丁寧 に展開していく。1)「シオジ森の学校」は、 部門でも事業を引き受けた経緯もあり、ま た学生の教育的な効果が期待できるため 部門の事業と位置づけ活動する。2)2012 年7月15日に開催される「とびだせ美術館 ワークショップ」に部門として全面的に支 援、参加する。3) ミュージアム都留と連 携し、本学のオープン・アーカイブをさら に充実したものにする方法を検討する。 4) 平塚市博物館の活動を参考に、本学ら しい市民参加の観察会・調査のプログラ ムを創る。

まとめ

2011年度の取り組みとその内容を振り返ってみると、これらの事業が一朝一夕に立ち上がったわけではないことがわかる。センター発足以前の長い前史や実践をもとにした思想、自然を観察する工夫、現代GPの採択による事業の展開と推進、この間に築いてきた人とのつながりといったものなしには、こうした取り組みはできなかったにちがいない。大学が中心と

なり、学生や教員、市民が参加し、また 地域の小中学校、社会教育施設、行政と の連携のもと、「人間探求」を掲げる本学 にふさわしい事業に育ちつつあるのでは ないだろうか。近年、フィールド・ミュー ジアム部門への外部からの評価が高まっ ているのも、このような長い試行錯誤を 重ねたうえでの独自な取り組みが注目さ れているからだろう。

しかし、課題も多い。たとえば、施設は相変わらず手狭で音による振動の問題も解決できていない。また、私たちの活動が学内に十分に伝えられているとは言い難い。展示(そのためには展示スペースが必要となるが)やホームページの活用など広報手段を考えながら、学内のみならずさらに広く多くの人びとに活動を伝え共感の輪を拡げることが私たちの次の課題の一つとなる。

私たちは、事業をむやみに増やそうとは 考えていない。むしろ今まで取り組んでき た事業を丁寧に検討し、それらを有機的に 結びつけながら、本学らしい、部門の身の 丈にあったものへと仕立て直していきた い。そのためには、専門的な技能をもった 専門職員の配置は不可欠である。現代GP の事業が終了後、センターにも事務職員 がおかれたことはセンターの円滑な運営 にとって大きな意味をもつ。ただ、事務 職員はセンター全体に目配りし受け付け や電話の対応をする必要があるため、席 を離れるわけにはいかない。フィールド・ ミュージアム部門では、自然の動向の記 録や調査、地域の人びとへの対応などを 継続して行なわなければならない。さら に、フィールド・ミュージアム部門の事 業はどれも短期ではなく長い時間を視野 にいれた継続的な取り組みが重要となる。 今後、兼任教員の負担を軽減しながら円 滑に事業を展開していくには、専門的な 技能をもつ職員の配置が必要である。

(文責:北垣憲仁・坂田有紀子)

平成23年度学生アシスタント・ティチャー(SAT) 配置事業についての総括と展望

発達援助部門(佐藤 隆)

I SAT—A/Bの総括と展望

1.取り組みの概要

この取り組みの概要は以下に示すとおりである。

都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティーチャー (SAT) を派遣し、放課後の学習支援と、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を学生に体験させることによって、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展を図る。

また、この事業を通して大学と小中学校との協力・連携を強めるとともに、現職教員に対しての研究的支援・学習機会の提供を行う。これには大学と学校現場

とが共同し、地域をベースにした実践・研究を発展させるためのケース・カンファレンスをはじめとする研究協議会の開催 も含まれている。

これらの運営にあたっては運営協議会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行うこととしており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育モデルの開発として位置づける。

平成23年度SAT派遣学生数実績

	学生数 (延人数)				活動数(延回数)									
	前	期	後	期	1	승 함	ŀ	前	期	後	期	1	승 함	ŀ
	Α	В	Α	В	Α	В	U	Α	В	Α	В	Α	В	С
谷村第一小学校	16	15	12	12	28	27	10	46	92	50	93	96	185	
谷村第二小学校	6	13	5	13	11	26		48	115	29	90	77	205	
文大附属小学校		6		6		12			48		56		104	
東桂小学校	12	12	11	11	23	23	9	89	99	102	121	191	220	151
宝 小 学 校		8		8		16			78		64		142	
禾生第一小学校	8	13	5	12	13	25	6	62	117	39	91	101	208	97
禾生第二小学校	7	5	4	3	11	8	4	42	26	33	37	75	63	82
旭 小 学 校	5		8		13			40		55		95		
都留第一中学校	2	3	1	1	3	4	2	12	19	10	15	22	34	20
都留第二中学校	1		1		2		2	2		2		4		22
東桂中学校	6	14	5	10	11	24	4	46	118	35	120	81	238	26
小 計	63	89	52	76	115	165	37	387	712	355	687	742	1399	564
合 計	15	52	12	28		317		1,0	99	1,0)42		2,705	

2 . 活動の内容

(1) SAT—A/Bタイプの活動の内容 昨年度は市内ほぼすべての学校におい てA/B両タイプの活動を行ったが、ど の学校もSATの活動を高く評価しており、 また学生の熱心さに助けられたことが共 通に総括されている。 以下に東桂小学校の総括を例としてあげておく。

子どもと保護者の感想に見られるように、学校において、教師以外のおとな(それも比較的年齢の近い)に学ぶことは子どもにとって新鮮であり、授業とは異なる学び方を経験できたことが、重要であった。

子どもたちの感想から

- ・先生が優しくしてくれて、よかった。分かりやすく教えてくれた。
- ・ちょっとプリントが難しかったけど、また参加しようと思う。
- ・授業の時できなかった問題もSATで勉強したら分かるようになった。
- ・先生が早く名前を覚えてくれてよかった。

保護者の感想から

- ・学校で先生以外のお兄さんやお姉さんに勉強を教えてもらうことは、子どもにとって は楽しく素直に受け入れられたように思う。
- ・毎回楽しそうに受けていました。本人に聞くと分かりやすくて「楽しい」と言っていました。
- ・少人数での学習はとってもありがたいです。また、来期もお願いしたいです。

一方、学生にとっては、教育実習とは異なる角度から、子どものようすを学び、授業づくりの難しさを知る良い機会となっている。また、SAT担当の教師たちが、メ

ンター的な役割を果たしてくれており、学生の教職についての理解が進んだ。また、 学校・教師にとっても若い学生たちの存在は刺激になっているようすも見える。

学生の感想から

- ・最初は子どもたちの実態を把握できずにどういう教え方をしたらよいのか困ったとき も何度かありました。その中で先生方との情報交換は貴重な時間でした。
- ・使用教材はいろいろあって良かったと思います。その教材を参考に自分でオリジナル の問題を作ることができました。
- ・学校の生の日常と向き合えたことは、とても勉強になりました。

学校関係者の感想

- ・いろいろなレベルの子どもたちがいる中で、よく頑張っていた。意欲が持てるように 工夫していることも良かった。終わってからも子どものがんばりを認めるお手紙を書 いてくれて、子どもたちは喜んでいた。
- ・学習になかなか集中できない子どもたちへどう指導すればいいか真剣に考え、指導していた。

(2)対応して行われた授業「学校参加」 について

23年度は、SAT活動のふりかえりの場である「学校参加」の運営にも、改善が見られた。

これまで配置できた教員数が5名であった。そのため各学校での活動は、比較的大きなグループで、概括的な報告とそれに対する教員からのコメントという形式で行われていた。しかし昨年度 (2011年度) はボランタリーにかかわる教員が、最終的には13名となり、各学校でのふりかえりが行われ、実態を具体的に学生が話し、それについて学生自身が考えるという機会になり、SATの本来の目的に近づくことができた。

以上のようにおおむね昨年度も良好な 活動が展開でき、確実に定着しているが、 他方でいくつかの課題も明らかになって いる。以下に列記しておく。

(3) 今後の課題

SAT-BタイプはTT的な活動を主に行う ものだが、事前の打ち合わせが十分で なく、教師の指導計画も知らないまま 活動に参加せざるを得ない場面が散見 されたこと。

各学校の必要なSATの人数と学生の希望が大きく異なり、学校によっては十分な活動が展開できないところもあった。

学校参加 の授業とSATの活動は一体的に取り組まれてはじめて意味を持ってくるが、すでに単位取得をしてしまっている学生にとって、 学校参加 の授業への参加を促す方法を新たに検討する必要がある。

来年度行われる「教職実践演習」との 関係の調整。

II SAT─Cの活動の総括と展望

(文責 筒井潤子)

臨床教育学フィールドワーク (SAT-C) の昨年度 (2011年度) の活動を振り返る と、7年目を終えたこの活動の一つの転機であったように思えてきます。

臨床教育学フィールドワークは、初等教

育学科の11のコースの中の一つである「臨床教育学コース」の3,4年生だけに限定したSATの活動の一つです。様々な困難を抱えた子どもに、個別につき、1年間を通してその子どもの支援にかかわりま

す。子どもの抱える困難は、本当にさまざまで、また最初に援助を必要とした「困難」とはまた違う形での困難が表れてきたり、表に見えて「困難」の裏側に隠れて見えなかった「本当の困難」が見えてきたりすることもしばしばです。

またそういった「困難」の抱えた子どもとの個別の継続的かかわりでは、学生と子どもとの関係性が深まり、深まるが故の「おもしろさ」や逆に「しんどさ・重たさ」が出てきます。子どもの抱える「困難」を深く見つめると同時に、その関係性の中で生じる学生(援助者)自身の感情を見つめ、自分のありようを問い、また、それらをともにこの活動に参加する学生たちともにカンファレンスという場で語り合います。そういう流れの中で、学生たちの感性が豊かに深く育っていくように感じます。

昨年度は、初心に帰り、この活動が、 真に今のべたような活動になってゆくた めに、活動の在り方を工夫しました。

1 つ目には、大学教員と学校現場との密なつながりの中で、個々の子どもの援助を考えてゆくため、学校数を限定し(希望があれば可能ということで、結果的には2 校の追加がありました)、月に1 回程度ではありますが、教員が学校を訪問し、活動の状況、子どもの変化、学校現場の様子などをお聞きしてきました。

2つ目には、これまで、月1回、6限に行ってきた大学内でのカンファレンスを、木曜4限の授業時間帯に組み込み、ほぼ毎週1回、全体でのカンファレンス、そして学校ごとのカンファレンスを行いました。これは学生にとって、時間的にはかなりきつかったようですが、同じ活動をする者同士が、

頻繁に顔を合わせ、また、ほかの学生の報告を聞くということで、大きな刺激になり、 精神的支えにもなったように思います。

3 つ目には、現在の学校・子どものおか れた状況の中で、子どもの「困難」という とき、「虐待」の問題は、切り離すことがで きない大きな問題です。しかし、これはな かなか表に現れることがなく、水面下で進 行し、表面上は、別の「困難」と見分けをつ けることは非常に難しいものです。また、 プライバシーの問題もあり、学生にその事 実を伝えてもらうことは難しいことがほ とんどです。しかし、今の時代に教員とし て学校現場に出る際に、この問題に無関心 でいることは許されることではありませ ん。そこで、特別に、近隣にある養護施設 を校区内に持つ小学校での活動を、この活 動の一つとして加えました。現在の養護施 設の子どもたちの入所理由のほとんどは 「虐待」です。その子供たちのいる学校での 活動を加えることで、その学校に参加する 学生だけでなく、カンファレンスを通じて、 ほかの学生たちにも、「虐待」の問題を身 近に感じ、考える機会が持てるようになり ました。

レポートなどでも、学生の感性の深まりを感じます。しかし、矛盾することですが、 1年間の試行錯誤の中で、教員の負担の増大、また学生も副免・諸資格の取得との時間的葛藤など課題も多く見えてきました。

そういう意味では、この活動はこれからの在り方が勝負だという感覚を持っています。

本年度もすでに活動が始まりました。 学生とともに試行錯誤しつつ、より意味の ある活動にしてゆきたいと思っています。

B. 地域教育相談室の活動

(1) はじめに

地域教育相談室の活動は本年度 (2011 年度) で 9 年目に入った。昨年度 (2010 年度) に引き続き、以下の ~ 及び の活動を行うとともに、 の活動を開始 した。なお、活動の概要については (2) (3) (4) に記述した。 来室,訪問,電話・ファックス・電子 メール等による相談活動(OB支援 を含む)

教育委員会等が主催する教職員研修 への講師派遣やサポート

校内研究等への講師派遣及びサポート

公開教育講座等の研修会の実施 都留市教育研修センターと連携した 都留市現職教員メンタルヘルスサポー ト

その他 (地域の教育関連団体からの 依頼への対応)

(2)相談、研修依頼件数と種別

平成23年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師派遣の概要については以下の通りである。 の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。 は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計した。 ~

の相談件数をさらに集計した総数を にまとめた。 は ~ にカウントしなかっ たOB対応についてである。

については昨年度より若干増加している。訪問先から担当者の携帯に直接連絡・相談があるケースはさらに増えている。

については昨年度までと同様に県外 への対応が多い。研修会の進め方や事務 連絡以外の内容が若干増えているが、そ の多くは学校長や研修担当者による学校 の問題や指導困難学級についての相談で ある。結果的に研修会講師派遣の依頼に 繋がることが多い。学級担任など当事者か らの相談はほとんどないのが現状である。

については、今までと同様に利用が 少ない。原因はスタッフが在室時に訪問 して相談することは難しいからであると 思われる。訪問先で研修会終了後に相談 されることが多い。

については、県内ともに昨年 とり減少傾向である。理由のひることが 多いということが考えられる。また、ということが考えられる。また、ということが考えられる。また、というではなり、からないので、というでは、というでは、ないでは、ではないで、ではないで、その内ではは、ではないで、ではないでは、その内ではないでは、ではないでは、ではないでは、1年に複数回の依頼が増加しているのは昨年度と同様である。

のOB支援活動は体制がまだ整っていないので広報はしていないが、口コミで情報を得ての依頼であった。電話相談は都内の新採用教員で、どこにも相談できず一人で悩んでいたときにたまたま友人から本相談室のことを聞き、電話をしたと言うのが経緯である。また、面接によるサポートをした2人は南都留地域の教員であった。

電話&FAXによる相談活動の概要(担当者が携帯電話で行った対応、OB支援は除く)

				ı	
 相談内容	ţ	合 計			
作談り社	北麓・東部	県 内 県 外			
児童生徒の問題行動について の対応	1	1	2	4	
校内研究・調査・研究の進め 方や内容についてのコンサル テーション	3	4	19	26	
その他の事務的対応	23	10	73	106	
合 計	27	15	94	136	

メールによる相談活動及び事務処理の概要 (応答を1回とカウント)

相談内容	ţ	合 計		
伯談內各	北麓・東部	県 内	県 外	合計
研修会の進め方・事務処理	7	62	277	346
学級・学年経営、メンタルへ ルスなど合計	3	0	19	22
合 計	10	62	296	368

来室による相談活動の概要

相談内容	t	合 計		
伯談內台	北麓・東部	県 内	県 外	
研修会及び会議の進め方など	0	0	0	0
学級・学年経営、メンタルへ ルスなど	5	1	0	6
合 計	5	1	0	6

訪問による相談活動

相談内容	ţ	合 計		
相談内 台 	北麓・東部	県 内	県 外	合 計
Q-Uによる学級集団の理解と 対応のポイント	2	3	19	24
Q-Uの結果に基づく学級コン サルテーション	1	10	33	44
学級集団育成の具体的な方法 についての理論と体験	1	1	25	27
その他	3	0	16	19
合 計	7	14	93	114

形態別による相談活動の概要

形態	ţ	스 =1		
形態	北麓・東部	県 内	県 外	合 計
電話&FAX	27	15	94	136
メール	10	62	296	368
来室	5	1	0	6
訪問	7	14	93	114
合 計	49	92	483	624

OB支援活動

・電話相談 … 1名、延べ9回。勤務校での人間関係についての相談。日中の相談が難しい場合は、担当者と打ち合わせ、夜間や休日に振り替えて行った。

・カウンセリングと学級経営

コンサルテーション … 2名、面接各 自3回ずつ実施。内1回 は勤務校を訪問し、授業 参観とコンサルテーショ ンを行った。2回分のQ-U提供と結果の分析。

(3) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室の公開教育講座を今年度は、以下のように2回実施した。

1回目は、3月11日に発生した東日本大震災の影響が全国に波及している時期であったので、実際に現地で医療支援活動にあたった都留児童相談所の所長で精神科医の近藤直司氏を講師に迎えて、被の現実と必要な心のケアについてだいた。参加者は学生11名、教育関係13名、教育関係者31名、医療関係者の感想からは、報道だけでは分からない被災地の生々しい現実、実際に支援活動をした医師の視点に触れ、自分でできることが窺える。

2回目は、次年度の学級経営スタートに 備えるエンカウンターの体験講座で、毎年この時期に実施しているものである。 参加者の感想を読むと、学級経営の具体 的な方法を自分自身が子どもになの異たまりで体験し、その効果や実施の留意とと を理解できたようである。現職教員にとっても、教師を目指す学生にとっても好った。また、忙しさの中で学級のスタートに備えるためには、新学期になってからでは遅く、この時期が適当であると思われる。

詳細については以下の通りである。

1)第1回公開講座

日時と内容:2011年5月27日(金)

19:00~20:30

「被災者にとっての心のケアについて 考える」

~ 山梨県「心のケアチーム」の一員として被災地に入って感じたこと~

講 師:近藤直司氏

(都留児童相談所所長・

精神科医)

場 所:都留文科大学2号館

1201**教室**

参加者:64名

概 要:「地震・津波・放射能とい う三種の一次トラウマ」「報道 や無神経なマスコミや支援者、 風評被害、差別からくる二次 的トラウマ」「つながりの喪失 により追い詰められる人々」 「もともと存在していた精神科 医療ニーズと震災の影響」「子 どものこころに悪影響を及ぼ す危険な現状」「支援者として 必要な心構え」などについて 被災地での生々しい体験を交 えながら語っていただいた。 その後15分程度時間をとり、 講演を聞いて感じたことや考 えたことを参加者がグループ になって伝えあうグループシェ アリングを行った。

<参考> 参加者の感想(抜粋)

- ・人の心理に焦点を当てたお話で、現地で被災された方の現状には胸をえぐられる思いがしました。余震が少なくなり、地震のことを考える時間が減少していますが、今でも問題は山積であることを忘れてはならないと思いました。これからボランティアに行く予定があるので参考になりました。(都留文科大学学生)
- ・今回の震災でとても複雑な気分になったのは自分だけではなかった。被災地の人もいろいろな必ずしもポジティブではない気持ちを抱えているということに話を聞いて気づきました。そして、ずっと長い目で気にしていかなければならない出来事で、心のケアはずっと続くのだと思いました。(40代:保健医療関係)

- ・ボランティアに行く人はたくさんいて、私自身も気持ちはあるが仕事があってそれはできない。無力感があるのは確かだった。ただ、行く人には行く人のマナーがあり、それは非効率を甘受することだったとは驚いた。自分が被災地に行っているとしたら、きっとテンションがあがってしまうと思うし、効率を求めてしまう。この講演を聞くことができて本当に良かった。(30代:高校教員)
- ・今までの被災地の情報のほとんどはテレビから入ってくるものだったので、ほんの一部であったり、いい面ばかり見ていたように思いました。近藤先生のお話から、見えていないことを知ることができとてもショックでした。自分自身、3月11日の感覚や感情が薄れつつあることを改めて感じ反省しました。「これから私にできることは何だろう?」と常に問いかけていきたいと思いました。(40代:中学校教員)
- ・心に響く言葉が多かったです。支援者への支援は疲弊している方への支援なので、どう長期 的に支援していけるかが大切であると思いました。(40代:行政関係)
- ・被災地へ支援に行くことになっています。地元の支援者の負担を軽くするために、具体的な 支援、効率を求めないこと、に注意しながら行動したい。貴重な内容をありがとうございま した。(30代:保健医療関係)
- ・メディアの情報と実際の情報とのギャップに驚き、軽い気持ちでボランティアに参加してみ たいと思っていた自分を反省し、この講演を胸に、自分にできる小さなことを見つけて行き たいと思いました。(50代:中学校教員)
- ・「高揚感」ということが一番気になりました。「何かしてやろう、あげよう」と言う気持ちを入れ替えていかなくてはいけない、相手の立場に立ってみる難しさと大切さを思いました。 (50代:教育関係)
- ・現地に行ってきた人でなければお話できないことをお聞きすることができ、大変有意義でした。報道から知る内容から思いをめぐらすことができなかったのですが、それ以上の傷つきがあることを知り、ショックを受けました。これからどうなるのかがとても大切なんだとつくづく思いました。日常生活を取り戻している私にとっては意識の薄れが進まないように、関心を持ち続けるようにしていきたいと思いました。また、グループでの話し合いは色々な人の意見が聞けてよかったです。(30代:教育関係)
- ・メディアの情報をどう受け止めるか、現場とのギャップを感じた。自分が何をしてやれるか、何かしてあげるためのボランティアでは、行かない方がいい。行けない。「聴く」ことができる気持ちをつくって行きたい。今は自分のできることをしようと思う。(50代:中学校教員)
- ・まだまだ続く支援はメンタルヘルスのみではなく、あらゆる問題を抱えていると思われます。 早期解決が望めない現状の中で鋏状格差がさらに広がっていくような気がする。声にならないSOSをネグレクトしないこと、大切なことですね。大変深い話を聞くことができました。 (50代:小学校教員)
- ・テレビでは聴けないリアルな例を聞けてよかった。効率性を求めることでより非効率になる 難しさを感じた。また、行政職の不足の現状をリアルに感じた。グループワークで被災地が 地元の方、支援に行った方と知り合うことができて良かった。(20代:行政関係)
- ・被災の現場には人間にとっての本当に大切なものが日々の日常にあり、それを大切にしなければならないことがよく分かった。自分の心や体についての現状を知り、SOS、助けを求める力が大切、また、予防する力、準備する力、学ぶことの大切さなどもそうである。これらは被災してからではなく、普段からつけていくものだと感じた。短時間であったがシェアリングが有効でした。10倍深く感じました。(40代:中学校教員)
- ・被災地には報道されていない真実があることを知った。効率を求めてはいけないという話、 外からの支援者のテンションが高くなりがちだという話に驚き、納得した。「自分にできる 少しのこと」を私も実行したいと思いました。(40代:小学校教員)

2) 第2回公開講座

日時と内容: 2012年2月18日 (土)

13:00~16:30

「人間関係づくりに活用するエンカウンター講座」

~ 初心者でもできるショートエクササイズを中心にして~

講 師:品田笑子

(都留文科大学地域交流研究

センター特任教授)

箭本佳己

(都留文科大学学生相談室

カウンセラー)

場 所:都留文科大学 1 号館1301教室

参加者:18名(中学校教員3名、

小学校教員8名、学生7名)

概要:学級開きに構成的グループ エンカウンターを活用する理由について説明し、その後工力 ササイズを体験しながら、学の 開きのノウハウについて学のでは、「よろしく握手」「バース会」「円から下さなエクササス」「円からアン」「分身を探せ」「ネームゲーム」「先生を知るイエスノークイズ」「新聞紙ジグソーパズル」「いて、

「感じ事典」である。

<参考> 参加者の感想(抜粋)

- ・実習が多く自分が楽しく学べました。時間があっという間に過ぎてしまった印象です。学級 開きの頃にやる内容が多く、新年度に使いたいと思いました。(50代:小学校教員)
- ・エンカウンターについての知識と具体的な活用法について学ぶことができた。体験がメイン の講座でよかったと思う。有効性を実感することができた。(20代:中学校教員)
- ・品田先生の授業でも体験していましたが、改めてエンカウンターの実習をやってみて、様々なことを考えさせられました。教育現場ではつながりという部分が大切だと思いますが、将来的に活用していきたいなと感じました。(20代:学生)
- ・たくさんのエクササイズを体験できて楽しかったです。ほんとうに子どもたちの気分を味わいました。子どもたちもこんな気分で取り組んでくれたら、きっと活発で人のことを少しは考えられる子どもたちに育って行ってくれるだろうと感じました。その時、その時に必要なエクササイズを子どもたちに示し、紹介して行こうと思いました。(20代:小学校教員)
- ・すごく実践的な内容でためになりました。今日の4時間弱で (特にグループの人と) 仲良くなれた、あるいはお互いを知ることができたのですごいなと思いました。(20代:学生)
- ・授業だけでは知ることができなかったエクササイズをたくさん知ることができ、自分が体験できたことが今後の糧になると感じました。受講できて良かったです。(20代:学生)
- ・エンカウンターとは聞いたことはありますが、何をするのか知りませんでした。もっと内面をエグられるようなものかとピクピクしてきましたが、楽しみながら自己理解、他者理解できました。これなら生徒に試すことができそうです。また、学級経営に行き詰る前に、相談させていただきたいと思いました。(40代:中学校教員)
- ・将来教師を目指している私にとって、とても良い時間を過ごすことができました。正直、は じめ説明が終わったら「エンカウンターを体験する」と言われたときには、知らない人と長 い時間接することになるので不安がいっぱいでしたが、あっという間に楽しい時間を過ごす ことができました。来てよかったです。(20代:学生)
- ・エンカウンターを取り入れた道徳を数回行ってみたのですが、ねらいがはっきりとしないことや少しとっつきにくいことから、最近では型どおりな道徳ばかりしてきました。今日来てみて、授業に明日からでも取り入れたいものばかりでした。自分のことを言ってもらうことが少ないため、貴重なご意見をいただけたこともうれしかったです。(20代:小学校教員)
- ・もうすぐ1年が終わり、新しい1年が始まるという時期なので、学級開きに使えるエクササイズをいくつも紹介してくださり、4月になったら使いたいというようなものばかりだった。 大事な年度初めを充実して過ごせそうです。久しぶりにエンカウンターができて、スカッとしました。(20代:小学校教員)

(4) 山梨県内の教育委員会及びその他 の教育関係団体との連携

山梨県内の教育関係機関との連携は以下の通りである。南アルプス市教育委会生涯教育課と連携した指定校を中心した学校サポート活動は本年度で市内の全ての学校を巡り終えた。本年度も指定校を外れた学校が山梨県教育研究所のプロジェクトを利用して継続したサポートを希望してくるケースが多かった。また、全体研修や校内研、公開講座等で相談室の活動を知り、研修会への講師派遣などを依頼してくるケースも多かった。

1) 都留市教育研修センターとの連携

都留市現職教員メンタルヘルスサポート事業として、年12回の面接日を設定した。また、スタートに先立ち、都留市転入・初任教員の研修会で学級経営についての講演と相談室の利用の仕方についての説明を行った。

2 名の面接を合計15回実施、1 名については授業参観も行った。また、2 回分のQ-Uを提供し、教師の観察とQ-Uの結果をもとに学級の状態を分析し、学級経営や児童の個別指導の方針の検討に利用した。2 名とも無事に学年末を迎えている。

2) 南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。3回目の会議では、地域教育相談室の活動について紹介した。

3) 富士吉田市教育委員会

本年度も、「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座と事例研究の仕方について研修を2回、ソーシャルスキルトレーニングの実技研修を1回担当した。

4) 南アルプス市教育委員会

5月にQ-U基礎講座の一斉研修の講師を 務め、10月~12月にかけては研究指定校7 校のQ-Uの結果をもとにした授業研究の助 言者を務めた。また、研究授業後は個別 の相談にも対応した。

5) 山梨県総合教育センター 本年度はQ-U基礎講座を担当した。

(5)講師派遣先

午前と午後で内容が異なる場合、複数対応の場合は午前の内容もしくは代表的な対応で整理したものもあり、「 訪問による相談活動」の件数より少なくなっている。

派遣先を見ると、複数回の依頼や前年度から継続しての依頼が相変わらず多い。また、内容的にも学級経営の具体的な方法について実習を交えて学習するもの、学級診断とそれに合わせた対応策のコンサルテーションなど実際の学級経営に直接かかわる内容が中心であった。今年度直接対応した学級数は延べ167学級であった。

1) Q-Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会

< 山梨県内 > 南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育委員会(2回)、山梨県総合教育センター

< 山梨県外 > 那須塩原市教育委員会 (2回)、八戸市教育委員会、金沢市教育プラザ富樫、さいたま市教育研究会教育心理・教育相談部会、北九州市立教育センター、小千谷市生徒指導研究会、伊勢市教育委員会 (2)、山形県教育センター、千葉市教育センター、茨城県高等学校教育相談部、鎌倉市立稲村ガ崎小学校、目黒区立目黒第十中学校、豊島区立南池袋小学校、狛江市立第三小学校、座間市立栗原中学校、郡山市立冨田中学校、足立区立弘道小学校

2) Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーパイズ

- <山梨県内>なし
- < 山梨県外 > 横浜市立峯小学校(年4回:12学級×2)、新潟県聖籠町立山倉小学校(2回:12学級×2)、聖籠町立亀代小学校(2回:12学級×2)、聖籠町立蓮野小学校(2回:12学級×2)、福岡県苅田町教育委員会(4学級)、千葉市教育センター(2学級)、伊勢市立小学校(4回:2学級×4校)、山梨市立南中学校(3学級)、那須塩原市立共英小学校(1学級)、墨田区立中川小学校(4学級)、目黒区立目黒第十中学校(2学級)

3) Q-Uの結果に基づいた授業研究の助言者

- < 山梨県内 > 南アルプス市立落合小学校、南アルプス市立八田小学校、南アルプス市立八田中学校(2回:2学級)、南アルプス市立芦安中学校、南アルプス市立大明小学校、南アルプス市立櫛形西小学校、南アルプス市立櫛形北小学校、南アルプス市立白根巨摩中学校、南アルプス市立芦安小学校
- <山梨県外>三重県いなべ市立東藤原小学校、新潟県聖籠町立聖籠中学校(2学級)、那須塩原市立厚崎中学校(3学級)、那須塩原市立埼玉小学校(4学級)、那須塩原市立共英小学校(2学級)、那須塩原市立東那須野中学校(4学級)、聖籠町立蓮野小学校(1学級)、三重県いなべ市立員弁中学校(2学級)
- 4) 特別支援教育を推進する学級経営
- <山梨県内>なし
- < 山梨県外 > 福井県坂井市教育委員会
- 5) 構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育
- < 山梨県内 > 富士吉田市教育研修所、南アルプス市立芦安小学校
- <山梨県外> 高知県香南市立香我美中学校(2回)、香南市立赤岡中学校、足立区立長門 小学校、葛飾区総合教育センター(年4回)、目黒区めぐろ学校サポートセンター、 東京都教育相談研修会、郡山市教育研修センター(3回)、那須塩原市教育委員 会(年2回)、練馬区立大泉北中学校(年2回)、東京都立南多摩中等教育学校、 目黒区立目黒第十中学校、群馬県総合教育センター、足立区立竹ノ塚小学校、 三重県教育委員会生徒指導グループ、伊勢市教育委員会(2回)、三重県教育 委員会、三重県いなべ市立員弁中学校

6) その他

山梨県高等学校教育相談部、新潟県聖籠町教育委員会 (町一斉研修)、郡山市教育研修センター (カウンセリングの基本スキル)、三重県教育委員会 (生徒指導リーダー研修:年2回)、三重県伊勢市教育委員会生徒指導担当者研修、三重県いなべ市教育委員会Q-U担当者研修 (2回)、逗子市立教育研究所

(4) まとめ

- ・相談室開設 9 年目を迎え、公開講座や研修会講師の派遣などの積み重ねにより相談室の活用の仕方が広まってきていると思われる。昨年度は日程が合わず断念したので今年度こそはと依頼してくる学校や異動先からの依頼が山梨県内に多かった。
- ・今年度も活動の中心はスタッフが出向いてニーズに応える形態であったが、都留市教育研修センターとの連携により、相談室に来室可能な都留市内の学校と繋がることができたのは大きな成果と考える。管理職や学校の理解がないとたとえ悩んだり困ったりしていても来室する勇気や余裕はない。教師や学校の資源としてのどのような活動ができるか、地元だからこそできる活動は何か、今後も模索していきたい。
- ・今年度はOBからの電話相談は1ケースだけであったが、その経過から新採教員は悩みがあっても相談の機会や場所が少ないことが分かった。今後も相談窓口としての活動を続けたいと考えている。また、様々な訪問先で本学出身の教員に声をかけられる。地元だけでなく、全国のOBに活用してもらえるように努力していきたいと考えている。
- ・公開講座については、時代や地域のニーズを分析し、関心が高くタイムリーな企画ができるように情報を収集していきたいと考えている。また、学級開きに活用できるエンカウンター講座は、次年度

も同様の時期に開催したいと考える。

< H24年度の活動計画 >

- 1.研修会の企画・運営
 - ・公開講座を年2回程度実施
- 2 . 講演・実技研修会などによる学校教育サポート
 - ・富士吉田市教育委員会主催の研修会への講師派遣
 - ・校内研修会への講師派遣
- 3 . 地域の活動への協力
 - ・南都留教育相談ネットワーク会 議への参加
 - ・都留市教育研修センターとの連 携による教師サポート
 - ・「富士吉田市問題を抱える子ど も等の自立支援事業」への協力

4 . 相談活動

- ・教師の学級経営のコンサルテー ション及びスーパーパイズ
- ・教師・教育関係者個人の臨床的 問題への対応
- ・卒業生の学級経営サポート
- 5. 東日本大震災被災地支援活動
 - ・被災地の学級経営サポート
- 6.その他
 - ・狛江市教育委員会「かけはしプロジェクト」の支援
 - ・横浜市スクールスーパーバイザー
 - ・那須塩原市教育委員会との連携
 - ・郡山市教育委員会との連携(被 災地支援を含む)

(文責:品田 笑子)

「地域情報教育」

平成24年5月23日 情報センター 杉 本 光 司

1 . 活動指針

2007年度 (平成19年度) から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中に、新しい分野として「地域情報教育」に対する取組みが取

り込まれたことにより、私たちの活動において大きな礎を築くことができた。

当初は、私たちが目指す「地域情報教育」における活動の指針として、次の(1)~(3)までの三つを掲げた。これらの活動には、情報センタースタッフ、「情報メディア

演習 」・「情報メディア演習 」の受講生 との協同事業として取り組んでいる。

更に、今年度から、初等教育学科美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、図工・美術作品データベース作成支援プロジェクトを新規に立ち上げ、情報センターとの提携により新規に始めることになり、四つの柱とした。

- (1) 小中学校への情報リテラシー・ネットワーク・セキュリティ教育支援
 - ・都留市情報教育研究委員会 (教育委員会、全小中学校情報教育担当者) への参加
 - ・ICTを利用した学校業務に関する 研修会の開催
 - ・それぞれの学校の情報教育への 支援
- (2) 遠隔授業の実施と支援
 - ・大学と小中学校間での遠隔授業 の実施
 - ・小中学校間の交流プログラムの 支援
 - · e-learningへの取組み
- (3) ホームページ作成と運用における 支援
 - ・小中学校の公式ホームページの 作成支援
 - ・定期的な更新に関わる運用支援
 - ・小中学校ホームページ作成担当者への研修支援
- (4) 図工・美術作品データベース作成 支援プロジェクト(たからばこ作戦)
 - ・旭小学校、子どもアトリエ(兵庫県西宮市)を協力校・組織とする。
 - ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
 - ・交流支援

2 . 平成23年度の活動

☆平成23年4月26日(火)

都留第二中学校、禾生第一小学校、 禾生第二小学校の3校合同による「や まなし心づくり研究指定校事業」の公 式ホームページ作成・運用にむけての 打ち合わせ。

☆平成23年8月19日(金) 9:00~12:00 都留市小中学校情報教育連絡会、南都 留視聴覚教育連絡会でのホームページ

作成・支援研修会の開催(参加者:25名)

☆平成23年8月25日(木)

兵庫県明石市教育委員会・教育センターでの教材データベースに関する調 査の実施

- ☆平成23年10月13日(木)
 - 9:30 **旭小学校訪問 (校長先生、教頭** 先生へのプロジェクト説明)
 - 10:30 都留市教育委員会訪問(教育長、 学校教育課長へのプロジェクト 説明)
 - 16:00~17:00 都留第二中学校パソコ ンクラブと情報ゼミ生との遠隔 交流

☆平成23年10月15日(土)

子どもアトリエ (兵庫県西宮市) 訪問、主宰者の上田由紀子氏に対しプロジェクト説明、協力への承諾を得る。

☆平成23年12月22日(木)

旭小学校訪問(担当の渡辺先生と打ち合わせ)

☆平成23年2月15日(水)

南都留地区美術教育研究会において プロジェクト説明

☆平成24年 3 月13日 (火)

都留市内小中学校教員へのメールア ドレス配布について打ち合わせ



作成、運用を始めた、都留第二中学校区「やまなし」心づくり研究指定校事業のホームページ

☆図工・美術作品データベース作成プロジェクト(たからばこ作戦)

「表現活動における作品のデータベー ス化」ということです。「表現活動」とは、 児童・生徒が与えられた手法(音楽、美 術、習字、詩、俳句等の創作活動) を用い てそれぞれの心象を表現することであ るが、子どもたちは、クラスメートや同 級生といった身近な存在の作品を見て、 聞いて、感じた、その感情を自分たちの 作品に生かすことにより、自然に表現力 の向上につながっていたのが常であっ たと考える。しかし、最近の少子化の現 状においては、子どもたちが接すること のできる作品そのものの数が、大きく減 少している。また、大学生においても、 表現力・コミュニケーション力の不足 が指摘されているが、従来は、個々の日 常生活の中において育まれてきたはず の、自分の考え、感情を他に伝える資質、

すなわち自己表現力の低下の原因の一つが、こうした面においても指摘されるのではないだろうかとの考えから、新たな領域として、初等教育学科美術教室と連携して「図工・美術作品のデータベース作成」について、旭小学校、子どもアトリエを当初の協力校・組織として研究することとした。



外部サーバーに作成したデータベース作成・運 用サイトのホームページ

3. 平成24年度における活動予定

都留第二中学校区 やまなし心づくり 研究指定校事業への支援 遠隔授業・交流プログラムの実施 小中学校教員の情報教育研修会の実施 学生による小中学校の公式ホームページの作成と運用に対する支援 たからばこ作戦の実践

平成23年度「地域美術教育」活動報告

【活動指針】

平成23年度より、地域交流研究センターの「発達援助部門」の新分野として、「地域美術教育」が認められたことにより、美術教室全体で地域の美術教育を通した地域貢献活動の一つの形として実践できることになり、これまでの活動から更に発展する機会ととらえることができた。活動の主軸として次の3つを掲げる。

- 都留市内小・中学校教員との勉強会 「都留市教育協議会美術研究部学習会」 の運営
- 2) 都留市立旭小学校と兵庫県の造形教室「こどもアトリエ」との連携による研究活動「たからばこ作戦」への取組み
- 3) 都留市だけでなく山梨県内各地から の美術を通した要請に対する積極的 な協力支援

【今年度の活動実績】

- ・2011/6/22 (金) 都留市川茂保育園にて、 市民生活課より依頼のあった人権紙芝 居「たねをまこう」の初披露
- ・2011/8/1 (月) 美術棟において「都留 市教育協議会美術研究部学習会」を開 催。酒巻先生を講師として、新しい教 材について制作体験を中心に教育現場 での可能性について意見交換を行った。
- ・2011/10/13 (木) 午前9:30 旭小学校で、 「たからばこ作戦」について説明を行っ た。 (校長先生、教頭先生)
- ・2011/10/13 (木) 午前10:30 都留市教育委員会で、「たからばこ作戦」について説明を行った。(教育長、学校教育課長への説明)
- ・2011/10/15 (土) 子どもアトリエ (兵庫県 西宮市) 訪問、主宰者である上田由紀子氏 に対して新プロジェクト「たからばこ作戦」 について説明、研究協力を依頼した。
- ・2011/12/22 (木) 旭小学校にて「たから

ばこ作戦」担当、渡辺先生と打ち合わせ。

- ・2012/2/15 美術棟において、「都留市 教育協議会美術教育研究会」を開催。 講師:本学杉本光司先生 「ICTシステムを使った作品データベースの可能性 と評価」について意見交換を行った。
- ・来年度に行われる山梨県立美術館との 共催によるワークショップ「アート巣 箱を作ろう (仮)」について実行委員会 を立ち上げた。

【平成24年度の活動計画】

- ・ワークショップ「アート巣箱をつくろう」の開催(7月15日)
- 「都留市教育協議会美術研究部学習会」 の開催
- 研究プロジェクト「たからばこ作戦」 の継続

(文責:鳥原正敏)

暮らしと仕事部門とは

田中夏子

暮らしと仕事部門では、学生、教員がともに地域社会における人々の生活や生業に学びつつ、これからの地域を構想し、担っていくための示唆を見出す取り組みを行っています。2011年度は、第1に、従来から行ってきた「農のある暮らし」学習会開催、第2に、農に関心を寄せる学生たちのネットワーク組織「農ネット」活動の支援、第3に、「世界と地域を結ぶ学習」の三つの柱に加え、2011年3月11日に発生した東日本大震災に関わる調査・学習活動を行いました。

2011**年度活動報告**

1.地域に学ぶ「農のある暮らし」

(1) 学習会の開催

昨年結成された、農に関心を寄せる学生たちのネットワーク組織「農ネット」との

共催で、学習会を開催しました。本年度は、 鳴沢村でオルタ農園を経営する萱場和雄 (かやば かずお) さんをお招きし、「大豆栽培を通じて、地域・社会に関わる?固有種の大豆栽培ネットワークの取り組みとその社会的意味?」について講じていただきました (2011年5月24日火曜日18時~20時まで。学習会の様子は、地域交流センター通信21号13頁参照)。お話からは、大豆が、その地域の自然や農法を考える題材であると同時に、加工、販売を構想していくことで、いろいろな人を結びつけるきました。市民の方も6名参加くださり総勢15名の学習会となりました。

(2) 学生による長期農村インターンの 支援

社会学科の授業「現代社会と市民参加」では、地域づくりの最前線で活躍なさって

ている方々からお話をうかがっていますが、座学から実践的な学びへと接続するには、どのようなプログラムが有効か、 課題となってきます。

「現代社会と市民参加」でお呼びした 藤尾正英さん (NPO法人えがおつなげて) のお話に共鳴した学生 5 名 (社会学科 1 年)が、農村における地域づくりの研修を 希望したため、上記のような問題意識も あって、これを支援・コーディネートし ました (履修年次が 1 年のため、授業とし てのインターンに位置づかないものです)。

テーマは特産品開発で、主として身延 町の小規模集落において、曙大豆の栽培、 加工やそれを支える地域づくりを実地に 学び、総活動時間140時間という本格的な 研修を実施しました。田中は、実習期間 中、受け入れをいただいている指導者 (身延町 遠藤嘉一氏)を訪問、また最終 報告会に参加して関係者と意見交換をし、 農村インターンのノウハウを教えていた だきました (内容は環コミプログ参照)。

2.「農のある暮らし」をめぐる学生団体のネットワーク「農ネット」の支援

昨年に引き続き、「農ネット」の支援を センター事業として掲げましたが、学生 による活動が安定的に展開され、今年で は販売事業に関わる相談を受けたのみで ものは、8月にスタートし、9月、10 月、12月(11月は雨天のため中では、8月にスタートし、9月、10 月、12月(11月は雨天のため中で は、11月は雨天のため中では試動 といる段階ですが、本学期待を 合む教職員や県庁職員からも、その ましの声をいただいています。その ましの声をいただいています。 は農文協「季刊 地域」にも、簡単なが ら紹介されました(朝市については、「地 域交流センター通信」20号29頁参照)。

3.世界と地域を結ぶ学習:地域社会の 開発問題や紛争について学ぶ

第3世界で起こっていることと、私たち の暮らしとのつながりを学ぶため、年一回、 開発問題の講義を担当の佐伯奈津子先生 に企画をいただき、講演会を開催していま す。2011年度は、「チョコレートがつなぐ イラクと福島の子どもたち」と題して、日 本イラク医療支援ネットワーク (JIM-NET) 事務局長の佐藤真紀さんに、イラク と福島での活動についてお話しいただき ました (講演内容については、"地域交流 センター通信』21号28ページに掲載)。イ ラク戦争には日本も人道復興支援の名目 で自衛隊を派遣しましたが、そこでは、多 くの市民、特に劣化ウラン弾によって、ガ ンになる子どもたちが多く存在すること 等、お話いただきました。JIM-NETは、こ うした子どもたちの支援を行ってきまし たが、原発事故以来、フクシマとイラクを 結ぶ視点で活動を展開しています。

4. 震災を受けての地域調査・地域活動

年度当初に計画として盛り込んでいたわけではないものの、地域社会を構想していく際、地域社会が踏みつけにされる震災の被害構造について、学ぶべき課題は多いと考えます。その一環として、岩手県釜石に赴き、社会学科の高田研氏、およびNPO法人ねおすのコーディネートのもと、6月、8月、12月、2月に地域調査を実施しました(調査概要については、「地域社会研究」22号、2012年3月、13頁)

2012年度計画

本年度も、第1に地域産業の担い手を講師とした学習会の開催、第2に農に関心をよせる学生の自主的な活動支援、第3に世界と地域を結ぶ視点での学習会の開催、第4に被災地における地域復興の取り組みに

ついての調査・研修活動等、四つの柱を 踏襲していきます。

第4については、5月21日に岩手県大槌町のNPO法人吉里吉里国に赴き、漁家による森づくりの取り組みに参加をさせてい

ただいて、関係者からお話を聞き始めたと ころです。秋にはスタディーツアーを企画 しており、農林業に関心のある学生を中心 としたフィールド学習を予定しています。

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動2011年度 第8回 地域交流研究フォーラムの報告

『大田堯先生とともに考える "生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ…』

杉 本 光 司

平成24年1月28日 (土) に第8回地域 交流研究フォーラム『大田堯先生ととも に考える"生きる"こと、"学ぶ"こと、そし て未来へ・・・』が開催されました。以 下にその概要を報告します。



地域交流研究センターにおける活動の 三つの柱、「フィールド・ミュージアム」、 「発達援助」、「暮らしと仕事」の各部門の 内、「フィールド・ミュージアム」は、その 源を、1977年から1983年まで、本学学長と してご活躍され、その中で、本学を地域と 自然に根ざす大学として、「都留自然博物 館」構想を提唱した、大田堯先生に遡るこ とが出来ます。2011年7月には、大田堯先 生のドキュメンタリー映画『かすかな光へ』 が完成、東京での上映を皮切りに、全国へ

と広がり、本学でも、2011年11月23日に 「文大名画座」で上映会を開き、多く方た ちに感動を与えてくれました。2012年1 月16日には、伝統ある映画雑誌「キネマ旬 報」文化映画部門において第8位に選定さ れました。この映画における都留文科大学 やフィールド・ミュージアムとの関わり の深さを基に、また、寄せられた多くの感 動を基に、この映画を中心としたフォーラ ムの開催を企画し、地域交流研究センター における年間最大行事であります、第8回 地域交流研究フォーラムを2012年 1月28 日(土)に開催いたしました。テーマは、 「大田堯先生ととともに考える"生きる"こ と、"学ぶ"こと、そして未来へ...」と題し、 「かすかな光へ」の上映を基調講演として とらえ、その後は、大田先生をお迎えして の懇話会を企画しました。しかし、大田先 生の怪我というアクシデントのため、都留 までの移動が難しいとのこととなり、急きょ、 大田先生の自宅と大学を結んだネット中 継ということで、大田先生にはスクリーン を通しての参加ということで開催いたし ました。中継には情報ゼミ3年生の受講生 が協力してくれました。

懇話会における司会は、初等教育学科の 佐藤隆教授にお願いしました。また、登壇 者には、西本勝美氏(初等教育学科 教授)、 小川弘一氏(山梨県富士・東部教育事務 所 主幹)、渡辺正司氏(谷村第一小学校 教諭)、織田宗覚氏(都留市社会福祉協議 会長)の4名にご協力いただきました。

会場には都留市内を中心に110名の方々

が集まり、映画「かすかな光へ」では、大い に感動し、続く、懇話会においては、さい たま市に住む大田先生への質問や感想に 対して、敏速かつ的確な言葉で次から次へ と展開される対応は、93歳という年齢は全 く感じさせず、そこに発せられることばの 一つ一つにさえ、また新たな感銘を受けま した。

参加した方々からは、大田先生が来ら れなかったことが残念だったこと、映画 の中で断片的に流れていたお話を全て聞 きたいという声、生きる力をいただいた、 そして夢を持つことの大切さを感じたと いうことばが多く寄せられました。一部 をご紹介させていただきます。

- ・人は自ら変わる力を持っている。教育はそれを手助けするもの。わが子は他人以上に ちがう。子供をどうにかしようとか思わず、あきらめることという言葉は納得できる とともに安心しました。新聞の折り込み広告は自己中心的にするものであり、子供化 する、などなど参考になりました。教育とは、生命とは、生きるとはについて考えさ せられました。大田先生の生きざまそのものが勇気を与えてくれました。また夢を抱 くことの大切さを改めて感じました。 (大月市在住、60代)
- ・とても感動しました。本当に、今回の議演に参加して良かったと思います。まだ、私 は大学生で教師へ向けて頑張っていますが、もし今自分が教師になっても果たして、 子供達の前に立っていい存在なのかとても不安です。今回の講演を通して、私は「ど うですか?」を常に考えて自分で行動を起こしていきたいと思いました。ありがとう ございました。 (都留市在住、20代)
- ・教育は、「命と命のひびき合い」であるという大田先生の言葉が印象的でした。思わぬ アクシデントにより、ネットビデオでのフォーラムになりましたが、事務局の方々の ご苦労をお察しします。直接大田先生のお声を聴けて、参加してよかったです。

(都留市在住、50代)

アンケート集計結果

参加者110名の内57名からご回答いただきました (51.8%)。

1.お住まいはどちらですか?

都留市内 (37) 都留市以外 (20) 【山梨県内 (18)・山梨県外 (2)】 参考:受付名簿110名の内訳「都留市 (71)、山梨県内 (29)、山梨県外 (10)』

2.年齢を教えて下さい。

~19歳(3) 20歳~29歳(14) 50歳~59歳(11) 60歳~69歳(12) 30歳~39歳 (2) 40歳~49歳 (3) 70歳~79歳(9)80歳~(3)

3 . このフォーラムをどこで知りましたか?

ポスター・チラシ (6) 都留市広報 (1) 知人から (12) 新聞 (26) 大学ホームページ (1) 授業で (9) その他 (2)

4 . 出席して頂いた目的は何ですか? (複数回答可)

「**かすかな光へ」を観たいので** (33) 地域・社会福祉に興味があるので (14) 大田堯先生に興味があるので (36)

都留文科大学に興味があるので (4)

地域交流研究センターに興味があるので (10) **その他** (2)

教育に興味があるので (26) 知識**の習得のため** (22) 都留文科大学の卒業生なので (6)

5.現在のあなたについて教えてください。

学生 (11) 教員 (7) **会社員** (3) **公務員・団体職員** (3) 主婦 (11) その他 (22)

(杉本光司:地域交流研究センター長)

平成23年度都留文科大学現職教員教育講座について

恒例の夏季集中講座を、例年の通り標 記のように『教師の子ども理解と学習指 導』というテーマで行った。

講座の趣旨

現在、日本の子どもたちの学力をめぐってはさまざまな角度から「問題」とされており、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのかをめぐっては議論の中心になっているといってよい。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策がそれぞれの学校や教師に求められているのが現状だといわざるを得ない。

また、今年は東日本大震災、そして原発被害がいまだ続いているなかで、いま子どもたちをどのように支えるのかということは、現地から離れた山梨でも当然考えていかなければならないテーマとなっている。

今回は以上をふまえ、一人ひとりの子 どもを理解することをベースに、子ども の思考や感情・感覚に即した学習のあり 方を探ることとした。とくに、学校での 生活の大部分を占める授業の場面で、子 どもを支える学習指導のあり方を深めて いくことを追究した。

テーマ: 教師の子ども理解と学習指導

日 時:平成23年7月28日(木)~

7月29日(金)

場 所:都留文科大学

2 号館101階段教室

会場: 本学 2 号館 101 教室

会場:本学2号館101教室

参加者:43名

日程と内容

【第一日目】7月28日(木)

	2-3. T-12 Juli √14X±
午前 9:30~午前 9:45	受講受付(本学2号館)
午前 9:45~午前10:00	『講座の趣旨について』 説明:杉本光司 (地域交流 研究センター長)
午前10:00~午前12:00	『子ども理解と学習指導』 講師:山崎隆夫 (本学非 常勤講師)
午前12:00~午後 1:00	休 憩 (昼 食)
午後 1:00~午後 3:00	『学習意欲を引き出す学びづくり』 社会科教育 を通して講師:田所恭介 (本学非常勤講師)

【第二日目】7月29日(木)

午前10:00~午前12:00	『教科に関する研究講座 』 を作る・国語 - 講師:鶴田誠司	
午前12:00~午後 1:00	休 憩 (昼 食)	
午後 1:00~午後 3:00	『教科に関する研究講座 』 を作る・算数 - 講師:植村憲治	

平成23年度都留文科大学市民公開講座

【テーマ】: 「Hello!英語でワクワク』

子どもたちが英語という外国語を身近 に知る機会を作り、さまざまな活動を通し て英語に触れることで、英語を使ってコミュ ニケーションすることの楽しさを感じて もらうことを目的とします。子どもが初 めての英語に慣れ親しむための活動とな るよう、ゲームを通してインストラクター や友達とペアワーク・グループワークを 楽しみ、歌を通して英語のリズムを身体 で感じさせることを通して、子どもが主 役になる場面を増やし、それぞれの活動 に達成感を感じられるような工夫をする。 この講座が、子どもたちにとってことば 以外の異文化に関する興味へとつながり、 さらには日本語や自文化に対する意識が 高まるような機会となることを期待する。

【日 時】2011年8月12日 (金曜日) 13:00~16:00

【場 所】都留文科大学 3号館 入口横ホール

【対 象】都留市在住の小学校3・4年生 10~20名程度

【講師】奥脇奈津美(本学准教授)、 英語教育ゼミ生9名

【趣 旨】・英語で自分のことを伝える

・英語の音やリズムに慣れる

・英語を楽しむ



都留市内の小学生18名が参加しました。この講座に参加していただいた親御さんからは、「・・略・・・全体を通して遊び心いっぱいの内容で、子どもたちのワクワクドキドキ感が増し、英語に興味の湧くものでした。今回ゲームで覚えた英語は、学校のお楽しみ会や地域活動のゲームとしても、きっと子どもたちが楽しめるものになるでしょう。すばらしい講義をどうもありがとうございました。と便箋6枚の感想をお寄せいただきました。当日の状況や参加者の親御さんからお寄せいただきました。当日の状況や参加者の親御さんからお寄せいただきました。当日の状況や適信20号」30・31ページをご覧ください。

(文責:杉本光司)

平成23年度県民コミュニティカレッジ講座

『都留の自然と暮らし ~自然と共生したまちづくりのために~』

【講座概要】都留市は自然が豊かな町です。自然は豊かな恩恵を私たちにもたらしてくれると同時に、地震などの災害ももたらします。今回の講座を通じて都留市に生息する動植物などの生態

や、地震と火山の関係について 知ることにより、都留のことを より深く理解していただけれ ばと思います。さらに、地産地 消の観点から当大学で開発し た「豆腐キット」(あおはた大豆 原料)の豆腐を試作し、豊かな 恵の恩恵を確認することもで きます。 【対象者】市民、自治体関係者、教育関係 者、学生など、どなたでも聴 識いただけます。

特に、都留市の自然や文化について興味のある方。

【会 場】(第1回~第3回)都留文科 大学 附属図書館 4 階学習室 (第4回)都留文科大学1号 館 105教室

【時 間】午前10時~正午

【内 容】

【第1回】 11月12日 (土)

テーマ:カワラナデシコの咲く町へ

- 都留市におけるカワラナデ

シコの分布と現状 -

講 師:坂田 有紀子

(初等教育学科 教授)

(講義概要)

"なでしこジャパン"の活躍によって「カ ワラナデシコ」という植物の存在を知った 方も多いと思います。秋の七草の一つであ るカワラナデシコは、日本女性の代名詞で もある「大和撫子」の語源となった植物で、 古くから日本人に愛されてきましたが、現 在は日本各地で絶滅が危惧されている植 物の一つです。都留市にも昔は河原がピン ク色に染まるくらいたくさん自生してい ましたが、今では小さな自生地が数カ所残 るのみです。今回の講義では、カワラナデ シコの特徴や、2008年から市民の皆さんの 協力を得ながらおこなってきた研究成果 を紹介しながら、今後、都留市に残された カワラナデシコをどのように保全してい けばよいかを皆さんと考えたいと思いま す。

(講座の様子と参加者からの感想など)

当日は、参加された多くの市民の方とともに学びました。現在は減少しているが、かつては 都留市内にも多く自生していたことや、外来種と地域に自生しているものの違いなど、様々な お話がありました。また、後半では参加者からの質問に回答したり、逆に参加者から市内に自 生している場所を教えてもらったりと、とても楽しい講座となりました。最後には、プランター で育てるように参加者へカワラナデシコの種がプレゼントされました。

- ・都留市内でカワラナデシコの大群を見た時は、本当に心躍る気分でした。
- ・地域の方の協力や、カワラナデシコに対する熱い思いが伝わって、すばらしいと思い感動しました。
- ・都留市での分布状況が把握できて良かった。
- ・何年か先に、カワラナデシコの花が咲いてくれればいいなと思います。
- ・カワラナデシコは、古くから日本人の心情・感性をとらえたすばらしい花だと思います。

【第2回】 11月19日 (土)

テーマ:自然災害から身を守るために

- 都留の自然災害危険度 -

講師:中井均

(初等教育学科 教授)

(講義概要)

皆さんは3月11日の東日本大震災で自 然災害の脅威を改めて感じられたことと 思います。残念なことに、日本は世界に 冠たる自然災害大国です。行政もさまざ まな災害対策をしていますが、東日本大 震災でも明らかになったように、自然災害から身を守るためには住民の防災知識・ 防災意識が決定的に重要です。今回の講 座では、自然災害とは何か、都留で起こ る可能性が高い自然災害、自然災害にど のように対処するか、などについて考え ます。

(講座の様子と参加者からの感想など)

地震・火山噴火・台風・土砂災害などの自然災害の発生メカニズムや過去の災害状況などを ビデオや模型などを用いてわかりやすく説明されました。また、都留市内の断層地域や地すべ り危険箇所など、また、かつては「せきどめ湖」があったことなどの説明もありました。

- ・都留市で起こりうる自然災害の危険性を学ぶことができて、とても考えさせられました。
- ・減災のために、自然災害と共生した街づくりが必要だと思いました。
- ・自分の住む都留市にも断層があるということがわかり、多くの住民の方にも教えてあげたい と思いました。
- ・火山や地震に関して、様々な例を示していただき、都留市の防災について真剣に考えなけれ ばいけないと感じました。
- ・自然災害については、地域で考え、過去の発生状況なども調べて備えるとともに、「自分の 身は自分で守る」ことの必要性も学ぶことができました。

【第3回】12月3日(土)

テーマ:地域は本物と出会える

生きた博物館

- 都留の自然と人びととの 暮らしの知恵に学ぶ -

講師: 北垣憲仁

(地域交流研究センター 特任准教授)

(講義概要)

都留市には身近にムササビやリスなど 魅力ある野生動物が暮らしています。自 然との関わりのなかで育まれてきた人々 の暮らしの知恵や記憶もあります。それ らとの出会いはいつも新たな発見や感動 を私たちにもたらしてくれます。今回の 講義では、都留の自然や人びとの暮らし の知恵や記憶の魅力を紹介し、私たちは そこから何を学び、またどのように未来 へと活かしていけばよいかみなさんとと もに考えてみたいと思います。

(講座の様子と参加者からの感想など)

雨にもかかわらず多くの市民の方が参加され、身の回りにある自然について学びました。貴重な写真や小動物が食べたクルミ、標本などを見せてもらうとともに、実際に手で触れて感じることもできました。また、ムササビの飛ぶ様子やヒミズ(もぐら科の小動物)が餌を捕る映像なども見ることができました。さらに、後半では参加者からの感想や、昔(小さい頃)の自然とのふれあい体験などの話を伺うことができ、とても楽しい講座となりました。

- ・ワクワクして野山を駆け回った子どもの頃のことを、懐かしく思い出しました。
- ・動物のお話や写真に触れるだけでも、何故か胸ときめき心温まる思いがしました。
- ・今回のような講座を、小・中学生にも聞かせてあげたいと思いました。
- ・動物との出会いなど、都留市という"まち"の良さがわかりました。
- ・都留市の自然を活かし、地域の活性化につなげていきたいと思いました。
- ・お話を聞いて、地域交流研究センターの役割が重要であると感じました。
- ・都留市の自然に焦点を当てて、文化として説明していただきとても良かった。
- ・フィールドミュージアム・大学・都留市と自然のつながりを楽しく学べました。

【第4回】 12月10日 (土)

テーマ:地産地消の観点から作成した

豆腐キットの実際

講師:吉住典子

(初等教育学科 名誉教授)

(講義概要)

生活環境科学ゼミでは、国が提唱している食育の一環である「地産地消」をテーマとして研究を続けています。昨年度は都留

市内の食関連の生産物を調べ、その生産物を使ったレシピ集を作成しました。その中で大学発の特産品として「手作り豆腐キット」を作成しました。それには、都留市特産の「あおはた大豆」および「水かけ菜パウダー」を利用しています。今回は手作り豆腐を作ります。また、当日はおからのレシピを記載した"しおり"も配布する予定です。

(当日の講座の様子と参加者からの感想など)

最初に吉住先生から「大豆についての豆知識」の講義をしていただき、引き続いて4名の学生サポーターにも参加してもらい、4 班に分かれ「手作り豆腐キット」を用いて豆腐作りに挑戦しました。

1.あらかじめ水に浸しておいた「あおはた大豆」をミキサーで粉砕。(できたものを生呉といいます) 2.生呉を煮ます。 3.それを「こし袋」でしぼります。(この際、「おから」と「豆乳」ができます) 4.「にがり」を投入して、10分ほど待ちます。

上手に固まってくれますように!!

各班で「にがり」を投入する際の条件を変えて、「手作り豆腐」に挑戦しましたが、どの班も上手につくることができました。

その後、出来立ての「手作り豆腐」と「おからドーナツ」をみんなで試食してみると・・・・・

- ・皆さんから「とても美味しい」との声! 最後には「あおはた大豆」がプレゼントされ、楽しくておいしい講座となりました。
- ・「地域の特産物」を使用して、実際に作業することができたのでとても楽しかったです。
- ・学生さんとも交流ができて良かったです。
- ・今後も、今回のような「地域の活性化に繋がる講座」を受講したいと思う。
- ・はじめて「手作り豆腐」を作りましたが、とても美味しくできて良かった。

(文責:杉本光司、小俣昌寬)

研究報告会の開催

初等教育学科の植村憲治氏から、平成23年6月13日、都留市内の保育園を対象とした、ご自身の研究成果の地域への還元を目的とした講演会の開催依頼が寄せられました。そこで、地域交流研究センター会議で検討の結果、講演会でなく研究報告会として「都留文科大学地域交流研究センター」の主催で開催することにいたしました。

【題 名】「幼児における数を覚える前の数量の概念」

【日 時】平成23年8月20日 (土曜日) 午後2時~午後4時30分 【会 場】都留文科大学 2号館202教室 【対象者】保育士、小学校・幼稚園教諭、 幼児の保護者、幼児教育に関 心のある方

【発表者】植村憲治(初等教育学科教授) 【概要】平成22年度に市内保育所を10 数回訪れて、幼児が持つ数の 概念を調べる実験をしました。 これらの実験結果と、家庭で も可能な数の概念理解を高め る指導法をお話します。また、 保育士による実験参加報告を 行います。

【主 催】都留文科大学地域交流研究センター

【日 程】

司 会:橋中百代(谷村第1小学校教諭) 午後2時~ 実践報告 渡邊きよみ(宝保育所主任保育士) 午後2時25分~4時 植村憲治による発表 午後4時~4時30分 質疑応答

本人の感想を「地域交流センター通信20 号」から一部紹介させていただきます。 「地元を中心に40名以上が参加し、人数にも満足できました。幼児を連れて夫婦で出席したいという問い合わせがありました。大学でのシュシュの催しに興味をもった育児中の夫婦が安心して二人で出席できるためには、幼児を預かる体制が必要であると痛感しました。

なお、当日の状況の詳細につきましては、「地域交流センター通信20号」33ページをご覧ください。

(文責:杉本光司)

『地域交流研究』8号の原稿 地域交流研究センター会議

2012年6月6日

『地域交流センター通信』の発行

1.本年度の発行の特徴について

本年度も、発行計画に基づき、20号、21 号を発行した。しかし本年度は「3・11」 (地震、津波、福島第一原発) を経験した ため、「通信」発行は、名状しがたい気持 ちと緊張感のなかでの特別な意味をもつ ものとなった。とくに大学という研究・ 教育の共同の機関において、お互いの、 さまざまな経験と、簡単には言語化でき ない感情・思いを受け止め、それを交わ し合うという「広場を設定する」という ことが極めて重要であるように思われた。 そして、地域交流研究センターの機関誌 「地域交流センター通信」こそ、その役割 を果たすべきだと思われた。そこで編集 小委員会、編集会議で提案・検討し、当 初の編集素案を変更し、「地域交流センター 通信」として、本学関係者の深刻な経験 と思い、そして被災地支援の取り組みな どを可能な限り受け止め、表現し、記録 することとした。巻頭文もそのような趣 旨をもつものとしてお願いした。また 「地域・故郷を思う 東日本大震災と私た ち 」という特集を2号連続して組むこ ととした。

2 . 編集作業の流れについて

この「センター通信」の編集過程は、各号とも、編集長の素案(編集長は日常的に関連情報の収集に努めておく)をもとに編集小委員会で原案を作成し、編集会議(=地域交流研究センター会議)で検討し(主に巻頭文と特集について)、基本内容(編集案)を決定する。それに基づき、編集小委員会で割付などの検討に入る。

編集小委員会では、ページ数、原稿依頼担当者など詳細な事項を確認してから原稿依頼に入る。設定スケジュールに沿って原稿を集め、それから「流し込み」(集まった原稿のデジタル化したものを行った原稿のデジタル化したものを行った原稿のデジタル化したものを行った。それから校正作業を原則3回繰り返し、レイアウトや写真の貼り付け、印刷業者と色調整など確認作業を繰り返業者と色調整など確認作業を繰り返業者ともの場、納品となる。

それから配布・配置、各方面への送付 などの作業をし、また執筆者などへのお 礼の対応を並行して行なう。

編集小委員会は、本年度も編集長(畑)、 副編集長(田中夏子氏)、編集統括者(北垣 憲仁氏) は継続し、このほかに、交代して 着任した地域交流研究センター事務職員 の今泉圭一朗氏が加わり、四名で構成した。

3 . 発行日とページ数

第20号は、2011年12月14日に発行した。 36ページである。

第21号は、2012年3月13日に発行した。 40ページである。

4 . 各号の編集内容と反響について

[20号]

「20号」ということなので、当初は"記念号"にする発想ももっていたが、「3・11」という衝撃を受けることになった。そういう状況であったため、昨年度の19号 (3月18日発行)の配送作業も事後対応も滞りがちであった。誰もが「3・11」ショックに向かう構えを少しずつ「模索」しながら、という経緯であったと思うが、「通信」20号の編集作業も、その「模索」の共同の営みであった。

巻頭文は、「心のケア」という立場から 被災地支援にあたられた近藤直司氏(都 留児童相談所・所長)にお願いした。近 藤氏は「東日本大震災の被災地支援に参 加して考えたこと」と題して、月日の経 緯にともなって変化しつつある生々しい 事態と支援の見地について、丁寧にご報 告くださった。

特集は「地域・故郷を思う 東日本大 震災と私たち」とし、都留文科大学と いう観点を基本にして次のような構成を とった。三名の学生たちの手記(教授会 で情報提供をお願いし協力を得ることが できた)、本学教員の避難生活の手記、「3 ・11」直後から開始された被災地支援 (災害ボランティア活動の経過と参加学生 たちの感想など)、あるいはボランティア 活動をサポートする立場からの経験報告、 被災者の心のケアを考える公開講座、本 学教員による被災地調査報告、福島第一 原発事故とメディア報道に関する講演会、 社会学科からの東日本大震災を受けての 提案資料、福島県からの自主避難者によ る講演、大学職員による「3・11」当日 の記録、本学の「節電対策」経験、とい う内容編成である。

「3・11」(とそれ以降)という未曾有の事態に対して、自分(たち)につながる友人や同僚たちがどこでどのようなことを経験し、活動し、感じまた考えているかをお互いに知り合っていくことは、何としても大事なことだろう。本特集は、そのための貴重な手がかりになったと思う。各執筆者のご協力に、心より感謝申し上げたい。

本特集にたいしては、全国から格別な 反響があった。その一部を、次に抜粋し て掲載する。

「…ポスト3・11にふさわしい、しかも 学生主体の心のこもった原稿が目白押地 で、心打たれるものがありました。現地 いわき市の小林英子さんの講話と、どれ もた泉さんと望月さんの文章も、くどれ もた泉さんと望月さんの文章も、文とれ ・文ともいい境の一生主で を表す。大田充子の大田充一 を表するとも心に響きます。大田充子のなる ることも心に響きます。大田充子のなる ることを表す。大田充子の を表するとないたから はます。なります。 はいたがなります。 はいたがなります。 はいたがなります。 はいたがなります。 はいたがなります。 はいたが、第20号の成功に心から敬意 ものです。」(一橋大学名誉教授)

「いろいろ考えさせられながら読ませていただきました。今回の災害を一つの節目として流れを変える、復興と創造の主役になっていくのは若者たちです。期待しています。」(元都留文科大学非常勤講師、長野県佐久市)

「…2011年の3・11後の事態はなお進行中ですが、日本人の記憶に長く深く留めておくべき大災害であり原発事故です。 私も被害状況に接すると今も心が痛みます。今回の(特集)企画で、立派な文集をまとめられたと思います。とくに地震 と津波を直に経験された学生さんたちの体験と思いには痛切なものがあります。また、大学としてのボランティア活動をはじめとする取り組みは、いま大学は何をすべきかに応えたものと考えます。後々の資料としても保存したいと思います。...」(元大阪市立大学教授)

「地域交流センター通信をお送りいただきましてありがとうございます。にわかに感想を言葉にできない程に痛切なことも語られていて、よくぞ文字に残して下さったと思います。私などは、顔もみたことのない遠い親戚を亡くしただけでも思考停止してしまうほどなので、震災これではなおのこと、そう感じています。センターの意義や通信の内容が、これまでよりもさらに切実な意味を帯びているように感じました。…」(東京大学)

「…都留文大の教職員の皆様や学生さんが多数東北各地の支援にお出で下ったこと、とてもうれしく思います。テレビなどの映像でみるのとは違い、現地えるなことを運ぶと、いろいるなことを考したちにとかなるだけでなく、学生されたちにとか伝わってきます。復旧・復興といるが正直な思いです。これからもいろいるな情報が交換できればと思います。…」(東北福祉大学)

20号では、「トピックス」欄ということであるが、好評であった市民公開講座と市民からのお便り、美術教室による「人権紙芝居」の製作、などなど多彩な実践について掲載することができた。

[21号]

今泉吉晴氏による巻頭文は、「くらしを 見直す多彩な証言 北上山地の山小屋で3 ・11を経験する 」と題するもので、氏 は、大地震の様相、急斜面の表土とヒミ ズのこと、陸前高田市の津波被害に関す る証言のこと、原発事故に対する考え方 など、ご自身の「3・11」経験をひろく 語って下さった。その末尾では、「小さな 目立たないできごとをふだんから注視す ること」の重要性が述べられている。

ところで「3・11」経験は、私たちに改 めて「自然」「地域」(暮らし・生業・文 化)というものをつよく意識させた。そ して、地域交流研究センターが積み上げ てきた諸実践の意味を考えさせた。それ で特集1は「自然との出会いに心を向け暮 らしの伝統を見つめ直す」とし、あらゆ るものの源としての「自然」に注意力を 向ける実践、地域の暮らしの営みに「自 然」と共生する民衆的知恵の結実を見出 していく実践に光を当て、そのような取 り組みを介して地域の小学校との交流や、 人と人とのつながりが再生していく事実 に目を向けていこうとした。多彩で貴重 な諸実践をこのように構成してみると、 それぞれが「3・11」経験が提起するこ とがらと深くつながっていることが直感 されてくる。

特集2は、「地域・故郷を思う 東日本 大震災と私たち (続編)」とした。内容は、 1.岩手県での本学社会学科第一期生によ る教育実践と本学教員による釜石調査報 告、2.山本安夫名誉教授執筆による本学 における放射能測定について、イラク戦 争と福島第一原発の学習会、原発事故に よる学生の実家の農業の苦悩、3.四つの ポランティア活動の実践報告、という三 つの領域で構成した。

このように、特集1と特集2とは、相互に関連するものとして編集をすすめた。 そして改めて巻頭文に目をやると、その内容が自ずと二つの特集を媒介するものとなっていることが見えてくる。

5.2012年度に向けて(発行予定と課題)

イ)「3・11」が私たちに与えている意味 の観察・考察と諸般の交流は今後もセ ンター「通信」として重視していくこ とが大事だろう。「地域交流」というこ との意味、そして地域交流研究センターの役割理解と重ねて、センター「通信」の内容の協議を進めていきたい。また、発行された「通信」の合評的交流の機会を設定することも課題である。

ロ)「通信」の発行は、現在、大学の学期に 規定されて「12月」「3月」ということで、 限られたスタッフの「無理」をぎりぎり 少ないものにするよう、運用している。 結果的に、2号分の発行間隔が短く(発 行のない期間が長く)、読者に与える印 象という点でも、また一部の実践が古く なって記事にしにくくなるといったこ とからも、現状には問題がある。

それで来年度は、22号の原稿を9月中に集め、11月中旬に発行することを 試みたい。

八)前号でも指摘したことであるが、コミュニケーションホールの「防音」という課題が、地域交流研究センターの設置以来、まったく対処されないまま放置されている。本年度も音楽系サークルが演奏でした。地域交流研究センターを表が状況確認を行ない、直察局に申し入れ、また地域交流研究センターをも機関代表者として対処の必要を訴えた。コミホの設計・建築の段階では、音楽系サークルの演奏に使用することは想定されていなかったということであり、道理に合わないかたちで、事務局が該当学生サークルに使用許可

を出しているということになる(あるいは、本来「センター」にふさわしい施設確保が必要だということである)。結果的に、本年度も壁、床、窓から伝わってくる「騒音」のため、センターの「通信」編集作業が止まり、その他のセンター事業の環境が悪化した。来年度は、事務当局のこのような現状放置の怠慢は許されない。

- 二)「地域交流研究 第7号」が原稿は揃っているのに刊行されなかったが、センター「通信」に関しても、その謝礼(原稿料)の措置が著しく滞った。専任の職員を配置しないことの無理が、センター活動を阻害しつつあると考えられる。なお配属された非常勤職員は、慣れない仕事を覚えようと努力し、「通信」編集作業を精一杯担ってくれた。そのようにセンター活動を支える個の担当職員は努力して下さっている。
- ホ)昨年度から提案している原稿料振込み手続きの件であるが、小額の原稿料の場合は「郵送のみで対応できる方式」が望まれる。会計監査上の壁があるということであるが、会計監査に耐え得る運用(チェック)システムをつくるなど、事務局の検討・工夫をお願いしたい。
- へ) 2012年度は、22号を2012年11月に、23 号を2013年3月に発行する予定である。 (文責:畑 潤)

Ⅲ-4 科目『地域交流研究Ⅲ』の開講

(「地域交流研究Ⅲ」担当 杉本光司)

平成22年度までは、社会学科の専門科目「地域学」との同時開講科目として、また、山梨県観光部の「山梨魅力メッセンジャー事業」との連携により、山梨の風土、歴史、産業等を学びながら、自分の生活を見直すとともに、山梨県の魅力を広く報せる「山梨魅力メッセンジャー」の認定を受けることができる科目であった。

しかし、今年度は、「地域学」との連携は

なく、地域交流研究センターにおける教養科目として開講することになった。また、今年度からの山梨県観光部の新規事業でもある「やまなし観光カレッジ事業」との連携が始まった。この科目は、下記に示すように、10回の講座、2回のフィールド・ワーク、そして1回以上のイベント・ポランティア参加という3つの要素から構成されている。

	日程	テーマ	講師	備考
1	10月6日	開講式、授業ガイダンス	杉本 光司	
2	10月13日	山梨県の概要	横小路 稔	山梨県観光部
3	10月20日	山梨の歴史	小畑 茂雄	山梨県立博物館
4	10月27日	観光と地域活性	佐藤 あづみ	(財)キープ協会企画部
5	11 月 10日	富士北麓の地域振興	小佐野 常夫	前河口湖町長
6	11 月 17日	山梨と富士山	横尾 幸江	ひめねずみ社
7	11 月 24 日	山梨の果実	堀内 圓	甲斐いちのみや金桜園
8	12月1日	郡内織物の新しい挑戦	前田 市郎	甲斐絹座(前田源商店)
9	12月8日	都留の自然	西 教生	都留文科大学非常勤講師
10	12 月 15 日	だっちもねえこんいっちょし	五緒川 津平太	作家(本名:大堀卓)
11	12 月 22 日	甲州印傳	上原 勇七	(株)印傳屋上原
12	1 月 12 日	まとめ	杉本 光司	

日程	方面	視察先
11月12日(土)	郡内地域	山梨県環境科学研究所、山梨県立富士ビジターセンター、 富士吉田歴史民俗博物館、都留市尾県郷土資料館
12月3日(土)	国中地域	かいてらす、山梨県立博物館、大日影トンネル、シャトー 勝沼





大型パス2台で郡内・国中地域の施設を中心にフィールド・ワークを実施 (左:山梨県環境科学研究所研修ホール、右:大日影トンネル)

受講者数は110名であったが、山梨県による「やまなし観光カレッジ事業」修了認定の条件、

- 7割以上の講義の出席
- 1回以上のフィールド・ワーク参加
- 1回以上のイベント・ポランティア 参加

山梨県観光行政に対する提案レポート提出、

という4つの条件をクリアして修了者と して認定された者は、受講者の8割、87名 にもなり、「山梨魅力メッセンジャー事業」との連携時代も含め、最大の人数となった。特に、今回からは、地域で開催されるイベントへのボランティア参加という条件が加わったが、震災による各種イベントが中止となるなどの状況の中、「ヴァンフォーレ甲府のホームゲーム」、「甲州かぼちゃ祭り」、「山梨よっちゃばれ祭り」、大学の「いこいのひろば」等への運営スタッフとして、また、大学近くの「寺川河川清掃作業」に参加する等、多くの学生が工夫して山梨県

内各地でボランティア活動を行った。

また、県立桂高等学校からの依頼を受け、10月20日、27日、11月10日、24日の4回には、毎回、高校2年生40名ほどが受講した。彼らが大学の講義に対し熱心に耳を傾ける姿は、大学生にとっても非常に良い刺激となったように感じた。出席した高校生の一人からは、出前講座とはちがい、大学での生の授業に触れて、高校とは違う雰囲気を味わえて良かったとい

う感想が書かれていた。

1月25日には、加藤学長、山梨県観光部の方々の出席をいただき、山梨県による修了認定証の授与式が開催された。受講者の感想の多くは、山梨県で生活していながらも何も知らなかったという現実と、山梨に関する多くの魅力を発見でき、山梨がとても好きになった、また、もっと早くこの授業を受けておけば良かったという4年生の言葉などが寄せられた。

Ⅳ. 地域貢献活動

Ⅳ-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度(平成23年度)は11月4日(金)、 富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に 第14回目の集会が開催された。日程につ いては、本学教員が参加しやすい桂川祭 期間中の開催を配慮していただいている。

今回の第14回集会は、下に示すような7

つの常設分科会が設置され、それぞれ2 本程度の実践レポートをめぐって検討・ 討議がおこなわれた。本学からは、助言 者として、第1分科会に筒井潤子(初等 教育学科)、第3分科会に泉 桂子(社会 学科)、第4分科会に西本勝美(初等教育 学科)、第5分科会に前田昭彦(社会学科)、 第7分科会に杉本光司(情報センター) と、5つの分科会に本学教員を充てること ができた。特に、前田昭彦先生には初め て参加いただくことができ、これからも 地域貢献活動に対して、他の教員の参加 が望まれる。

第1分科会: 幼稚園・保育園・小学校部会

第2分科会:小学校・中学校部会

第3分科会:中学校・高校部会

第4分科会:小・中・高児童生徒部会

第5分科会:行政・地域団体・学校部会

第6分科会:特別支援教育部会

第7分科会:PTA部会

「新たな接続の視点」

「スムーズな連携の中で健やかな成長を 見守る」

「地域を支える子どもたちの育成をめざして」 「地域の中で体験を通して育つ子どもたち」 「地域が子どもを成長させ、子どもが地域を 発展させる」

「連携を通し子どもたちの成長を支える」

「子どもを守り育てるPTA活動」

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」(地域の子どもは地域で育てる)をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有している。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留という、よ

り広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が

特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれないかと事務局と意見交換もしているが、実現は難しいようである。

この点で、6年前から、集会に先立つ10 月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前に打ち合わせをおこなう機会を設定していただいたのであるが、主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一歩進められたと言えよう。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

今年度も、教育に関心を持たれている 多くの分野の方々が南都留地域から約300 名も集まり、全体集会、その後の分科会 へと積極的に参加し、それぞれの提案に 対しても熱心に質問を行うなど、確実に、 地域の恒例フォーラムとして認知されて いるように感じた。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はもわめて高く、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。これでの本学教員の「地域教育」へ、貢献が切実に求められており、実際ことで再認識させる結果であった。引き続き、再認識させる結果であった。引き続き、育支援担当)との連携を密にしながら、より発展的な協同のあり方を追求したい。

(文責・杉本光司)

Ⅳ-2. 都留市子ども教室事業

1.「子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場 所づくり事業」(平成16年度)および「地域 教育力再生プラン」(平成17・18年度)を発 展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協 議会を推進主体として、都留市教育委員会 社会教育課生涯学習担当が事務局を担っ て実施している6年目の事業である。「学 校の体育館やグランド、図書室等に安全・ 安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、 大学生、社会教育関係者などを活動指導員 として配置し、小中学生を対象とした放課 後や週末などにおける遊び、スポーツ、体 験活動、学習支援などの様々な活動を行う」 もの。本学の学生には学生指導員としての 協力・活動が期待されており、平成16年度 から20年度までの5年間は、本学教員の西 本勝美(初等教育学科)が、21年度からは 杉本光司(情報センター)が大学側のコー ディネーターとして、「都留市子ども教育 連絡協議会委員」として担当している。な お、平成19年度より、市町村が費用の3分 の1を負担することとなり、県下の多くの 類似事業が廃止となるなかで、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、本年度(2011年度)はこの運営形態での5年目となり、一昨年度からは、学童保育事業との連携も開始されたことにより、市内全地区への拡大を希望する声も多い。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、4地区(東桂、宝、谷村第二、旭の各小学校区)の住民の協力体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小学校が体育館やグランドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない平日の場合もあり、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約にもかかわらず、今年度も積極的に参加する学生がおり、リピーター学生が少なくない状況からも学生たちに高い評価を得ている結果としてとらえることができる。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価

をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習や「学校参加(SAT)」とはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになろう。

2 . 今年度 (2011年度) の活動状況

前年度に引き続き、東桂、宝、谷村第二、旭の4小学校区において、各地域協働のまちづくり推進会などの協力を得て子ども教室が実施された。小学校のグラウンドや体育館、公民館などの小学校周辺の公共施設、野外などにおいて、遊び、自然・農業体験活動、料理、文化的活動、ものづくり活動、その他特別活動や交流活動が実施された。

教室名 (開始年度)	実施 回数	延べ参加者数 (登録者数)	延べ指導員数 (学生含む)	主な活動内容
桂子ども教室 (H16~)	41回	523人 (137人)	162人	・遊び(スポーツ、昔の遊び、ゲート ポールなど) ・自然体験(野菜作り、山歩き、釣り
宝っ子クラブ七里 (H18~)	400	457人 (38人)	184人	など) ・ものづくり(手芸、陶芸、竹馬作り
三吉子ども体験教室 (H18~)	42 回	468人 (46人)	146人	など) ・料理(収穫した野菜でお菓子作り、 もちつき、小正月の団子など)
旭子ども教室 (H19)	440	677人 (61人)	201人	・その他(絵画、将棋、囲碁、書道、 学習支援、座禅、ボランティア活動 など)

本年度(平成23年度)は、昨年度(59回、127名)に比較すると大幅に減ったものの、東桂小、谷二小、宝小、旭小の4拠点校から、年間で計42回・76名の学生指導員派遣の要請があったのに対し、計28回(20年度:34回、21年度:59回、22年度:56回)、延べ40名(20年度:52名、21年度:90名、22年度:97名)の学生を派遣することができた。これは、学内外における震災ボランティア募集とも重なった時期でもあり、募集説明会に出席した学生も例年より少なかったものの、前年に引き続き参加してくれた学生もいた。

3. 放課後児童健全育成事業 (学童保育) との連携について

一昨年度からは、全4教室において、 学童保育の子どもたちにも「子ども教室」 への参加を積極的に呼び掛け、学童保育 を実施していない日(日曜日など)にも、 一緒に活動できる居場所として「子ども 教室」を開催し連携を図った。

4 . 指導員についての課題

平日に活動をする遊びの指導が不足している。特に子どもと一緒に遊べる指導 員が少なく、学生を頼りにしている部分 が大きい。

(文責・杉本光司)

1.「文大ボランティアひろば」とは

本事業は、平成20年度に開始された取 り組みである。平成20年5月に、都留市 社会福祉協議会の森嶋美子氏と、西本勝 美地域交流研究センター長(当時)とで 相談・打ち合わせをおこない、「地域のボ ランティアニーズと本学学生を引き合わ せるシステム」の構築を目指すこととなっ た。ただし、福祉系の学部・学科を持た ない本学では、授業とタイアップした取 り組みは難しく、「大学ポランティアセン ター」の設置はさらに難しい。そこで、 学内にある学生ボランティアサークルを 土台として、緩やかな「連絡協議会」的 な会合を持つところから始めることになっ た。相談過程で重視し、両者で共有した 「原則」は、

ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。

それぞれのサークルの個性や独自性 を最大限に尊重し、新たな負担をか けない。

活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。

といった事項であった。本事業の発展的 継続にあたっては、常にこれらの「原則」 に立ち戻りつつ、取り組みを見直してい くことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会 (森嶋氏)からの呼びかけと日程調整を経て、平成20年6月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「ソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の3団体であり、平成21年度からは、学内の「Work - Waku都留」も主軸サークルの一つとして参加した。さらに、今年度からはIKI (いこいのひろば支援サークル)も加わった。会合の内容は、前回の会合以降の各団体からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地

域のボランティア・コーディネーターか らの意見などが中心である。社会福祉協 議会にとっては、とりわけ大学生対象の ボランティアニーズを持ち込む「窓口」 ができたことが大きく、サークル各団体 にとっては、近場のボランティアニーズ を周知できること、相互の活動に触れて 刺激を受け合えること、これらを通じて 各団体の活動が活性化されることが大き い。また、会合の名称については学生た ちの発案に委ね、最終的に「文大ポラン ティアひろば~だれでもどうぞ~」(略称: ぼらひろ) と命名された。この名称は、 各サークルには所属していない個人とし ての学生や、一般の住民の参加も歓迎す るという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は発足以来、基本的 には第4水曜日の午後6時15分から4号 館2階会議室にて開催されることとなっ たが、回数を重ねるにつれて、各サーク ルの活動を超えて、参加サークルや個人 が協働しておこなう活動への期待も高ま り、先ず「ペットボトルのキャップを集 めて世界の子どもたちにワクチンを届け る」活動に取り組むことから始めた。学 内の5カ所に回収ボックスを設置し、各 サークルが当番で回収し、毎月、都留市 社会福祉協議会に届けている。さらに、 ボランティアひろばでは、新しい取組み を始める際には、その都度、新しいプロ ジェクトチームを立ち上げて対応するこ とにした。こうした中から、平成21年度 には「障がいのある方々の余暇活動支援」 について新たな取組みが開始され、同時 に、ここに参加する学生もこれまでのよ うな部活動やサークル活動に属しない個 人参加学生も迎え、定例会には毎回20名 を超す学生・社会人が参加するようにな り、徐々にではあるが、学生たちの間に 着実に浸透しつつあることを実感できる ようになった。学生と社会人とをつなぐ 調整役として地域交流研究センター長の 杉本光司も出席している。

2.「いこいのひろば」の誕生

ボランティアひろばでは、社会福祉協議 会や市内の組織・団体を通して募集され る、学生ボランティアの要請に対して、積 極的に多種多様な活動に参加してきたが、 以前から、そのボランティア活動に参加し ている、市内の授産園「みとおし」で働く 人たちとの交流の中から、日常的に、 障が いのある方々への支援が、何かできないだ ろうかという声により、平成21年5月に 「ここに集うメンバーで、とにかく何かー 緒に始めてみよう!」という新たな目標が 掲げられた。そして、当初から中心メンバー の一人として参加している、「授産園みと おし」の佐藤保成さんから提案されていた、 「障がいのある方々への余暇活動支援」の 実現のための取組みを行うことにした。 「文大ボランティアひろば」の交流から派 生したプロジェクトとして位置付けるこ とにより、関心のある人たちが気軽に参加 できる場として、その名称も「いこいのひ ろば』と名付けた。「障がいの有無に関係な く、地域に住む人たちみんなが楽しく充実 して過ごせる地域」を目指し、学生だけで はなく、地域に住む方々と共に、1ヶ月に 1 度イベントや企画を定期的に行えること を目的としたプロジェクトである。そこで、 障がいのある人たちとその身近にいる人 たちの声をじっくり聞こうということで、 この新しい活動は平成21年7月1日に始 まり、2回の試行活動後、平成22年10月か ら正式に「いこいのひろば」の活動が開始 された。

この活動は基本的に毎月1回開くこと を目標に、活動母体となる体制づくりか ら始めることにした。

先ず、活動指針となる企画書の作成であるが、先進組織としている、東京都渋谷区恵比寿にある、知的障害者恵比寿教室「えびす青年教室」で作成した企画書を参考とさせていただいた。この、「えびす青年教室」は、渋谷区教育委員会が、主に知的障がいのある方々の社会教育活動の支援並びに、社会的ハンディキャップを背負った社会

参加の一環を助成するため、障がい者ボランティアが一緒になって活動できる場・ プログラムを提供することにより、障がい 者とボランティアの人間的成長、相互理解・ 信頼関係の構築等を図ることを目的とし て、原則として毎月一回支援プログラムを 開催し、積極的に活動している場所である。

「いこいのひろば」企画書 (一部抜粋)

(1) 事業目的

障がいの有無に関係なく、地域に 住む人たち全員が楽しく充実して過 ごせる地域づくりを目的とする。

(2) 主催者 いこいのひろば実行委員会

(3) 対象者

知的障がいのある人で、都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」まで通うことのできる18歳以上の人。および、こうした活動に関心のある人。原則として登録者が活動に参加できることとする。

知的障がいのある人で、18歳以上の人のことを「参加者」と呼ぶ。 参加費を毎回100円程度集金する (プログラム内容によっては追加料金)。

(4) 開催場所・回数・時間

原則として都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」で行い、プログラム内容によって館外で活動することもある。

原則として毎月1回、第3日曜日、 年間10回 (8月・2月休み)。

開催時間

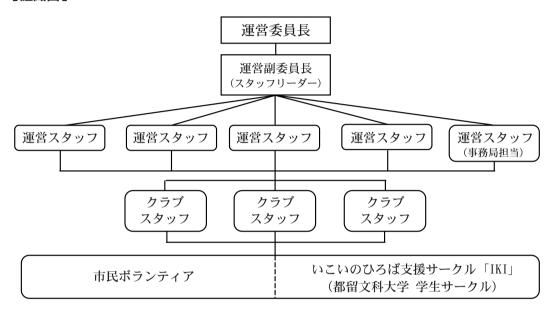
参加者:午前 9 時45分~ 午後 3 時30分。

スタッフ、ボランティア:午前9時 00分~午後5時00分まで(事前準備、反省会含む)。

(5) 運営体制・組織図

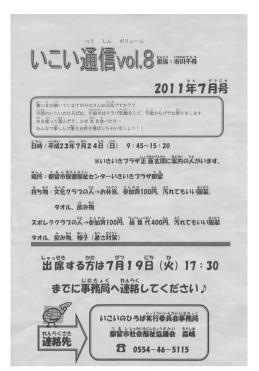
本事業の目的を達成するために、参加者の要望をふまえたプログラムを 安全かつ丁寧に実施していく必要が ある。そのために、障がい者生活支援 の経験のある方に組織に入ってもら い、スタッフ、ボランティアの勉強会 も適宜行っていく。プログラムの企画・ 運営はスタッフとボランティア中心 で行うが、希望やプラグラムに応じて 参加者も参加する運営体制をとって いく。また、ボランティアは、人数把 握や個人情報保護の観点から参加者 と同様に登録制にする。

【組織図】



平成22年10月10日に第1回目の「いこいのひろば」がスタートし、平成22年度には4回開催した。そして平成23年度においては、学生たちの休暇と重なる8月と3月を除いて毎月開催し、平成23年2月のまとめの会において通算14回目となり、保護者や見学者も含め、47名もの方々が出席してくれた。

毎回の開催に向けて、各会の担当者が中心となり、3回の打ち合わせ会を開き、入念な打ち合わせを実施する。1回目は主にプログラム内容について、2回目は、「いこい通信」の発送、3回目は、参加者の把握、当日のプログラムに合わせた役割、日程確認、準備すべきもの等について打ち合わせをする。



9:00 ボランティア集合/朝の介ち合わせ (2階: 機能鎖輪室)
9:45 藝術音集合/朝の谷 (2階: 機能鎖輪室)
10:00 文化クラス ~ 演劇論~
スポレククラス バーベキュー
12:00 警官
13:00 いこいのひろはフチ夏祭り | 輸投げ、スーパーボール強い、シューティングゲーム、かき家
15:00 繰りの器
15:20 藝術音解散
15:30 スタッフ、ボランティア検査器
17:00 発金解散

「いこいのひろば」登録者および市民ボランティアに発送する「いこい通信」

【平成23年度「いこいのひろば」開催 の状況】

第5回:平成23年4月17日(日) 午前9時45分から午後3時20分

場所:都留市保健福祉センター

いきいきプラザ都留

参加者:15**名**、

スタッフ・ボランティア12名

担当者:中村哲平 (学生)、 佐藤保成 (市民)

・午前:親子&グループウォークラリー

・午後:ゆったりお茶会&クラブ活動

についての話し合い

第6回:平成23年5月22日(日) 午前9時45分から午後3時20分

場所:都留市保健福祉センター

場 所:都留巾保健価値センター いきいきプラザ都留

参加者:12名、

スタッフ・ボランティア12名

担当者:坂田裕梨 (学生)、 片山さやか (学生)

・午前:クラブ活動 (文化: ちぎり絵、 スポレク: ボール遊び) ・午後:クラプ別に分かれて、リーダー 選びと年間活動計画作成

第7回:平成23年6月19日(日) 午前9時45分から午後3時20分

場 所:都留文科大学

参加者:15名、

スタッフ・ボランティア15名

担当者:片山さやか (学生)

・午前: クラブ活動 (文化: クレープ& スープづくり、スポレク: 卓球)

・午後:七夕飾り作成と屋外展示

第8回:平成23年7月24日 (日) 午前9時45分から午後3時20分

場所:都留市保健福祉センター いきいきプラザ都留

参加者:14名、

スタッフ・ボランティア12名

担当者:市川千尋(学生)

・午前:クラブ活動(文化:演劇シナリ オ作り、スポレク:バーベキュー)

・午後:「いこいのひろば」夏祭り

第9回:平成23年9月11日(日)

午前9時30分から午後5時00分

参加者:16名、

スタッフ・ボランティア16名、 運転手 (社会福祉協議会)、 看護師 (社会福祉協議会)

担当者:佐藤保成(市民)『一日バス旅行』

場 所: 静岡県沼津市沼津港周辺

・パス内レクレーション、沼津港周辺

散策、外食体験、買い物体験等

第10**回:平成**23**年**10**月**23日(日)

午前9時45分から午後3時20分

場 所:都留市保健福祉センター いきいきプラザ都留

参加者:13**名**、

スタッフ・ボランティア18名

担当者:天野奈穂子 (学生)

・午前:ハロウィン仮装合戦

・午後: クラブ活動 (文化: 演劇シナリ オ作り、スポレク: ジョギング)

第11回:平成23年11月20日 (日) 午前9時45分から午後3時20分

場所:都留市保健福祉センター いきいきプラザ都留

参加者: 9名、

スタッフ・ボランティア12名

担当者:中村哲平(学生) 「一日クラブ活

動。

・文化クラブ:演劇発表に向けて

・スポレククラブ: バドミントン (谷村 第二小学校) にて

第12回:平成23年12月18日 (日)

午前9時45分から午後3時20分

場 所:都留市保健福祉センター いきいきプラザ都留

参加者:15名、

スタッフ・ボランティア16名

担当者:平賀優美(学生)『クリスマス会』

・午前:クリスマスケーキ作り、クリス マスカード作り、いきいきプ ラザ玄関ホールへの大型クリ

スマスツリー飾りつけ

午後:クリスマスを楽しもう!

第13**回:平成**24**年** 1 **月**15**日**(日)

午前9時45分から午後3時20分

場所:都留市保健福祉センター いきいきプラザ都留

参加者:13名、

スタッフ・ボランティア15名

担当者:谷内曜子(学生)

・午前:クラブ活動 (文化:ボーリング

大会、スポレク:楽器作り)

・午後:日本の伝統的なお正月遊びを 楽しもう!(巨大カルタ大会、

福笑い)

第14**回:平成**24**年** 2 **月**19**日**(日)

午前9時45分から午後3時20分

場 所:都留市保健福祉センター いきいきプラザ都留

参加者 14名、保護者 7名、

スタッフ・ボランティア12名、 見学者 (東部授産園みとおし

から) 14名

担当者:市川千尋(学生) 「クラブ発表会・

まとめ』

・午前: クラブ活動 (文化: 演劇リハー サル、スポレク: 楽器演奏練習)

・午後:クラブ別発表会、一年間の振

り返り

*まとめ

開催数:10回、参加者(含見学者)(延)

157人、参加スタッフ・ポラン

ティア(延)140人

3 . ホームページの運用

都留文科大学のホームページ内の『地域貢献活動』の中の「文大ボランティアひろば」のサイトを平成21年度に立ち上げ、活動報告を中心に記事の掲載をしている。このサイトの運用には、学生だけでなく、市民の方も関わり、それぞれが記事や写真の投稿を行い、責任者に任せるのではなく、みんなで作り上げるホームページの運用を目標にしている。

内容は、「ボランティアひろばって?」、 「今後のイベント」、「参加している人たち」、 「次回の打ち合わせ」、「エコキャップ回収 状況」、「会議録」、「記事の投稿やひろば に参加する方法」等を掲載している。



http://school.tsuru.jp:8081/borahiro/

4 .「いこいのひろば」パンフレット作成

新しい学生ボランティアの募集や、「い こいのひろば」について説明する際にわ かり易いパンフレットを作ろうというこ とで、IKIの所属学生が中心となり次 のような両面三つ折りパンフレットを作 成して活用を始めた。

(文責・杉本光司)



V. 地域交流研究教育プロジェクト 地域交流研究教育プロジェクト

たんぼクラブ ~ 稲作体験実習の取り組み ~

プロジェクトメンバー

- ・西本勝美 (代表・本学初等教育学科)
- ・田中夏子 (本学社会学科)

1.本活動の経過と活動概要について

「たんぼクラブ」は、2005年度から、都留 市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業 委員会および山梨県富士・東部農務事務 所の協力のもとに始まった活動で、以来、 本学近くの水田で学生と教員の有志が稲 作に取り組んでいる活動である。当初の 2005年度~2007年度の3年間は農務事務 所の計らいで山梨県の「ふるさと水と土基 金」の助成を受け、続く2008年度・2009年 度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置 付けられ、活動が大いに発展した。そして、 2010年度からは、「環境ESDプログラム」と の関連もあり、本学地域交流研究センター の「地域交流研究教育プロジェクト」に申 請し、採択された。今年度(2011年度)はプ ロジェクトとしての2年目であった。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種物の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え (手植え)、除草、稲刈り、はざ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も曜日毎の当番制でやり切っている (代掻き、秋起こし、脱穀・精米はJA等に依託)。田植え以後の無農薬栽培と、有機質肥料の使用によるぎりでしている。

昨年度 (2010年度) は、活動 2 年目となる社会学科の一部学生の提案により、「学生主体」の運営が目指され、前年度の作業日程・作業内容を踏襲しながらではある

が、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができ、晩秋の収穫祭も、これまでにない盛り上がりを見せた。なお、「環境ESDプログラム」の実習系への位置付けについては、同プログラムの実施開始が2011年度に延期となり、さらに実習系の履修は2012年度以降となったため、プロジェクト3年目となる2012年度には実現の見通しである。

2 . 今年度 (2011年度) の活動について

さて、プロジェクト2年目となる今年度 (2011年度) の活動であるが、昨年度から の学生主体の農業系サークルとしての運 営が定着し、前年度にも増して意欲的な 取り組みをおこなった。

具体的には「水苗代」と「一本植え」である。学生からの発案をきっかけに、4 月の半ばに中心メンバー3名+教員1名で長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの新たな挑戦であった。

昨年度まで育苗は都留市の育苗センター に委託していたが、今年度は田の一角に周 囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をま いて苗を育てる「水苗代」という方法を試 みた。これは農村でもほとんど見られなく なった古い方法であるが、これを手がける ことで米づくりの全行程をクリアし、苗の 生長のようすや旺盛な生命力を実感する ことができた。そして、通常の手植えの場 合よりも大きく育てた苗を、縦・横30cm (一尺) 間隔で1本だけ植える「一本植え」 という方法で田植えをおこなった。 稲は1 本だけ植えても根元から分けつして20~ 30本に増えるのであるが、田植え直後の見 た目は貧弱で、これで本当に分けつするの か、本当に収穫できるのか、学生ともども 心配になったほどであった。

しかし、結果は大成功であった。分けつはやや少なかったものの、これまでになく順調に生長し、病気や虫害もなく、背丈も高く、茎も太く、なにより稲穂が長くなった。もちろん、これらが一本植えで期待される効果である。また、一本植えで順調に生長した稲は見た目にも美しく、毎年通りがかりに見ているという市民の方から「今年はいいね」と声をかけていただいたとのことであった。

手植えであっても、前年度までの通常の植え方では分けつのようすがわかりにくいのであるが、今年度は1本が20本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはっきりとつかむことができた。これは米づくりの工夫を知るという点でも、稲という作物を深く知るという点でも大きな成果となった。

2.参加学生たちの感想から

「たんぽクラブ」の活動に参加した学生たちは、稲作体験をどのように受け止め、何を身に付けているのだろうか。本活動も今年度(2011年度)で7年目となり、経験の蓄積と学生たちのつながりは、当初の教員側の素朴なねらいを超えた活動の内実を生み出してきているようである。この間に集約したいくつかの感想から探ってみたい。

(1) 初体験と全過程への関わり

「私にとって初めての米作りでした。 一人暮らしを初め、自分で米をといで炊 くようになったことで、米に対する関心 が高まっていたのと、一部分の工程を抜 粋して行うのではなく、最初から最後ま で自分達の手で行うという点もやりがい がありそうだなと思い、参加しました。 米作りで大変だなと思ったことは、水見 です。夏休みもローテーションをくんで、 毎日誰かしら水見に行きました。・・・」

「小学生の頃、一度田植えをしたことはあったけど、草取りや、水見は、全

部農家の方にまかせっきりでした。今回、たんぽクラブで活動したことは、楽しかった、の一言では片付けられないし、本当に貴重な経験だったと思っています。 どんな作業も、慣れるまでに時間がかかったし、慣れてくると、その作業の辛さにお手上げ状態でした。・・・」

ほとんどの学生が、米づくりは初体験というところからのスタートであったが、田植えと稲刈りのみといったイベント的・部分的な農業体験ではなく、全過程に携わる活動への関心と意欲があったようだ。「全過程に携わる」ことは、教員メンバーが当初から意図していたことでもあり、農業という営みをそれなりのリアリティにおいて認識し、疑似体験するためには欠かせない観点であると考えていたが、そうした体験をあらかじめ期待していた学生も少なくないことがわかった。

(2)農業という労働の本質に触れる

「私は、今までお米を作ったことがなかったので、たんぽクラブを通じ、お米作りをしたことは、とても貴重な体験になりました。実際に体験してみるといれる作業、水量の調節などやとなった。なかでも一番大切だと思った。なか管理です。曜日ごとに担っても懐かしく思います。・・・」

「・・・1日でも放っておくと、土が乾いて地割れをおこしたり、かといって水を入れっぱなしにすると、水温が下がって藻が沢山生えてしまいます。米を作るということは、ほぼ毎日稲と付き合っていかなければならない、とても手がかかることなのだと感じました。

学生たちの感想は、米づくりに必要な 工程の多さ、各工程の重要性、各工程に 関わる労苦、およびタイムスパンの長さ への気付きに集中している。

とりわけ「水見」の体験は強烈であるようだ。週1回・朝夕の当番制ではあったが、

一人ひとりに課せられた責任の重さと作業の微妙さ・難しさは、学生たちに予期せぬ負担を強いた一方で、その負担感のなかから、「ほぼ毎日稲と付き合っていかなければならない」農業という労働が、自分の生活を大きく制約してくるものであること、言い換えれば、「生活を形作る」ものであることへの気付きを促したと思われる。週1回でも責任を持って続ければ、それを長期にわたって毎日続けることの「労働」としての「本質」は想像の及ぶところとなる。

また、学生たちの感想には、自然の摂理や作物の生長、各工程の科学的根拠と 妥当性への認識の深まりが散見されるが、 それが農業という人間労働にそくして看 取されている点も、「学生による農業体験」 の重要な一面であろう。

(3)農業の愉しみと喜び

学生たちは、予想以上の作業の辛さや難しさに当惑しながらも、「稲は生き物であって毎日水見をして調節しなければなりません」「稲が青々と育つ姿が毎日楽しみでした」といった言葉に表れているように、作物の生長に寄り添う「愉しみ」をも感じ取っている。そして、収穫・食の「喜び」に至る。

「・・・正直面倒だと思ったときもあったけれど、お米を収穫できたときは本当に嬉しくてたまらなかったです。むしろ大変な思いをしたからこそ、収穫の喜びは大きかったのだと思います。そして自分たちが作ったお米は本当に美味しい!本当にいい体験ができてよかったです!」

「・・・しかしその分、自分達で作った 米を初めて食べた時はとても嬉しかった です。炊き込みご飯も白いご飯もたくさ んいただきました。食が輸入に傾いてき ている中、自分達で食べるものを自分達 で作るという貴重な経験ができました。

「いつも天気に恵まれなかったのも、 作業の辛さに拍車をかけていました。もし あんまり美味しくないお米ができても、自 分が作ったお米なら美味しいだろうな、く らいに思っていたけど、収穫したお米は本 当に美味しくて、家族や友達に自慢してい ました。この経験を、また来年のたんぽク ラブにも生かしていけたらいいなと思い ます。」

学生たちの「喜び」は、単に「労苦の果ての喜び」に止まるのではなく、いわば「自ら食を作り出す」ことへの「喜び」であるように思われる。それゆえにこの体験は、少なからぬ学生たちにとって、新たな自己認識をもたらし、社会への新たな視野を拓く契機となっているのではないだろうか。

なお、2010年度、2011年度の活動を中心的に担ってくれた学生が、2012年度に向けてメンバー継続を呼びかる文章のなかで、「お米を育てる作業が日常の中にあるのと、ないのじゃ全然違う。田んぼが日常の中にある生活が今年も続きますように」と記しているのが印象的であった。本活動に継続的に関わっている学生のなかに、上記の「農業という労働の本質に触れる」で考察した内実が、たしかに培われてきているように思われる。

3.2012年度の活動に向けて

2012年度に向けては、いくつか課題もある。リーダー的な学生の継承問題、サークルとしての新規メンバー募集問題などである。2012年4月には新たな学生リーダーが決まり、活動を開始したが、なかなか新規メンバーが集まらないようである。なお、2012年度も「水苗代」と「一本植え」を継続することになった。

また、冒頭に記したように、「たんぽクラブ」の活動は、2012年度から「環境ESDプログラム」のうち「ナチュラルライフコース」の実習系(選択)として認定されることになるが、4月の段階では新規メンバーの増加には必ずしもつながっていないようである。

いずれにしても、2012年度は「地域交流研究教育プロジェクト」として一区切りの3年目となるため、状況を見極めな

「大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査」2011年度の報告

20120620 泉 桂 子

1.プロジェクトの概要

(1) 目的

目的 都留市の面積の8割以上が森林であるが、その状態は必ずしも大学周辺の根田のはおいてはない。本プロデュクトでは大相の調査を行いた本には、都ではない。本のではないではないでは、本では、本の動態を記録、観察する。

植栽木が陽光を確保できるよう に草刈りを行う。

植栽木、残存木の成長過程を捉えるために、少なくとも1回の 測樹を行う。

(2) 2010年度までの経緯

やまびこ競技場裏の都留市市有林 1 haを2008年度春に借り受けた。貸借にあたって山梨県森林環境部の「森づくりコミッション」制度を利用した。名称は「道路(どうじ)の森」とした。この森に関わって本学の他、山梨県富士・東部林務環境事務所(賃貸仲介者)、地域の林業会社(作業請負)にご協力いただいた。林相は放置されたアカマツ人工林である。上木に広葉樹が混交(ケヤキ・コナラ・ミズキ等)、下層はハナイカダ・クロモジが優先している。2009年10月の台風、2010年冬の積雪により倒木被害を生じた。

2008年度、2009年度フィールド体験に おいて林内での下刈り作業、樹種同定実 習などを継続して行ってきた。

2009年9月夏期集中授業「フィールドワー

ク 」において、道路の森での測量・毎木 調査を行った(「2009年調査」とする)。ま ず、道路の森の周囲測量をポケットコンパ スを使って行った。ほぼ方形、約100×100 mの森である。次に植生調査のため、水平 距離50m×30mの範囲に10m×10m格子に 杭を打ち込んだ。最後に植生調査を行った。 プロットの座標毎に胸高直径5センチ以 上の毎木について樹種、胸高直径、樹高、 上層木・下層木の別、生存・枯死の別、プ ロット内の位置、備考を記録した。アカマ ツの立木本数は224本/ha(なお、下記要旨 執筆時点から更に調査を進めたために数 字が異なっている)、アカマツの枯損率は 46% (立木に枯死個体が占める割合)、生存 木の平均樹高は22.5mであった。枯損は松 食い虫によるものである。

2010年4月、日本森林学会第121回大会 (筑波大学)において「文科系大学における 地域の森林を活かした教育への取り組み」 と題してこれまでの活動内容を発表した。 2010年5月、山梨県中央森林組合に委託し 枯死木・危険木の伐採、搬出を行った。こ の際地ごしらえを行い、林内の歩行ができ るようにした。2010年5月~7月に環コミ 専攻科目「フィールド体験」で実習授業を 行った。2010年8月、「フィールドワーク」 において、道路の森の周囲測量、測樹調査 を行った。2010年度は前年の172番までし か調査を終了できなかった。

2 . 今年度の活動報告

9月5~8日までフィールドワーク (履修者9名)において、道路の森の周囲 測量、測樹調査を行った。測定にあたっ ては西講師の指導が大きな助けとなった。 なお地域の有志の方1名に外部協力者と して指導を仰いだ。道路の森には約170本の生立木の樹木があることが明らかになった。2009年度の調査と比べると次のことが比較できる。

樹木に添付した番号(ナンバー テープ) の紛失が多いため、恒 久的なナンバリング方法を考慮 する必要がある (前年と同様)。 主な樹種はアカマツ (30本)、ケ ヤキ (36本)、ミズキ (30本)、 コナラ (16本) などである。そ の他クマノミズキ、クリ、アオ ダモ、イタヤカエデ、ウリカエ **デ、ウリハダカエデ、エンコウ** カエデ、サクラ(オオヤマ、マ メ、フジ、ウワミズ)類、クマ シデ、ミツバウツギ、ムラサキ シキブ、モミ、ヤマウルシ、ヤ マグワ、ホオノキ、マメガキな ど多様な樹木が見られた。イヌ ツゲ、ヒイラギナンテンなどは 鳥類が庭木を種子散布したもの と推察された。

なお昨年測樹を行った4年生は9月末 に行われたシオジの森測樹調査に参加し、 昨年度の経験とスキルを活かし、意欲的 に測定を行った。

次にフィールドワークに参加した学生 の感想を抜粋する。

- 【 A 君 】 森林の中で測定をするのは大変だった。斜面の傾斜がきつく、地面が雨でぬれていて滑りやすく足元が不安定で転んだりした。山の斜面の移動は草で隠れている倒れた木につまずいたり滑って転んだりしで怪我をする可能性があったので注意しながら移動をしなければならなかった。その場に立ち止まっていてもすごく体力を使った。斜面なので普段使わない足腰の筋肉を使い、疲労が蓄積するのが早かった。
- 【 B 君】普段の生活で中々入ることのない山に入ったことで気づいた点

が多々あった。当たり前かもしれないが木によって幹や葉の特徴が全然違うこと (中略)。山でギナーと呼ばれる私で種類 1 種名 1 種名 2 をでいた。今思えば大のといた。今思えば大のないた。今思えば大のないたのはこういった発見や楽があったからかもしれない。

- 【 C 君】山の中での作業は想像以上に未 知との出会いに溢れていた。見 た目は毒キノコにしか見えない タマゴダケは、実は意外と美味 ということに最初は信じられな かった。また山特有の種なのか、 規格外の大きさのアリやクモに 何度も遭遇した。 (中略) これ らの作業に使用していた専用の コンパスや高度計測器は今回の フィールドワークの作業のみに 適しているわけではなく、広く 応用できることがわかった。 (中略) 高度計測器においても建 設現場などで重宝されているほ か、使い方も簡単なため今回の ゼミのように学生が調査等に使っ ている場合もあり、とても汎用 性がある。
- 【 D 君】発見の中でも下草の繁殖力と力強さに驚いた。前回のフィールドワークから 1 年間ほぼ下草刈りが行われていなかった森の地面は下草に覆われており、杭を探すのに大変苦労した。このことから間伐に並び、下草刈りが重要視される理由がわかったと思う
- 【 E さん】山の中で測量するので、足場はあまりよくないし、体力的にも辛いし本当に大変だった。みんなが途中止めたい、面倒くさいなど思ったに違いない。しかし全然口に出すことなく、楽し

く和気あいあいと活動していく ことができた。

3 . 今後の課題

地域の方に歴史的な森林利用について 聞き取りを行うこと、林床が疎開してい るので、下草の管理、または高木性の樹 木の植栽などの措置が必要と考えている。 また樹木調査を継続的に行っていきたい。 (「地域交流研究センター通信。2012年3 月第21号に調査の詳述あり)

(付) 2011 (H23) 年度 地域交流研究センター担当教職員

杉本光司	情報センター教授	地域交流研究センター長 地域情報教育担当
佐藤隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長・ 発達援助部門担当
畑潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長 フィールド・ミュージアム部門担当
坂田有紀子	初等教育学科教授	フィールド・ミュージアム部門担当
田中夏子	社会学科教授	暮らしと仕事部門担当 地域交流センター通信副編集長
鳥原正敏	初等教育学科教授	地域美術教育担当 フィールド・ミュージアム部門担当
品田笑子	センター特任教授	地域教育相談室担当
北垣憲仁	センター特任准教授	フィールド・ミュージアム部門担当
小林泰憲	学生課長補佐	地域交流研究センター事務局
今泉圭一朗	センター担当事務職員	地域交流研究センター事務局

2011 (H23)年度 地域交流研究センター運営委員会委員

福	田	誠	治	副学長	鳥	原	正	敏	広報委員長
西	本	勝	美	初等教育学科	坂	田	有約	2子	初等教育学科
高	橋	宏	幸	国文学科	۸1	ミッシ	ュ・ギ	リス	英文学科
前	田	昭	彦	社会学科	重	畐	惠	子	比較文化学科
重	原	達	也	学生課長	小	俣	昌	寬	企画広報担当
清	水	王	也	市民代表(都留市まちづく	り支	援乜	ンタ-	-長)	

2012年7月31日 発 行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 電 話 0554-43-4341

印 刷 者 株式会社 佐野印刷

〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-3 電 話 0554-43-1611

地域交流研究

2011年度 年報 第8号

目 次

―――― 第8回地域交流研究フォーラム ―――― 『大田堯先生ととともに考える "生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ…』

開始及び主催者の挨拶	. 地域交流研究センター長	杉本 光司	4
基調講演として			
大田堯先生のドキュメンタリー映画『かすな	かな光へ』の上映		7
小川渡辺	隆氏(初等教育学科 教勝美氏(初等教育学科 教弘一氏(山梨県富士・東語正司氏(谷村第一小学校宗覚氏(都留市社会福祉)	授) 耶教育事務所 主 教諭)	
『第8回地域交流研究フォーラム』アンケー	トに寄せられた47名(の感想	30
——— 2011 (平成23年度)	活動報告 ——		
.2011 年度の活動について(概況)			36
各部門の活動 - 1 . フィールド・ミュージアム部門 - 2 . 発達援助部門 - 2 - 1 . S A T事業 - 2 - 2 . 地域教育相談室 - 2 - 3 . 地域情報教育 - 2 - 4 . 地域美術教育(新設) - 3 . 暮らしと仕事部門 . インターフェイスとメディアの活動 - 1 . 第 8 回地域交流研究フォーラムの開催			38
- 2 . 各種講座等の開催 (1)都留文科大学現職教員教育講座 (2)都留文科大学市民公開講座 (3)県民コミュニティーカレッジ講座 (4)研究報告会 - 3. 『地域交流センター通信』の発行(概況と第18 - 4. 科目「地域交流研究 」の開講	·19号)		
. 地域貢献活動 - 1 . 山梨県地域教育フォーラム南都留集会 - 2 . 都留市子ども教室事業 - 3 . 文大ボランティアひろば			78
V. 地域交流研究教育プロジェクト			87
(付)2011(平成23年度)地域交流研究センター	担当教職員・運営委員		93

第8回地域交流研究フォーラム

『大田堯先生とともに考える "生きる"こと、"学ぶ"こと、そして未来へ…』

2012年1月28日 (土)

都留文科大学